

県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

本吉遺跡

- 福岡県みやま市瀬高町本吉所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第226集

下巻

2010

福岡県教育委員会

県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

本吉遺跡

- 福岡県みやま市瀬高町本吉所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第226集

下巻

下巻 本吉遺跡

本文目次

V 本吉遺跡	1
1 I 区第1次調査	1
1) 調査の経過	1
2) 遺跡の概要	1
3) 検出された遺構	3
土坑	3
溝	17
ピット	18
遺物包含層	21
2 I 区第2次調査	43
1) 調査の経過	43
2) 遺跡の概要	43
3) 検出された遺構	45
土坑	45
溝	48
包含層出土の土器	49
出土石器	56
3 II・III区の調査	67
1) 調査の経過	67
2) 遺跡の概要	67
3) 検出された遺構	67
4 IV区(本吉条里跡)の調査	69
1) 調査の経過	69
2) 検出された遺構	69
大溝	69
小溝	74
排水口	74
5まとめ	75
1) 縄文時代の遺構・遺物について	75
2) 条里間連の遺構について	76

図版目次

- 図版 1 米軍撮影 みやま市瀬高町東部空中写真（1948年頃）
- 図版 2 1. I 区第1次調査区遠景（西から） 2. I 区第1次調査区遠景（南から）
- 図版 3 1. I 区第1次調査区全景（上空から） 2. I 区第1次調査区南遺構群（上空から）
- 図版 4 1. I 区第1次調査区北遺構群（上空から） 2. I 区第1次調査1号土坑（南東から）
3. I 区第1次調査3号土坑（南西から）
- 図版 5 1. I 区第1次調査4・6号土坑（南から） 2 I 区第1次調査5号土坑（南東から）
3. I 区第1次調査7号土坑（南東から）
- 図版 6 1. I 区第1次調査2号土坑（南東から） 2. I 区第1次調査8号土坑（東から）
3. I 区第1次調査9号土坑（西から） 4. I 区第1次調査12号土坑（東から）
- 図版 7 1. I 区第1次調査10号土坑（北西から） 2. I 区第1次調査13号土坑（南西から）
3. I 区第1次調査15号土坑（北西から）
- 図版 8 I 区第1次調査出土土器①
- 図版 9 I 区第1次調査出土土器②
- 図版10 I 区第1次調査出土土器③
- 図版11 I 区第1次調査出土土器④
- 図版12 I 区第1次調査出土土器⑤
- 図版13 I 区第1次調査出土土器⑥
- 図版14 I 区第1次調査出土土器⑦
- 図版15 I 区第1次調査出土土器⑧
- 図版16 I 区第1次調査出土土器⑨
- 図版17 I 区第1次調査出土石器①
- 図版18 I 区第1次調査出土石器②
- 図版19 I 区第1次調査出土石器③
- 図版20 I 区第1次調査出土石器④
- 図版21 I 区第1次調査出土石器⑤
- 図版22 1. I 区第2次調査区遠景（南西から） 2. I 区第2次調査区全景（上空から）
- 図版23 1. I 区第2次調査1号土坑（西から） 2. I 区第2次調査2号土坑（東から）
3. I 区第2次調査3号土坑（北から）
- 図版24 1. I 区第2次調査4号土坑（北西から） 2. I 区第2次調査4号土坑西側土層（東から）
3. I 区第2次調査4号土坑東側土層（西から）
- 図版25 1. I 区第2次調査5号土坑（北から） 2. I 区第2次調査5号土坑土層（西から）
3. I 区第2次調査6号土坑（西から）
- 図版26 1. I 区第2次調査6号土坑土層（北から） 2. I 区第2次調査7号土坑（南東から）
3. I 区第2次調査7号土坑土層（北から）
- 図版27 1. I 区第2次調査グリッドD内土器出土状況（西から）
2. I 区第2次調査グリッドF・J間ベルト内土器出土状況（東から）
3. I 区第2次調査グリッドKL間内小砾集中部（東から）

図版28	I 区第2次調査出土土器①
図版29	I 区第2次調査出土土器②
図版30	I 区第2次調査出土土器③
図版31	I 区第2次調査出土土器④
図版32	I 区第2次調査出土石器①
図版33	I 区第2次調査出土石器②
図版34	I 区第2次調査出土石器③
図版35	1.本吉遺跡II区全景（南から） 3.本吉遺跡III区1・2号溝状遺構（西から）
	2.本吉遺跡III区全景（南西から） 4.本吉遺跡III区出土石器
図版36	1.IV- 1区全景（北西から）
図版37	1.排水口SX01（北から） 3.IV- 3区全景（南東から）
図版38	1.本吉条里8トレンチ完掘状況
図版39	1.本吉条里21トレンチ北側東壁 3.本吉条里25トレンチ東壁
図版40	本吉条里出土遺物

挿 図 目 次

第1図	本吉遺跡I区遺構配置図(1/300)	2
第2図	落ち込み部出土遺物実測図(1/3)	3
第3図	包含層堆積土層図(1/60)	4
第4図	1・2号土坑実測図(1/40)	5
第5図	3~7号土坑実測図(1/40)	6
第6図	1~7号土坑出土遺物実測図(1/3)	7
第7図	8・9号土坑実測図(1/40)	8
第8図	8号土坑出土遺物実測図(1/3)	9
第9図	10~12号土坑実測図(1/40)	10
第10図	10~12号土坑出土遺物実測図(1/3)	11
第11図	13・14号土坑実測図(1/40)	12
第12図	13・14号土坑出土遺物実測図(1/3)	13
第13図	15号土坑実測図(1/40)	13
第14図	15号土坑出土遺物実測図①(1/3)	14
第15図	15号土坑出土遺物実測図②(1/3)	15
第16図	15号土坑出土遺物実測図③(1/3)	16
第17図	15号土坑出土遺物実測図④(1/3)	17
第18図	溝1出土遺物実測図(1/3)	18

第19図	ピット出土遺物実測図(1/3)	19
第20図	包含層出土土器実測図①(1/3)	20
第21図	包含層出土土器実測図②(1/3)	21
第22図	包含層出土土器実測図③(1/3)	22
第23図	包含層出土土器実測図④(1/3)	23
第24図	包含層出土土器実測図⑤(1/3)	24
第25図	包含層出土土器実測図⑥(1/3)	25
第26図	包含層出土土器実測図⑦(1/3)	26
第27図	包含層出土土器実測図⑧(1/3)	27
第28図	包含層出土土器実測図⑨(1/3)	28
第29図	包含層出土土器実測図⑩(1/3)	29
第30図	包含層出土土器実測図⑪(1/3)	30
第31図	包含層出土土器実測図⑫(1/3)	31
第32図	包含層出土土器実測図⑬(1/3)	32
第33図	出土石器実測図①(2/3)	33
第34図	出土石器実測図②(2/3)	34
第35図	出土石器実測図③(1/2)	35
第36図	出土石器実測図④(1/2)	36
第37図	出土石器実測図⑤(1/2)	37
第38図	出土石器実測図⑥(1/2)	38
第39図	出土石器実測図⑦(1/2)	39
第40図	出土石器実測図⑧(1/2)	40
第41図	出土石器実測図⑨(1/2)	41
第42図	包含層堆積土層図(1/60、略配置図は1/450)	44
第43図	1~4号土坑実測図(1・4は1/40、他は1/30)	46
第44図	5~7号土坑実測図(1/40)	47
第45図	遺構出土土器実測図(1/3)	49
第46図	包含層出土土器実測図①(1/3)	50
第47図	包含層出土土器実測図②(1/3)	51
第48図	包含層出土土器実測図③(1/3)	52
第49図	包含層出土土器実測図④(1/3)	53
第50図	包含層出土土器実測図⑤(1/3)	54
第51図	包含層出土土器実測図⑥(1/3)	55
第52図	包含層出土土器実測図⑦(1/3)	56
第53図	包含層出土土器実測図⑧(1/3)	57
第54図	出土石器実測図①(2/3)	58
第55図	出土石器実測図②(1/2)	60
第56図	出土石器実測図③(79・80は2/3、他は1/2)	61

第57図 出土石器実測図④ (1/2)	62
第58図 出土石器実測図⑤ (1/2)	63
第59図 出土石器実測図⑥ (1/2)	64
第60図 II区・III区遺構配置図 (1/300)	67
第61図 III区土層模式図	67
第62図 II区・III区出土土器・石器実測図 (1/3・2/3)	68
第63図 IV区周辺地形図 (1/2,000)	70
第64図 IV区遺構配置図 (1/600)	71
第65図 溝SD01・02実測図① (1/100)	72
第66図 溝SD01実測図② (1/100)	73
第67図 溝SD01土層実測図 (1/60)	74
第68図 本吉条里旧地形およびトレンチ配置図 (1/5,000)	77-78
第69図 1~7トレンチ土層実測図 (1/60)	80
第70図 8~21トレンチ土層実測図 (1/60)	81
第71図 24~28トレンチ土層実測図 (1/60)	82
第72図 本吉条里出土土器実測図 (1/3)	84
第73図 本吉条里出土土器・石器実測図 (1~5 : 1/3、6 : 1/2)	85
第74図 本吉条里出土石器実測図 (1~5 : 1/3、6~10 : 1/2)	86
第75図 山門郡の条里 (1/37,500 : 日野1978より一部抜粋)	88
第76図 本吉条里1坪模式図	89
第77図 条里復原図 (1/1,000)	90

上巻・中巻 本文目次

上巻 山門ガラン遺跡

I	はじめ	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の体制	11
II	位置と環境	12
III	山門ガラン遺跡	15
1	調査の経過	15
2	遺跡の概要	15
3	検出された遺構	16
4	まとめ	154

中巻 山門牛島遺跡

IV	山門牛島遺跡	1
1	2次調査	1
1	調査の概要	1
2	遺構と遺物	1
3	小結	26
2	3次調査1区	27
1	調査の概要	27
2	遺構と遺物	27
3	小結	60
3	3次調査2区	65
1	調査の概要	65
2	遺構と遺物	65
3	小結	103
4	4次調査	115
1	調査の概要	115
2	遺構と遺物	115
3	小結	122
5	5次調査	123
1	調査の概要	123
2	基本土層	123
3	遺構と遺物	123
4	小結	141
6	まとめ	142

V 本吉遺跡

1 I 区第 1 次調査

1) 調査の経過

平成18年6月の試掘調査の結果を受けて、本調査の必要から柳川土木事務所との協議の場をもつたが、同じく柳川土木事務所管内で国道385号線バイパス建設に係り本発掘調査を実施しており、体制がすぐには取れない状況であった。国道385号線関係の本発掘調査を終了する段階で、本吉遺跡の本調査に移行することとし、表土除去作業を開始したのは9月になってのことであった。表土剥ぎの結果、文化財は細長い帯状に広がっており、その他は若干の小ピットと不整形の落ち込みが存在することや、調査区を斜めに走る近代のクリークが存在することが判明した。縄文時代の遺物が集中する地点は、クリークより北側については土坑が検出される面まで重機により表土を除去したが、クリークより南側は包含層上面で留め、グリッドを設定し掘削することとした。また調査区北東の文化財が集中する地点に関しては路線内の範囲内で調査区を拡張し、グリッドを設定して堆積状況の確認を実施した。調査の結果、縄文時代後期前葉という北部九州では比較的事例の少ない成果が得られたため、2月3日に現地説明会を開催した。年度後半にはみやま市山川町内にて県道飯江長田線の発掘調査に急速対応する必要が生じ、本吉遺跡の発掘調査を中断する事態となつたが、予定とした年度内の調査完了を果たすことができた。

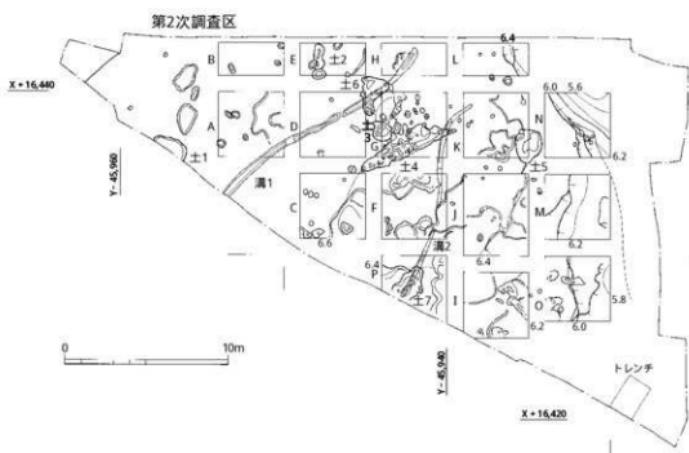
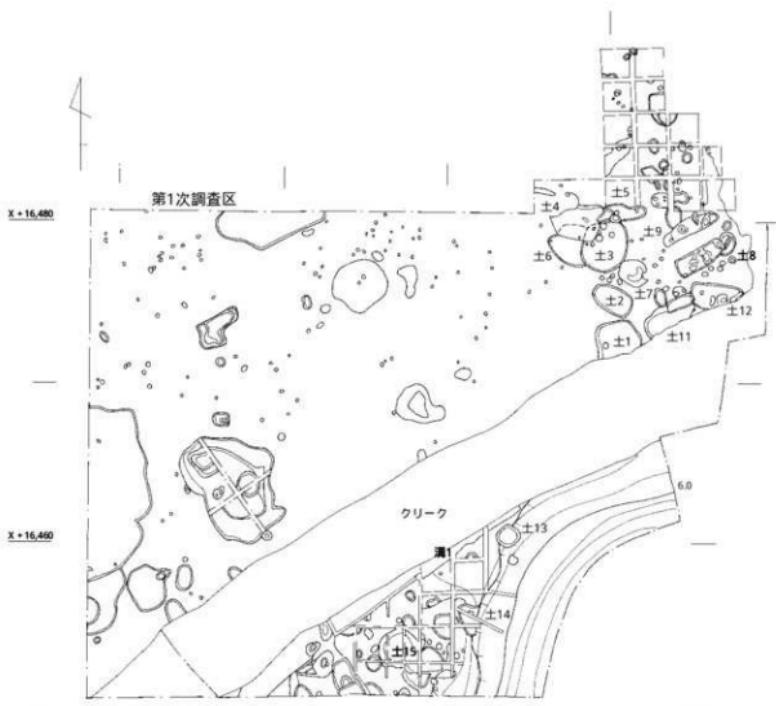
2) 遺跡の概要

第3図上段は調査区北東包含層の東西方向の土層図であり、左側が西となる。上層より2層が近年の耕作土である。3Aグリッドより西は耕作土下に暗灰黄色土の層が単調に続くが、この層にも縄文土器は含まれるものごくわずかな量である。4Aグリッド付近より東では耕作土の下面より遺物包含層が形成されている。耕作土直下には灰褐色土があり、その下面に遺構検出面があると判断される。しかし色調が類似し、遺物を多量に含む遺物包含層に切り込んでいるため、その面での遺構検出は非常に困難であり、大部分の遺構は地山面近くでしか検出できなかった。6Aグリッドから東側はクリークが走り、クリークより東側は試掘調査の結果から埋蔵文化財は希薄であると判断されたため調査を実施していない。

第3図中段は調査区北東包含層の南北方向の土層図であり、左側が南となる。基本的には上記東西方向の土層に傾向は一致するが、多数の遺物を含むのは



写真1 本吉遺跡現状



第1図 本吉遺跡 I 区遺構配置図 (1/300)

5A グリッドから5B グリッドにかけての範囲であり、堆積が複雑な状況を呈している部分である。北側は単調な堆積となっており、縄文土器の出土量もわずかといえる。表土直下にて縄文時代の遺物包含層が検出される状況や土層観察の結果から、本来は広く包含層が検出されている可能性はあるものの高い部分

は既に削平を受けているものと判断される。また平面的に遺構の分布状況をみると北東から南西に向かって帯状に遺構が分布し、遺物包含層のひろがりもそれに一致する。また、調査区南東側を中心に谷が形成されており、それに向かっても遺物包含層が検出されている。この谷への落ち込み部は第2次調査の調査区北東部で検出された落ち込み部に繋がるものと判断される。第3図下段はその調査区南壁際での土層図である。灰色ないし青灰色の粘質土が層をなして堆積する状況であり、土器等は急斜面をなす灰褐色土付近から集中して出土した。なお、具体的な出土層位は不明であるが、この落ち込み部から弥生時代後期のジョッキ形が出土している（第2図）。緩やかに口縁部・底部が外反する鼓形の体部で、底面は平底とみられ、幅広い把手をもつ。完形に近く図上復元しているが、小片の集合である。縄文時代以外の遺物は他にはほとんど出土していない。

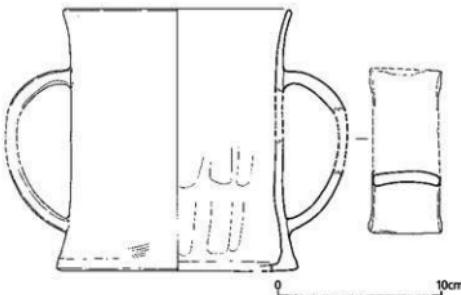
3) 検出された遺構

検出された遺構は土坑が中心であるが、形状が不整形なものが多く、性格の位置付けは不明と言わざるをえない。調査次はS-Oと順次遺構名を付して記録作成を実施したが、不明瞭な浅い落ち込み等も含んでいたため、報告にあたり第1表のとおり欠番としたもの等を整理して報告することとする。

土坑

1号土坑（第4図）

土坑群の西端に位置するもので、南側をクリークによりカットされる。平面プランはややいびつな隅丸方形を呈し、東西で2.7mを測る。深さは約20cmを測り、底面はほぼ平坦で、底面西端にてごく浅い小ピットを検出した。ただし土層観察によると底面には若干の凹凸があったとみられる。埋土は地山に近い灰黄色土であり、上層のマンガン粒を多く含む層を中心として縄文土器の出土がみられるが、大半は小片となる。

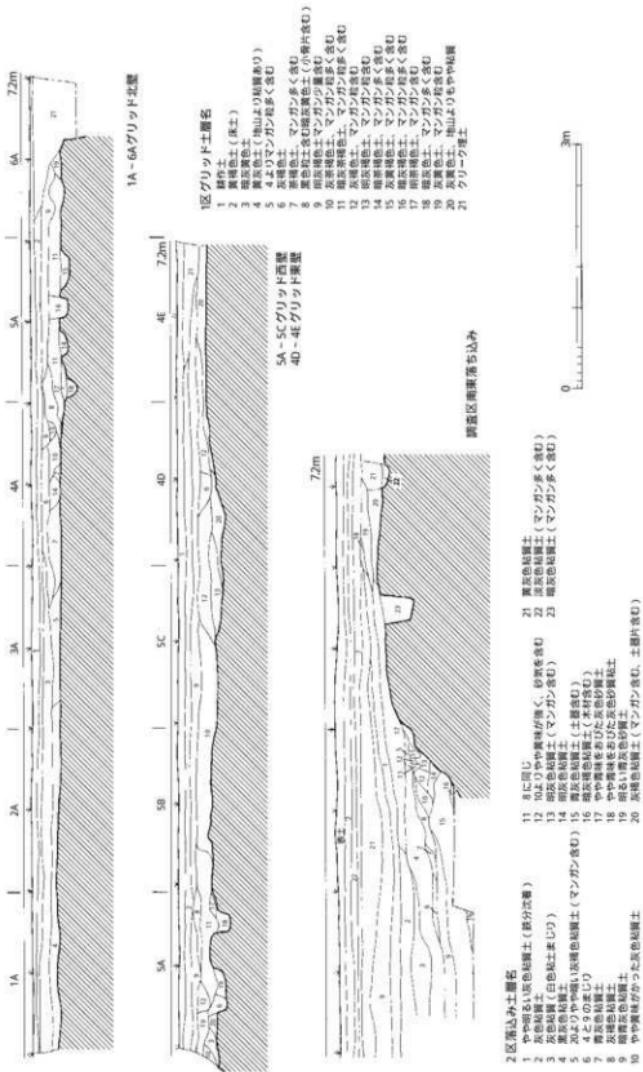


第2図 落ち込み部出土遺物実測図（1/3）

第1表 I区第1次調査遺構名対照表

報告名	調査時遺構名
1号土坑	S 1
2号土坑	S 2
3号土坑	S 3
4号土坑	S 4
5号土坑	S 5
6号土坑	S 6
7号土坑	S 11
8号土坑	S 7
9号土坑	S 18
10号土坑	S 8
11号土坑	S 9
12号土坑	S 10
13号土坑	S 12
14号土坑	S 16
15号土坑	S 13
1号溝	D 1

第3図 包含層堆積土層図 (1/60)



出土遺物（第6図）

1はく字形に屈曲する口縁部で外面にはミガキが認められる。2は口縁部に羽状に列点文を刻むもの。

第33図16・26は安山岩製石鎌で凹基・平基の違いはあるがいずれも細長い形状。第34図30は黒曜石製の石鎌。

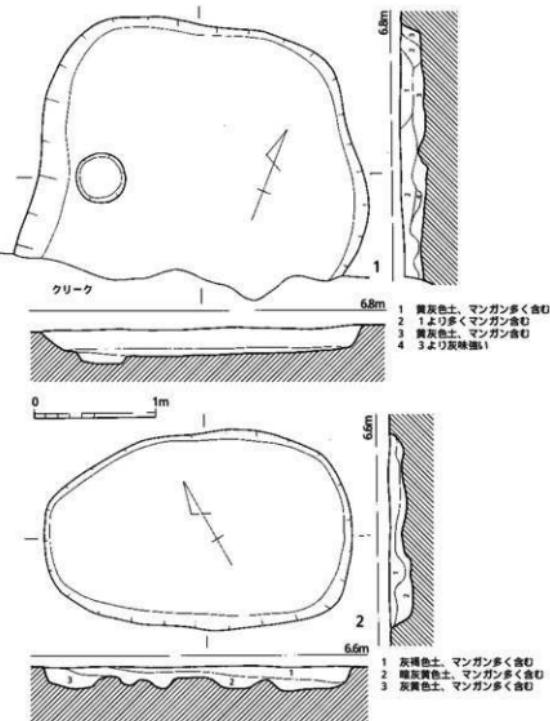
2号土坑（第4図）

平面プランは東西に長い橢円形を呈し、東西2.5m、南北1.6mを測る。深さは約15cmを測るが、埋土が地山に近い色調（灰黄色土で、地山に比べてマンガン粒を多く含む）のために正確に掘削できず、断面観察から判断して底面はかなり凹凸があったものとみられる。

出土遺物は第6図に図化した破片を除くと安山岩剥片2と若干の縄文土器片のみである。

出土遺物（第6図）

3は突出部を含む口縁部で外面には凹線文にてく字形の文様を連続させる。内面は突出部にて円弧による複雑な文様を描く。



第4図 1・2号土坑実測図 (1/40)

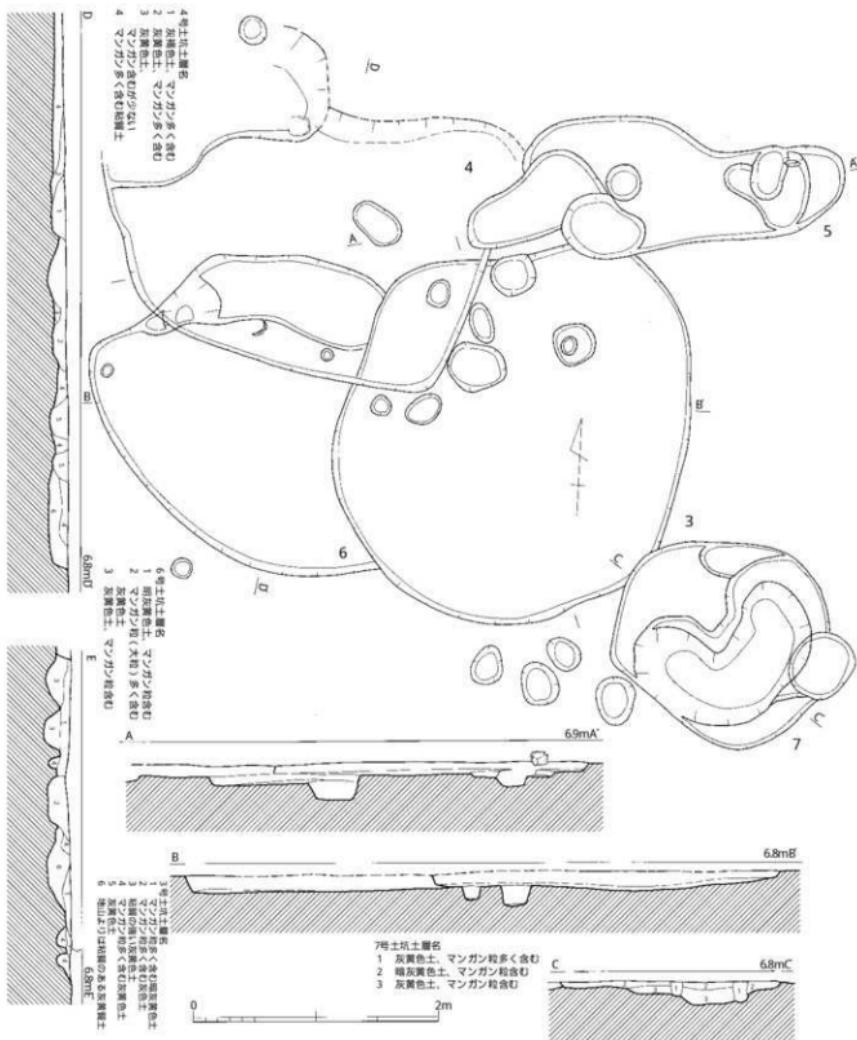
第5図に3~7号土坑の実測図を示した。これら土坑群は調査区北東付近で検出したものであるが、遺構埋土の違いが判然とせず、微妙な色調・混入物・マンガン粒の密度等の違いを基としたものの検出には苦慮した。

3号土坑（第5図）

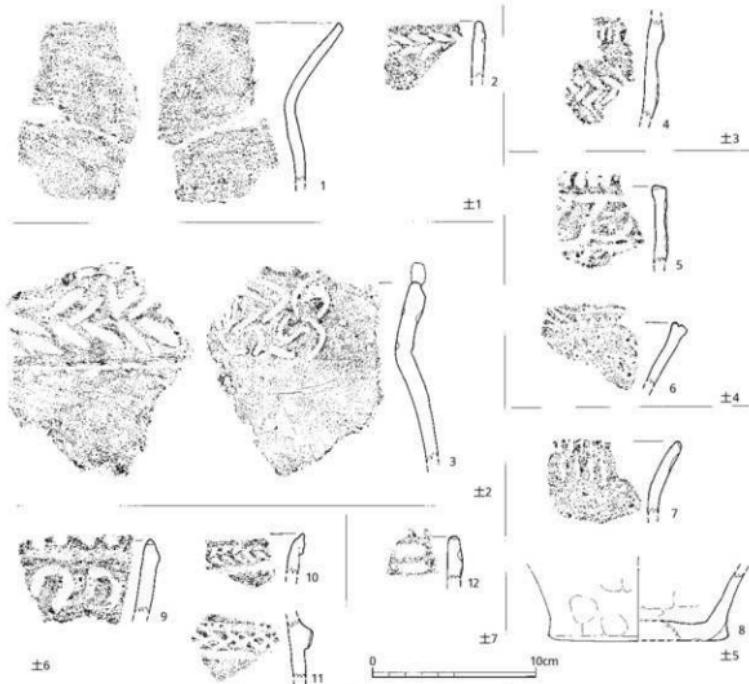
略円形の土坑で径約3mを測る。北西側を4号土坑に切られるが、4号土坑床面でごく浅く3号土坑の形状が検出された。また、北東隅を5号土坑に切られ、西側では6号土坑を切る。北側を中心として径20~30cm程度のピットが検出されたが、土層断面からは連続したピット状の埋土が観察され、本来の床面は凹凸が多数あったのではないかとみられる。

出土遺物（第6図）

ビニール袋1の量の縄文時代後期に属すると思われる遺物が出土した。4は天地の判断が密かしいが、キザミが施される低い突帯と、羽状にはしるキザミが平行するもの。



第5図 3~7号土坑実測図 (1/40)



第6図 1~7号土坑出土遺物実測図 (1/3)

4号土坑（第5図）

東側を5号土坑に切られ、南側で3号土坑および6号土坑を切る。切り合い関係の理解上から土坑とはしたものの埋土は地山に近い色調を呈しており、やや粘質がある程度の差異であった。特に北側に行くにしたがって地山との違いは不明瞭となる傾向にあり、遺構検出のため一段掘削した結果、遺構のラインは判断が困難になる状況であった。したがって、遺物包含層が緩やかに堆積していたもの可能性が考えられる。また、北西側にみられる浅い落ち込みは別遺構ととらえるべきであろうか。

出土遺物（第6図）

ビニール袋1の量の縄文時代後期に属すると思われる遺物が出土した。5は口縁部上面にキザミをいれ、外面は不規則な凹線文を描く。6は外反する口縁部で、口縁部上面に沈線を描く。

5号土坑（第5図）

幅0.7~1.1mで長さ3.1mに及ぶ東西に細長い土坑であるが、深さ約10cmの深い土坑に複数のピットが切り込むものであるかもしれない。南側で3号土坑を切るものと考えたが、埋土の違いは明瞭でない。

出土遺物（第6図）

ビニール袋2の量の縄文時代後期に属すると思われる遺物が出土した。7は口縁端部にキザミをいれ、外面は縱方向に沈線文を連続させる。

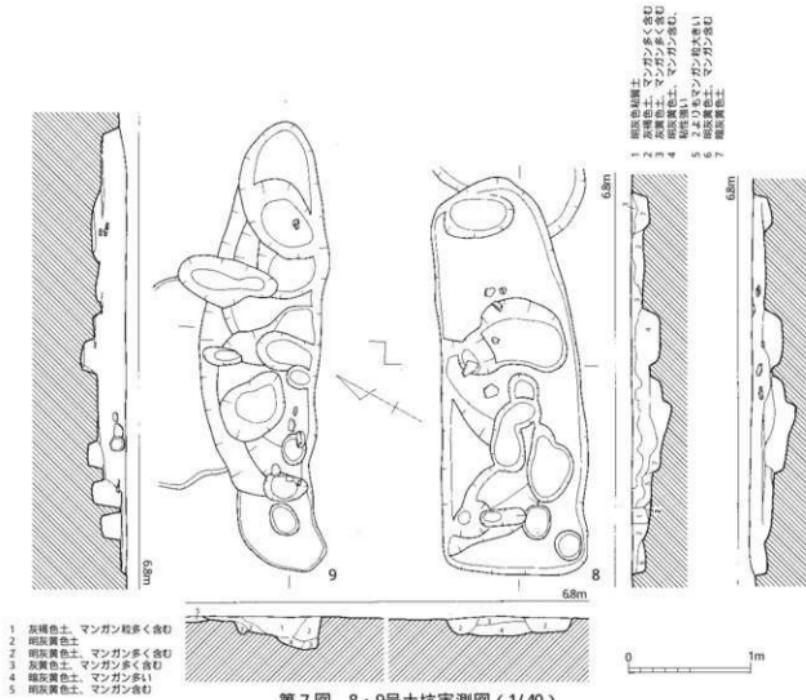
6号土坑（第5図）

東側を3号土坑に、北側を4号土坑に切られる。おそらく全体の約2/3が残るものとみられ、2.5m×3m程度の楕円形の土坑であろう。深さは10~15cm程度を測る。土坑底面ではピット等はごくわずかしか検出されなかつたが、4号土坑の南側下層で検出した長細い落ち込みは6号土坑に伴う可能性が高い。埋土の土層からは複数のピットが上層より切り込むように観察され、土坑というよりもピットの連続であった可能性を残すが、検出時には判断できなかつた。

出土遺物（第6図）

9は口縁部上面に凹点によるキザミを施し、外面には円弧の凹線文を連続させる。10・11は断面方形の突帯に羽状にキザミを施す。

第33図28は凸基式の石鏡。安山岩製で剥離面を残す。第38図83はすり石。上下面は使用により滑らかとなるが、特に片面が顕著である。側面も滑らかとなり、約1/4周は溝状の凹部が認められる。



第7図 8・9号土坑実測図 (1/40)

7号土坑（第5図）

径約1.7mの略円形の土坑で、北西部で3号土坑をわずかに切る。周縁は約5cm程度の深さで浅く、中央部はC字形とやや不自然ではあるが窪んでおり、深さは約18cmを測る。土層断面にあるように径約10cmの円形ピットが上層から切り込む形で土坑内に点在する。

出土遺物（第6図）

縄文時代後期に属すると思われる土器片および安山岩剥片が出土したが、ビニール袋1に収まる量であった。12は横方向に凹線文を描く口縁部小片。上面はキザミを施すようである。

8号土坑（第7図）

長辺3.1m、短辺1.2mの長方形で検出されたもの。北西側に約1m離れて同規模の9号土坑が平行して存在し、南東側にも12号土坑が近い規模・形状で存在する。しかし床面の形状が異なることからもそれらの相関はないといふられる。埋土は灰黄色土でマンガンを多量に含み濃い色調を呈する。全体的に骨とみられる白色の小片を多く含む。土坑内の南寄りに粘質が強い明灰色土の長方形小ピットが切り込むが、伴うものかどうか判断できない。床面は小ピットが連続する形状をなし、深さは最大で検出面から約25cmを測る。ただし埋土が判別し難く正確に掘削できているか疑問を残す。遺物量は比較的多く、ビニール袋3の土器片がある。

出土遺物（第8図）

1は口縁部上面に凹点のキザミがはいるもの。2は細く突出度のある突帯と口縁部上面に小刻みにキザミを施すもの。3・4はシャープな沈線で直線的な文様を刻む。6は頸部～胴部片で外面は二枚貝条痕の調整がみられる。

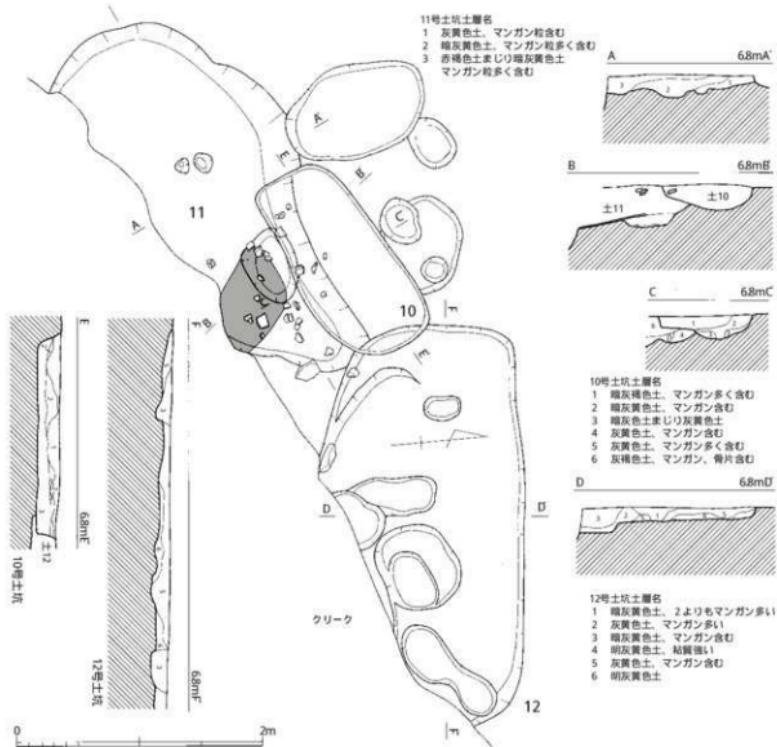
第33図11・27は安山岩製の石鏃で、11は刃部が鋸歯状となる。

9号土坑（第7図）

長軸3.6m、短軸1.0mの隅丸長方形で検出された土坑であるが、ピットが連続する形状を示し床面の高低差が顕著である。概ね25cm程度の深さを測るが、ピット部はそれよりも15cm程度深くな



第8図 8号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第9図 10~12号土坑実測図(1/40)

10号土坑(第9図)

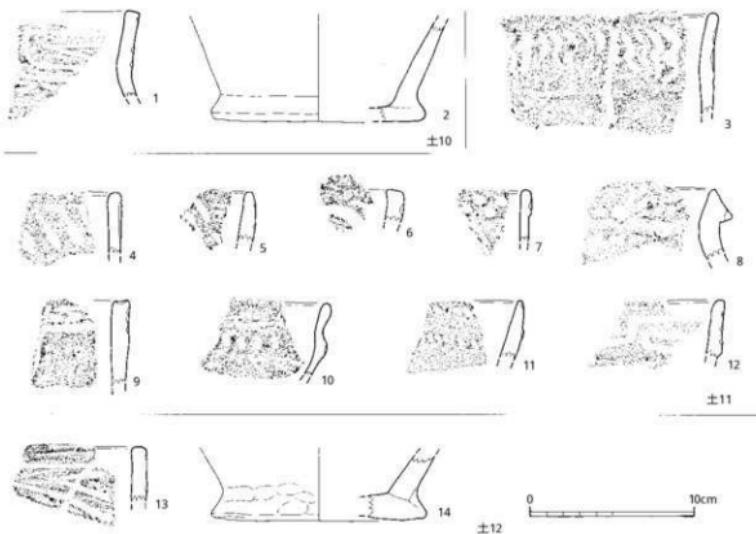
長辺1.7m、短辺0.8mの長方形の小土坑。検出面から約20cmのレベルで水平に走る面を床面と考えたが、11号土坑の埋土と誤認した部分があるかもしれない。11号土坑の上層の堆積ともとれるが、黒色が強く比較的明瞭に平面プランが検出されたため個別の土坑として扱った。東端で12号土坑を切る。基本的に暗灰褐色土の埋土で、埋土中に骨とみられる白色の有機物小片が多く含まれる。

出土遺物(第10図)

1はシャープな沈線で直線を基調とした文様を描く。2は底部角が広がる平底の底部。

11号土坑(第9図)

南側を大きくクリークにより失い、東側を12号土坑により切られ、全体の形状は不明瞭であるが、長辺3.8m、短辺1.6m程度の隅丸長方形の土坑かとみられる。また北側に大きく重複する形で10号土坑に切られる。深さは検出面から約20cmを測るが、断面観察によると床面はより凹凸があったものとみられる。土坑中央のやや東寄りの床面に径50cm程度にわたる焼土のひろがりがあり、



第10図 10~12号土坑出土遺物実測図 (1/3)

部分的に焼土塊をなす。

出土遺物の量は多く、縄文土器片ビニール袋6を数える。焼土のひろがりを中心として出土する傾向にある。

出土遺物（第10図）

3は3字形の沈線文を口縁部外面に連続させるもの。4~6は斜め方向の凹線文を刻む。7は口縁部に肥厚させて低い文様帯をつくり、円形の列点を刻む。文様帯下には斜め方向の沈線文がはいるようである。8は外反する口縁部を肥厚させ、口縁部下角にキザミをいれるもの。9は口縁部下に横方向の沈線と列点を組み合わせる。10は短く外反する口縁部をもつもので、口縁部と口頸部との境の棱にキザミを施す。11は口縁端部と口縁部下のごく低い突常にキザミをいれる。12は直線を屈曲させた文様を描くものである。

第35図52・53は安山岩製のスクレーバー。円形に近い形状で、52は一部に、53はほぼ全周にわたって刃部をつくる。

12号土坑（第9図）

西側を10号土坑にわずかに切られ、南側を大きくクリークにより失うが、長辺3.3m、短辺1.7mの規模の長方形土坑とみられる。床面はほぼ平坦で、深さは検出面から約10cmを測る。床面東側を中心にピットが連続するがいずれも浅い。埋土はマンガンを含む地山より灰味の強い灰黄色土であるが、下層は特に地山に近い色調であり、地山に比べてやや粘質をもつ程度である。東端のピットは土坑に伴わずにその西側が遺構の立ち上がりとすべきかもしれない。ビニール袋2の縄文土器片が出土している。

出土遺物（第10図）

13は直立する口縁部で、沈線文にて斜線を描く。第36図58は安山岩製のスクレーバーで非常に厚い形状をなす。原石面を多く残し、剥離してできた面をある程度調整して搔器として使用したものであろうか。

13号土坑（第11図）

調査区南東部の落ち込み部の肩というやや独立した位置にあり、落ち込み部に形成される包含層に切り込む。平面プランは径約1.4mの円形を呈しているが、底面は隅丸方形に近い。深さは95cmと今回の調査で検出した遺構の中で最も深いものである。遺構の壁面はほぼ中位までは急傾斜をなしており、底面に向かってほぼ垂直に落ちる。土層の観察から、その中位の変換点より上層はマンガン粒を多く含む灰褐色土が基本であり、下層は粘質の強い灰色土となる。

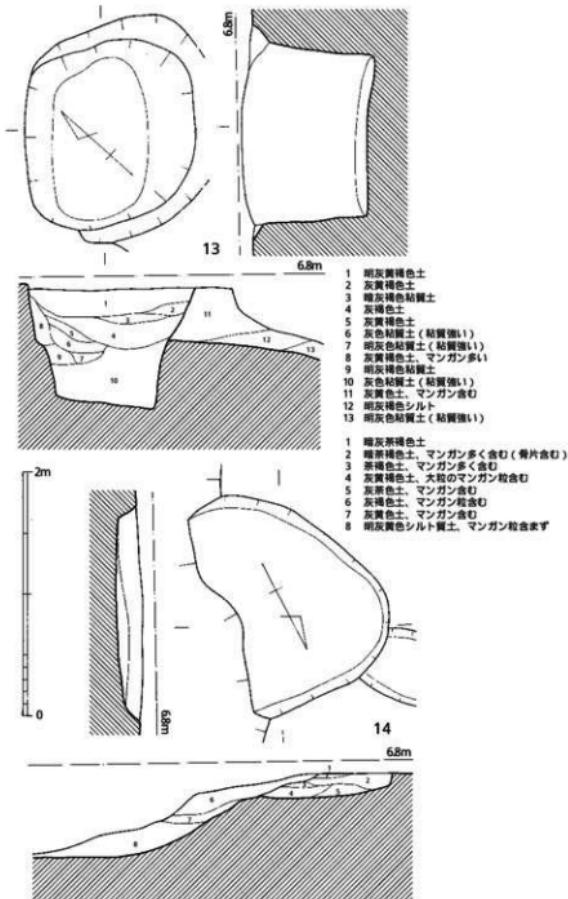
出土遺物（第12図）

1は深い凹線文がみられるもので、横方向の直線と曲線を組み合わせた文様。2は口縁部直下に低い突帯をつくりキザミを施す。

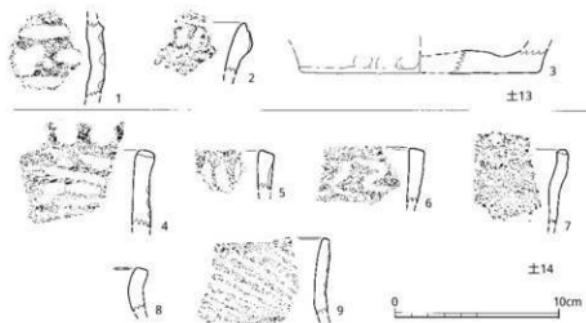
第33図9・22は安山岩製の石鎌で、9は刃部は鋸歯状となる。第34図29は黒曜石製の石鎌で剥離面を残す。第37図72は黒曜石製のスクレーバー。原石面を残す剥片を用い、頂部を調整により尖らせ、両縁には使用痕がみられる。

14号土坑（第11図）

落ち込み部の肩にて検出された円形土坑。落ち込みにより約半分を切られる状況であり、土層の観察からも裏付けられる。埋土はマンガン粒を多く含む暗茶褐色土で、骨片を多く含む点に特



第11図 13・14号土坑実測図（1/40）



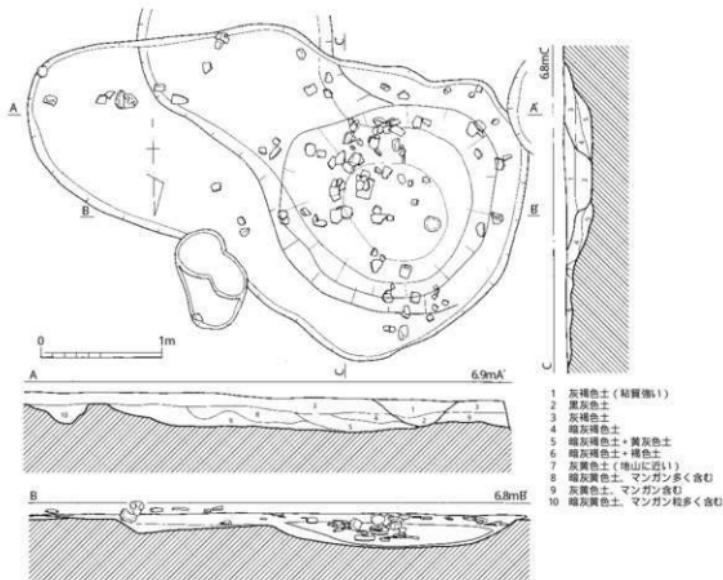
第12図 13・14号土坑出土遺物実測図(1/3)

徵がある。骨はごく碎片で、部位等は特定できない。

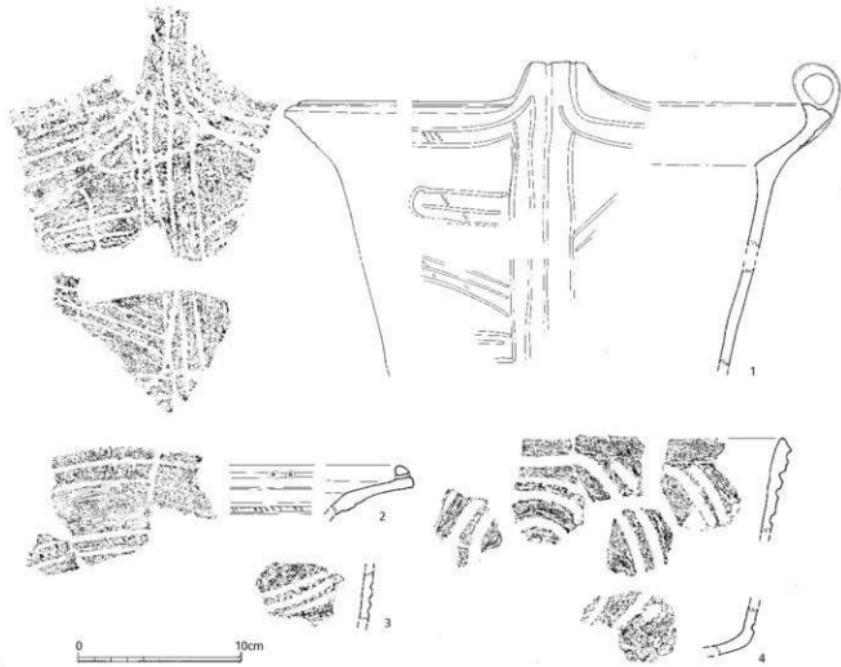
出土遺物(第12図)

4は口縁部上面を凹点により小刻みな山形を呈するもの。外面には横方向に凹線文が短いスパンではしる。5は縦方向の凹線文がみられる小片。6は逆S字形の凹線文を刻む。7は無文で口縁部上面にキザミを有する。9は沈線文で密に斜線をいれるものである。

第40図93は片岩製の石錘で2ヶ所に打ち欠きをいれる。



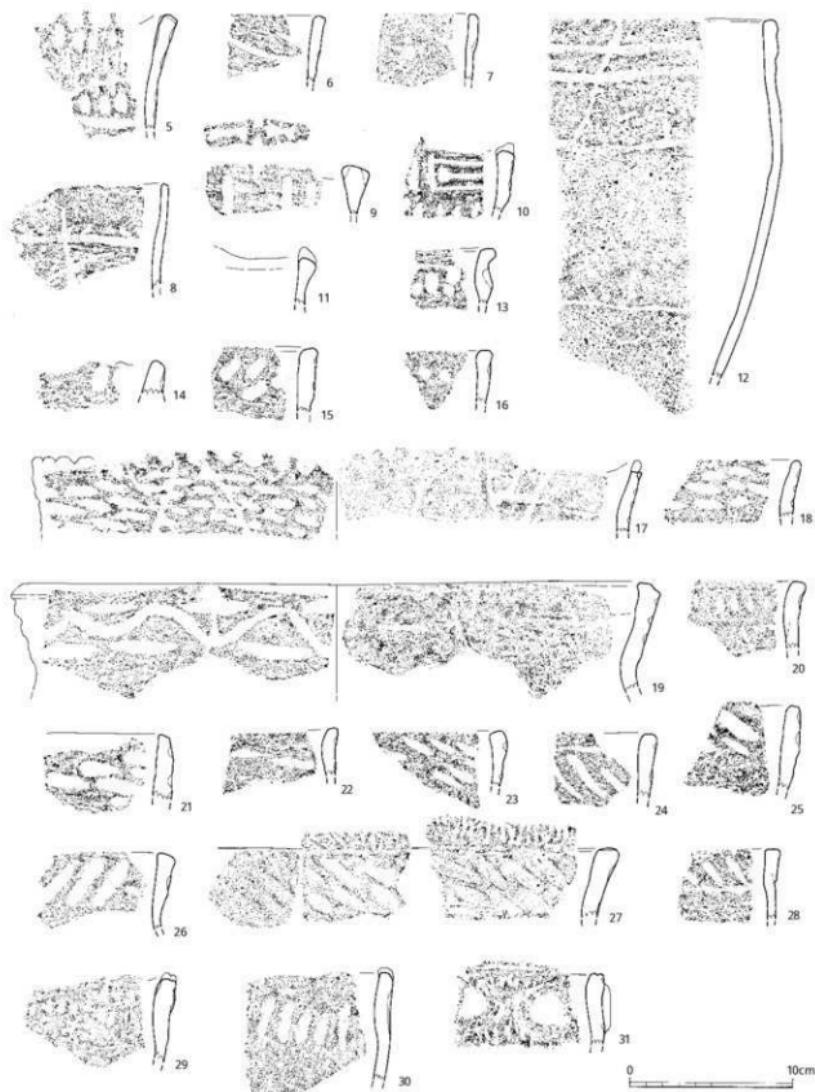
第13図 15号土坑実測図(1/40)



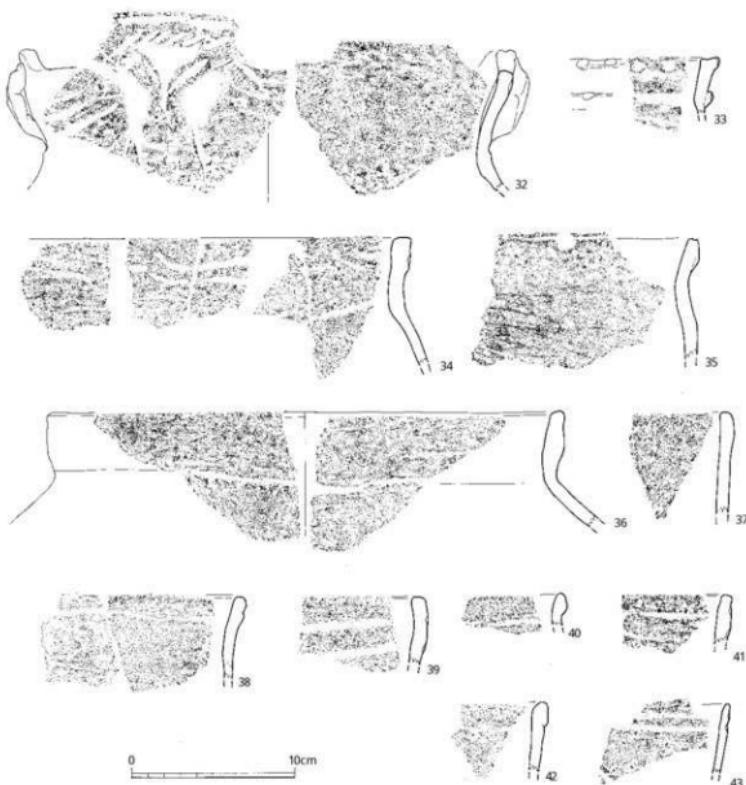
第14図 15号土坑出土遺物実測図① (1/3)

15号土坑（第13図）

クリークより南側の調査区のほぼ中央に位置するもので、明らかに黒色の強い埋土の広がりを検出したもの。遺物の出土状況も隣接する包含層に比べ、密度が高い。精査及び断面観察の結果、西側に径約1.7mの灰褐色～黒灰色粘質土の堆積があり、その下層に灰褐色土を基本とする堆積が広範に広がる状況といえる。下層灰褐色土を包含層と捉え、黒灰色土の円形土坑が切り込む状況と観察されるが、平面プランは上層と下層が対応して円弧をなすとも言え、下層埋土が地山に近い色調である点も含めて解釈が難しい。円形土坑をなす地点での検出面からの深さは約40cmを測る。遺物量は多く、バンケース1箱の量がある。第16図43は時期的に新しく位置づけられるが、土坑南東角付近の上層からの出土である。



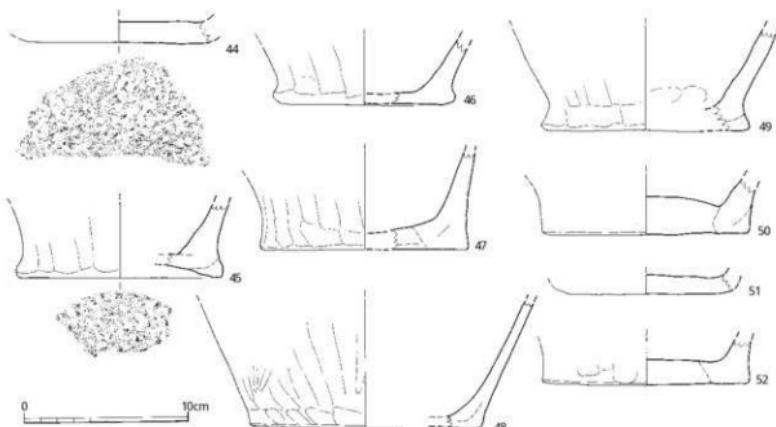
第15図 15号土坑出土遺物実測図② (1/3)



第16図 15号土坑出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物 (第14~17図)

1は磨消繩文系の深鉢。同一個体とみられる数片があるが接合せず、図化した2点も復元的に配置している。直線的に開きながら立ち上がる胴部に内湾する口縁部が続くもので、口縁端部は逆く字形に肥厚させる。頸部内面の稜は明瞭である。口縁部の内湾曲線の続く位置に環状の突起を設ける。その突起部から垂直に4沈線を下ろし、そこから2沈線もしくは3沈線からなる磨消繩文帯を派生させる。2は大きく外反する口縁部で、口縁端部内面を断面三角形に肥厚させる。その肥厚部に小円孔を2個穿つ。3は本沈線からなる磨消繩文をもつ小片。4はわずかに開きながら立ち上がる胴部の鉢。口縁部は斜めに整形される。胴部外面に深い凹線で平行する円弧文を描く。5~12は胎土に多量の滑石を含むもの。5は凹点文を連続させるもの。6~8は凹線文としては比較的細く斜線を刻む。9~10は直線的な凹線文で構成されるもので、9は口縁部上面に口字形の装飾を連続さ



第17図 15号土坑出土遺物実測図④ (1/3)

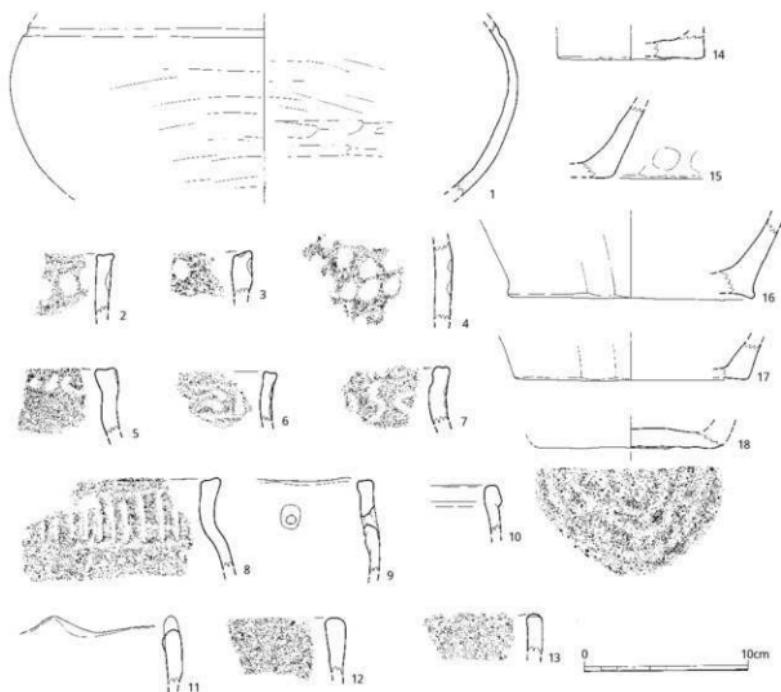
せる。11は口縁部小片で波状にせり上がる。12は大形の破片であるが、径は出し得なかった、直立する口縁部に2条の凹線文を平行に巡らせる。13~16は凹点を連続させるもの。17~18は短い凹線を横方向に3~4段にわたって連続させるもの。口縁部は上面からの押圧により太いキザミが連続する。19はく字に緩やかに屈曲する口縁部で、口縁部外面に波状と直線の凹線を組み合わせた文様を刻む。20は指頭でおさえたような細長の凹点を連続させるもの。21~30は横ないし斜め方向の短い凹線文を連続させる。31は列点文を刻むもので、X字形をなす突帯を貼り付ける。32はくびれた頸部から内湾気味に立ち上がる口縁部で、斜線文の装飾を行い、X字形に橋状把手を貼るもの。33は短く逆L字形に屈曲させる口縁部と、口縁部下の突帯上にキザミを施す。34~36は肩の張る胴部に直立する端部を肥厚させた口縁部がつづくもの。34は口縁部外面に不明瞭な沈線文を描く。37~38は直立に近い立ち上がりの口縁部で、38は口縁部下に細い沈線を巡らせる。39~41・43は口縁部に横方向の沈線を走らせるもの。42は口縁端部を肥厚させる直立する口縁部である。44~52は底部で、44~45の底面には細かい凹凸の圧痕を残す。

第33図5・8は安山岩製の石鎚で、刃部は鋸歯状となる。第39図86はすり石。橢円形の形状をなすものが半分に割れた状態であるが、割れてから上面を使用しており、割れた内側中央が窪む。側面の一部を敲打するようであるが不鮮明である。第40図99・101・102は小形の石錐で凝灰岩製。いずれも碁石状の形状をなし、2ヶ所に小さく打ち欠きを施す。

溝

1号溝(第1図)

クリークに平行する形で検出した溝状遺構。本吉地区にみられる条里を反映した可能性があると考え調査を行ったが、出土する遺物は縄文土器のみであり、また断面観察でも色調が漸次的に地山に近くなる状況が確認されたため、溝としての堆積かどうか疑問を残すものとなつた。単な



第18図 満1出土遺物実測図 (1/3)

るクリーク造成時の作用で生じた変色部かもしれない。

出土遺物（第18図）

1は滑石を多量に含む胴部で、胴部は球形に張り肩部に凹線をめぐらせる。2~4は凹点文、5~7は細い凹線文で口縁部外面を装飾する。8は縦方向の沈線文を連続させる。9~13は無文。9は補修痕を残す。10は口縁部外面を肥厚させる。11は突出部をもつ口縁で、12~13は口縁部上面にキザミを施す。14~18は底部で18の底面は凹凸が顕著である。

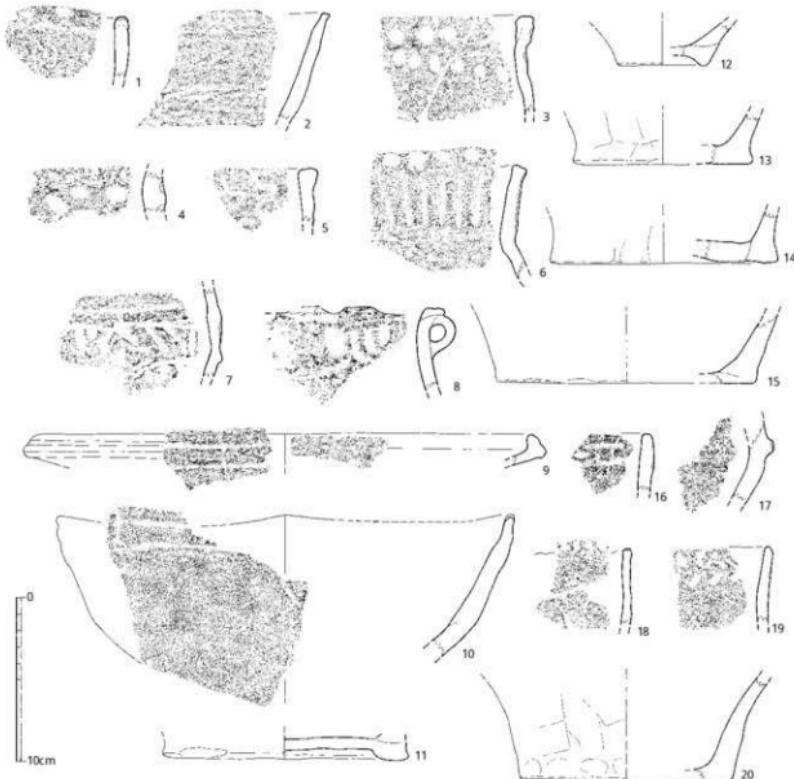
第37図62は安山岩製のスクレーパ。下部に両面から剥離を施し刃部をつくる。第40図96・103は小形の石錘で2ヶ所に小さく打ち欠きを施す。いずれも凝灰岩製。第41図115は粘板岩製の磨製石斧。刃部は刃こぼれによりほとんど失われる。

ピット

ピットは調査区全面に散在するが密度は高くない。縄文時代の土坑群にあるピット以外は埋土が灰色を帯びる粘質土で、遺物は含まれないものが多く、縄文時代ではないと想定される。

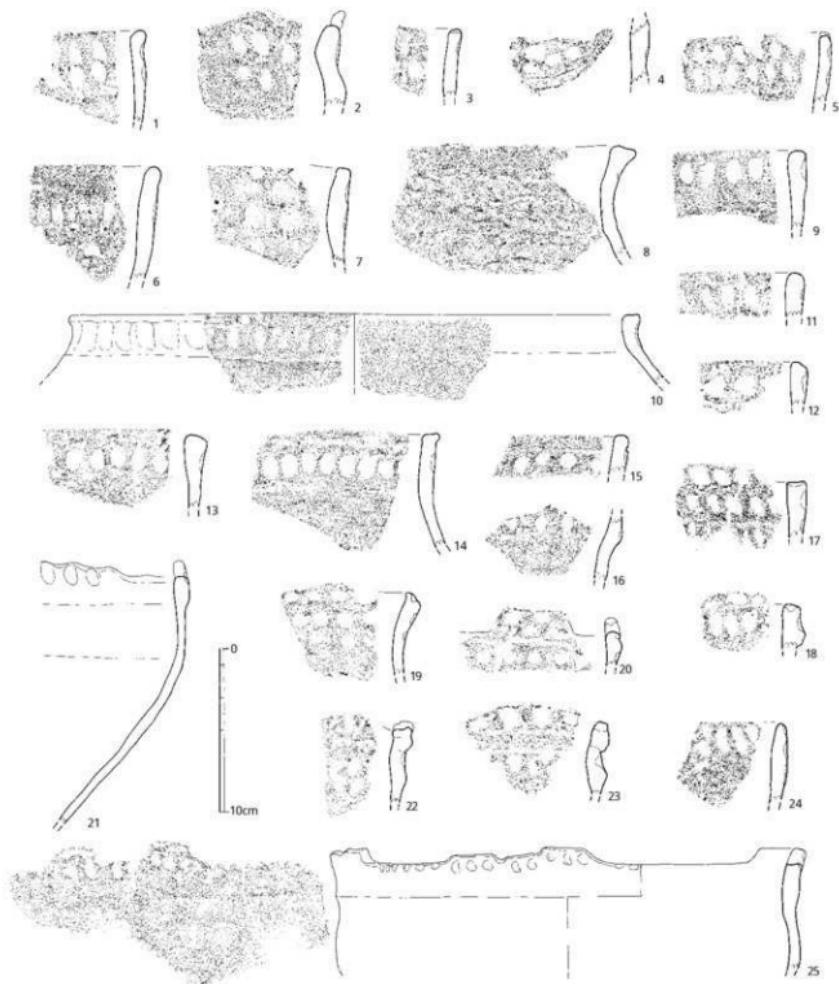
出土遺物（第19図）

第19図にはピットから出土した縄文土器を示す。調査中に土坑として扱っていたが、浅い等の



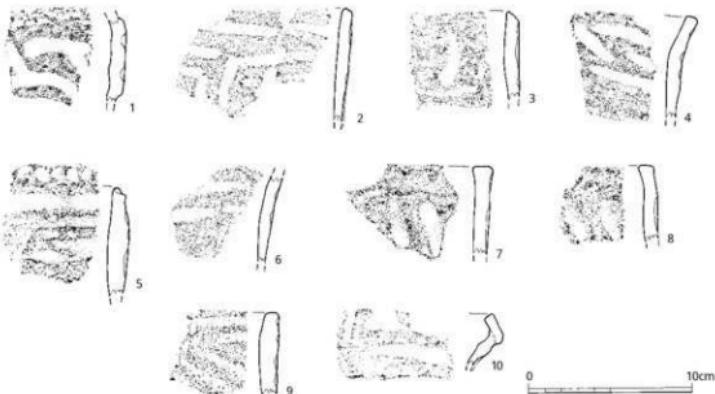
第19図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

理由により報告にあたってピットと変更したものを含む。1はP1出土で、口縁部上面に凹点文をいれるもの。第34図36は同じくP1出土の黒曜石製石鎌。2はP7出土で外面は横方向の条痕調整。3は凹点文を連続させるもので、P8出土。第33図21もP8出土の安山岩製石鎌。4-13はP19出土。4は凹点文を刻む。5は太いキザミを口縁部角に刻むもので、外面には逆S字形の文様を刻む。P20出土。6はP45出土で、直線的にわずかにひらく口縁部に縦方向の凹線文を密に連続させ、口縁部上面には凹点文を刻む。7・8はS17からの出土。7は脛部最大径を境に低い2突帯を巡らせ、突帯間に沈線による斜線文をいれるもの。土器の天地は判断しがたい。8は縦長の列点文を連続させるもので、突出部にあたる。環状の装飾を文様帶部に付し、口縁部上面には山形の突起を設ける。9-16はP32出土。9は大きくひらく口縁部に断面三角形に肥厚させるもの。16は磨滅して観察しがたいが、外面に2条の沈線とその間のキザミが確認できる。第38図82はP37出土の磨石。上下面を顕著に使用



第20図 包含層出土土器実測図① (1/3)

しており滑らかとなり、片側には筋状の凹凸が多くみられる。側面もある程度使用しているが、上下面ほどに滑らかではない。10-11-17~19はP43からの出土。10は緩やかに内湾しながら立ち上がる鉢で、口縁部下に擬似縄文による文様帯がある。11は10と同一個体と考えられる底部。17は低い断面台形をなす突帯にキザミが施される。18は口縁部上面に小刻みにキザミをいれるもの。



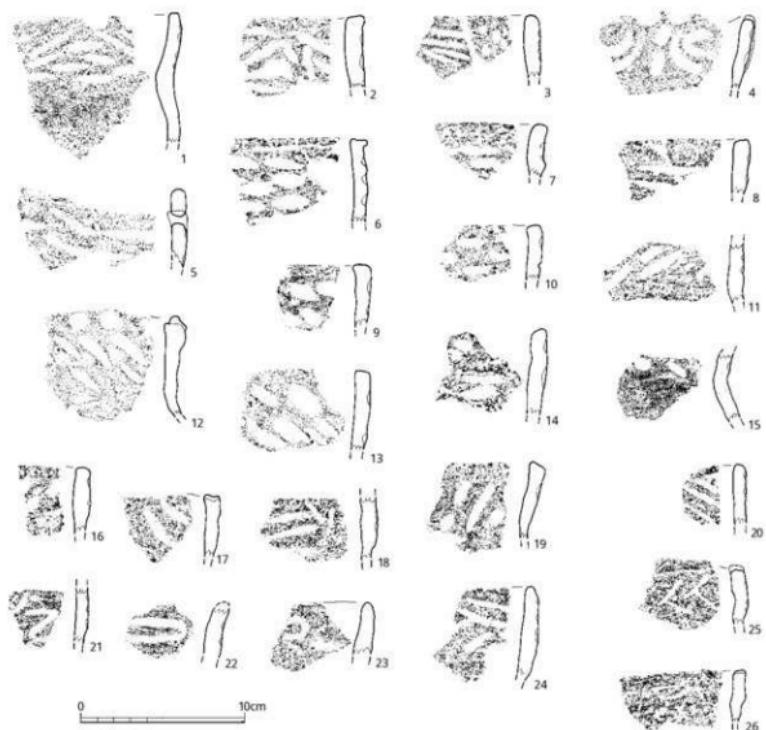
第21図 包含層出土土器実測図② (1/3)

19は口縁部外面に羽状にキザミをいれる。第36図57はP43出土の安山岩製のスクレーバーで風化が進む。原石面を両側面に残し、剥離面を残す。下辺の一部に使用痕が認められる。第38図81・84はP43出土のすり石・叩石。5は半分に割れてから使用され、割れ口より内側中央が敲打により窪む。第38図85はP51出土の叩石。偏平な形状で、上下面に敲打の凹凸が観察されるが浅い。12-15は底部で、それぞれP15・S15・P30からの出土である。

遺物包含層

縄文時代の遺構群が存在する範囲の上層には遺物包含層が形成され、多くの縄文土器・石器が出土している。土器の報告にあたっては、文様の特徴により分類を試み説明を加えるものとする。

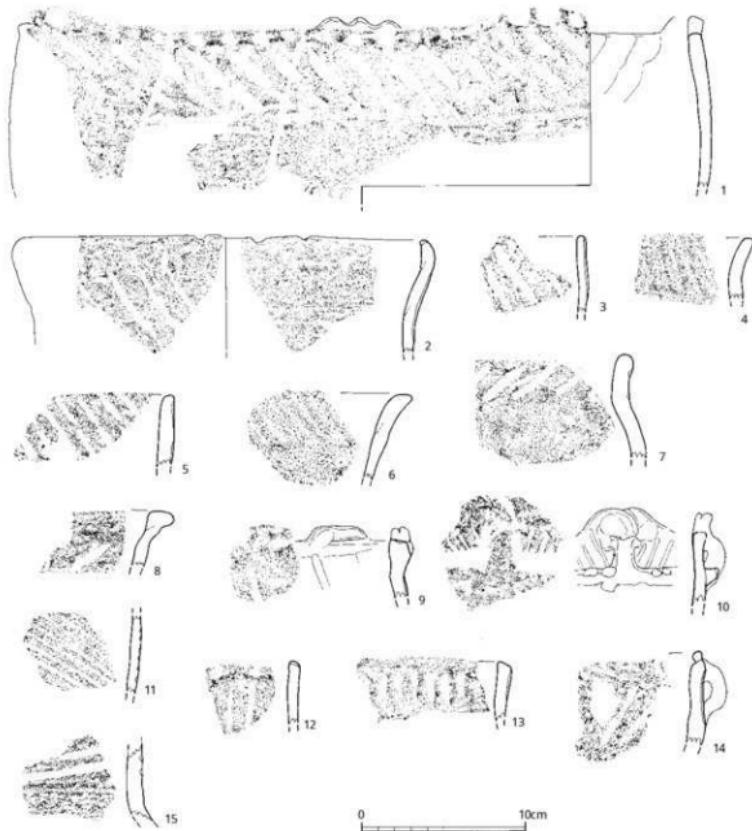
第20図には、坂の下式とされる指等により口縁部外面に凹点文を連続させるものを示した。1-5は複数列に渡って凹点文を連続させるもの。1は胎土に滑石を多量に含む。2は口縁部を山形に整形するもの。二段目の凹点文は弱く、やや不明瞭となる。3は口縁部上面にも凹点文を連続させる。4は残存が悪く天地も判断が難しいが、二列以上の凹点文をもつとみられる。5は緩やかに弧を描きながら突出部へと続く口縁部。6-8は凹点文といふには若干躊躇されるが、口縁部外面に強く指圧痕を残し文様状を呈するもの。8にみられる口縁部上面を広く平坦につくる特徴は10や14に共通し、胴部が広がる形状となる点も同様である。9-13は凹点文が一列であるもの。凹点内に爪の圧痕を残すものが多く、凹点の形状も縦長になる傾向にある。14-18は口縁部を肥厚させ文様帯とし、一列の凹点文を巡らせるもの。14は指を用いたとしては凹点が小さくて深く、何らかの工具を用いているのかもしれない。15・16は縦長楕円形の凹点文。17・18は口縁部上面にも強く凹点文を刻む。18は突出する口縁部と思われる。19・20は指ではなく、竹管で施文したと思われ、凹点内に同心円の稜が生じている。20は粘土を貼り付けて整形した突出する口縁部。21は丸みを帯びた胴部をもつ浅鉢形を呈し、口縁部は突出部をもつ。突出部を3つのピークをもつ波形につく



第22図 包含層出土土器実測図③ (1/3)

り、外面に凹点文を施す。凹点文を巡らせないという点では、別分類とすべきか。22・23は凹点を施す場所はわずかに肥厚させて文様帯とし、口縁端部はさらに肥厚させて上面から強い凹点を連続させるもの。凹点は深く、何らかの工具を用いているのかもしれない。22の凹点文は二列、23は一列である。24・25は凹点文が小さく、この分類には含まれないか。24は口縁部が摩滅しており端部となるか不明瞭であるが、二段の凹点文がみられる。25は口縁部を肥厚させて文様帯をつくり、その上端に小凹点を刻む。方形突起を連続させて突出部をつくる。

第21図に示した縄文土器は、太い凹線文で文様を描くもの。1は深く凹線文を刻むもので、文様は円弧を組み合わせるもの。今回の調査における資料の中で最も簡素化されていない文様であり古式に位置づけられる。2~10は拓本ではなくっきりと凹線文が表現されるものの、実際には浅く明瞭には観察されない。モチーフは2・5・10のように直線を方形に組み合わせるものや、斜線文を刻むものがある。10は逆く字形に屈曲する口縁部で外面に凹線文で直線的な文様を刻む。胎土を多量に含む点は特筆できる。1は阿高式の範疇に入るとみられ、他は南福寺式とされよう。

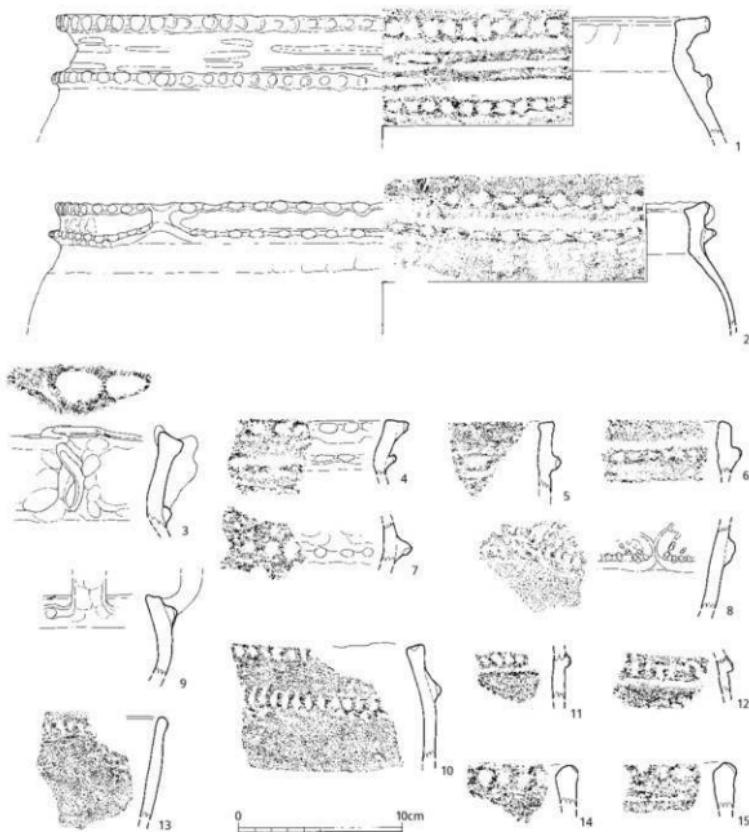


第23図 包含層出土土器実測図④ (1/3)

第22図は凹線文を短いスパンで刻む。凹線文の方向や屈折を多様にすることにより変化に富んだ文様となるものもあるが、同方向に文様を連続させるもののはうが多い。く字形もしくは逆く字形の凹線文もみられるが、線は細くなりタッチも弱い。南福音寺式とされよう。

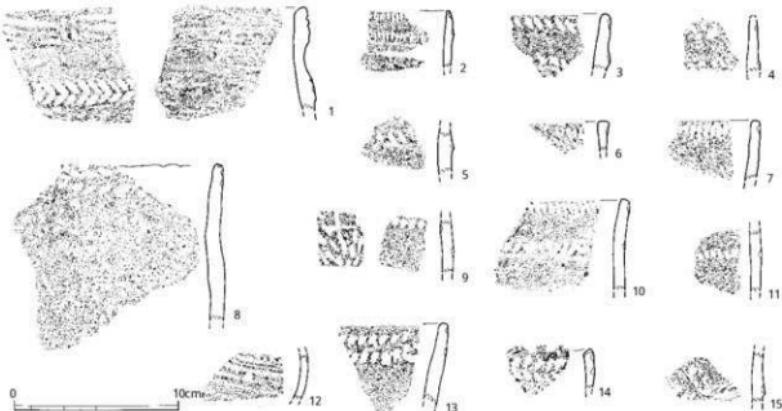
第23図は凹線文を刻むものであるが、細い斜線文や断面U字形の凹線ではなく片側のタッチが強いものを集めた。出水式に位置づけられる。斜線文を刻むものが多く、13は縦方向に刺突状に連続させる。11は口縁部上面に凹点文を連続させるもの。胎土には滑石を多く含む。10はキザミをもつ突帯を巡らせ、橋状把手をもつ。21も細い橋状把手をもち、口縁部上面には粘土帯を載せ装飾をつくる。

第24図には突帯にキザミをもつ一群を示した。1・2・4は直立する口縁部に肩部が張る胴部が続く



第24図 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)

もの。口縁端部は逆L字形に屈曲させ、側面にキザミを連続させる。頸部には突帯を巡らせるが、1は頸部よりやや下位、2は頸部よりやや上位という違いはある。頸部内面には稜が生じる。1は口縁部と頸部間に平行する沈線を巡らせ、部分的に三本沈線となる。2は口縁部のとその下位の突帯とを結ぶ低い橋状把手をもつ。3-5・6は口縁部は直立する素口縁で、口縁部下に突帯を巡らせ上面にキザミを施すもの。3-9のように橋状把手をもつものやX字形に粘土紐を貼り付け文様とするものがある。8もまたキザミを伴う突帯をX字形に曲げて装飾とするもので、キザミは小粒化なものとなる。10は内傾する口縁部で、口縁部下には低い突帯を巡らせ小粒なキザミを施す。また口縁部側面と上面にもキザミを巡らせる。13は口縁部をわずかに肥厚させキザミを巡らせるもの。以上は御手洗A式とされよう。14・15は口縁部側面と内傾する口縁部上面にキザミを連続させる。



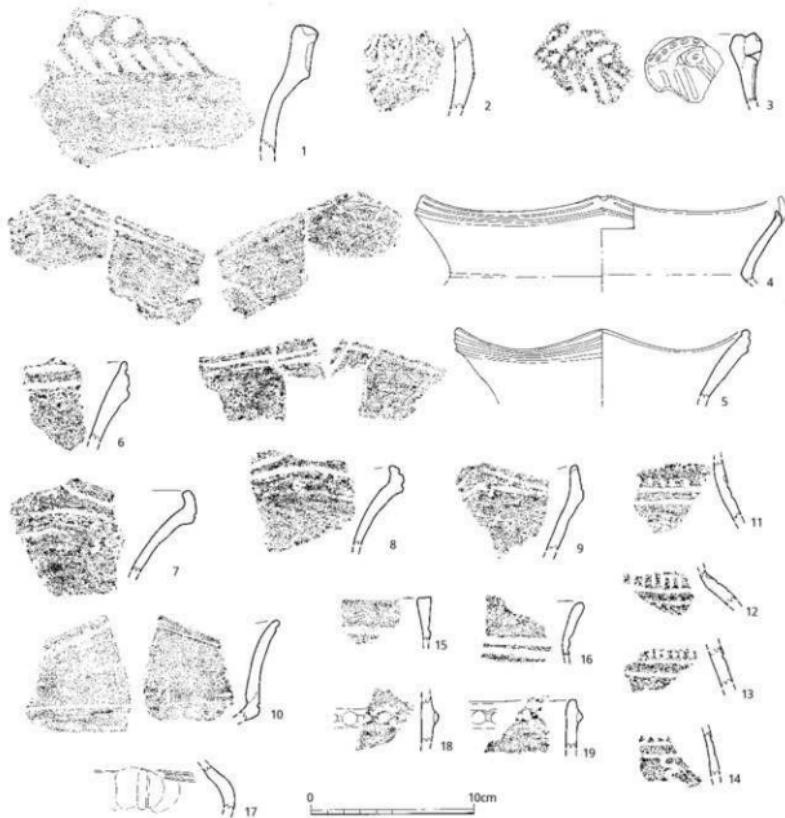
第25図 包含層出土土器実測図(1/3)

第25図に示したものは第24図にある土器から型式学的に連続するものであろうか、キザミを連続させるもの、もしくはそれが列点化したもの。御手洗A式の新段階といえる。1は口縁部を肥厚させ幅広い口縁帯をつくり、2条の沈線を断続的に巡らせる。その下に低い突帯状の文様帯をつくり羽状に列点を刻む。2~5・10は口縁部下にわずかな突出の突帯をつくり、キザミを小刻みに施す。口縁部外面にも同様の刻みを施すが、突帯状とはしない。7~8・12~14は口縁部外面に列点文を巡らせるもの。7・12は1段、8・13・14は2段からなり、8・14は羽状に配する。8は波状口縁となる可能性が高いと思われるが、残存の関係で具体的にし難い。14は口縁部内面からもキザミを連続させる。9は小片のため裏表が判断しがたいが、羽状に配する列点文と1列の列点文がそれぞれの面に刻まれる。15は天地が判断しがたいが、T字形に低い突帯を貼り付けキザミを施す。

第26図は磨消繩文をもつ土器およびその系譜の土器を示した。1は緩やかに弧を描き外反する頸部に大形の把手状の文様をもつもの。2は大きくひらく口縁部で口縁端部は上下に拡張させ、斜め方向のキザミを施す。外面には3本沈線からなる磨消繩文を描く。胎土は精良で色調も暗灰色を呈し特徴的である。3は大きくひらく口縁部で、口縁部内面を突出させ逆く字形の断面とするもの。4は底部角となろうか。直立する体部に弧状に磨消繩文がはしる。以上は福田K II式といえよう。5は口縁部上面に付加される文様。6は横方向にはしる3本沈線の下に逆S字形の沈線が加わるもの。上部が欠損するため、20のような多条沈線からなる可能性もある。7は口縁部外面を肥厚させ上面に沈線を巡らせるもの。波頂部は肥厚を増し2穿孔を穿ち、口縁部上面および側面にキザミを連続させる。8・9は外反する口縁部の端部外面を突出させ、上面をひろくつくり沈線をいれる。10は磨消繩文を描く胴部小片。11は外反する口頸部を伴う胴部資料。頸部の屈曲を突帯状とし、刺突による二段からなる文様を刻む。突帯部から橋状把手が上方に向かってのび、外面にキザミが施される。12は口縁端部を逆く字形に肥厚させる波頂部。側面に刺突によるキザミを施す。13~15は口縁端部を台形に肥厚させるもの。14は突出部となろうか、文様状に整形する。16~19は口縁部上面に粘土紐を貼り付け文様とするもの。W字形もしくはその連続で波状に粘土紐を貼り付ける。20は内湾する口縁部に多条の沈線を横方向にはしらせるもので、浅鉢と思われる。



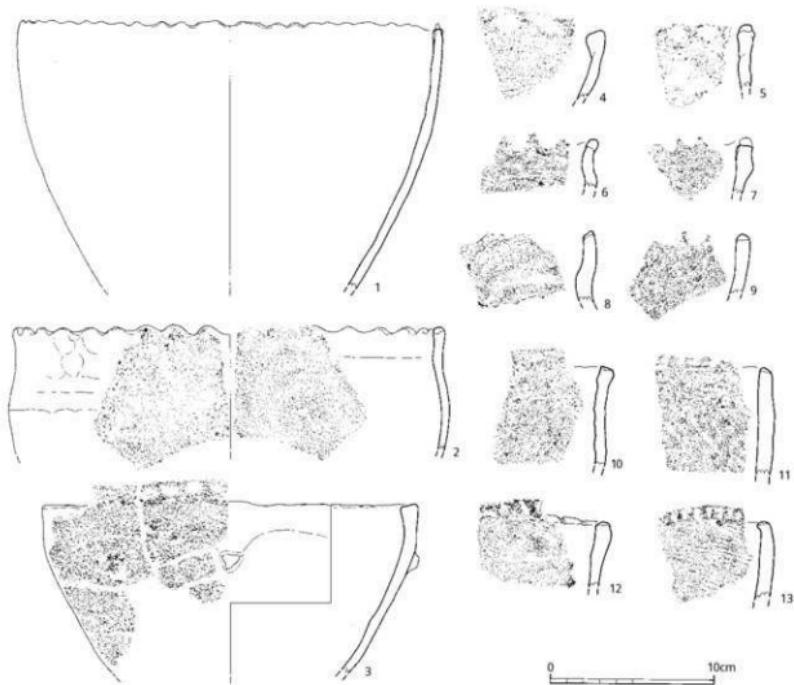
第26図 包含層出土土器実測図⑦ (1/3)



第27図 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)

第27図1は肥厚させる口縁部に斜め方向に深い凹線を刻み、波頂部上面には深い凹点をもつ。2は波頂部に描かれる渦文が変容した文様か。3は波頂部の文様で、丸みを帯びる肥厚部に竹管状工具で刺突を連続させる。4~10は強い波状を呈する口縁部で、口縁部は逆く字形に屈曲もしくは肥厚させ、外面に2条からなる沈線を巡らせる。太郎迫式とされるものである。11~14は頸部に近い胴部資料で、列点文と沈線が施されるもの。15~17は三万田式。17は丸みを帶びて屈曲する胴部片で、胴部最大径に突起状の個体が剥離した痕跡を残す。注口土器の注口部に対する背面部であろうか。肩部には擬似繩文による繩文帯を描く。18~19は刻目突部。夜臼式とされよう。

第28図に示した繩文土器は、無文で口縁端部にキザミ等による装飾を有するもの。1は砲弾型の胴部をなすもので、口縁端部の厚さは5mm程度と薄手的印象を与える。口縁端部の残存は良くないが、丸棒状工具による押圧でキザミをつくりだす。2は直立する口縁部に丸く張る胴部が続くもの。

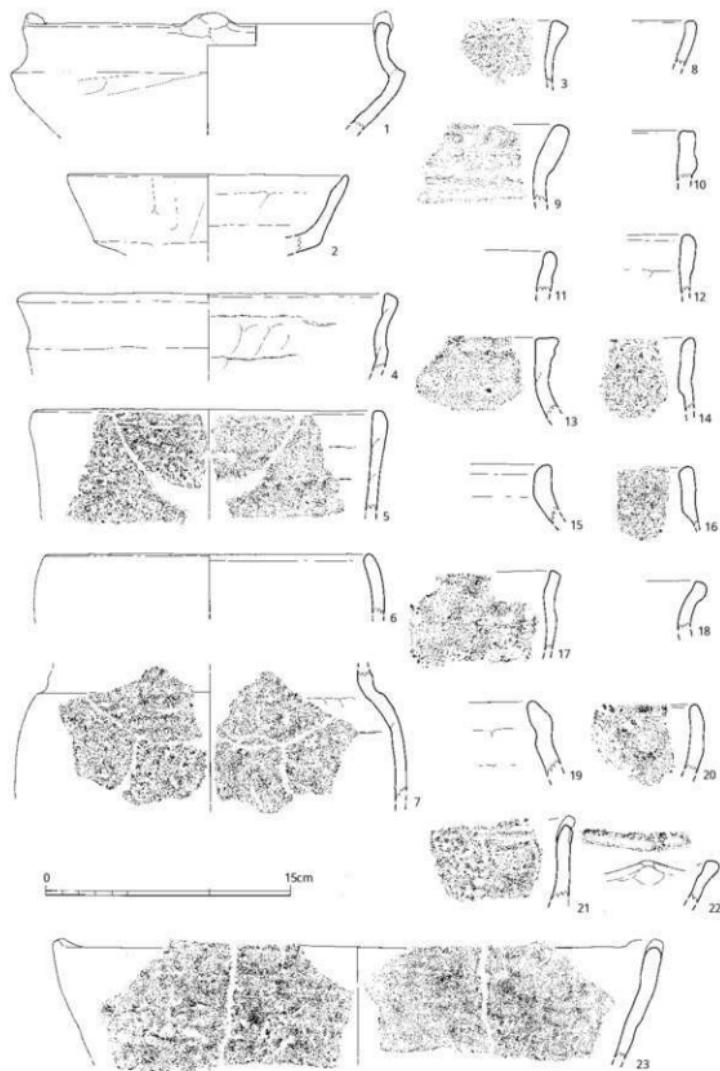


第28図 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)

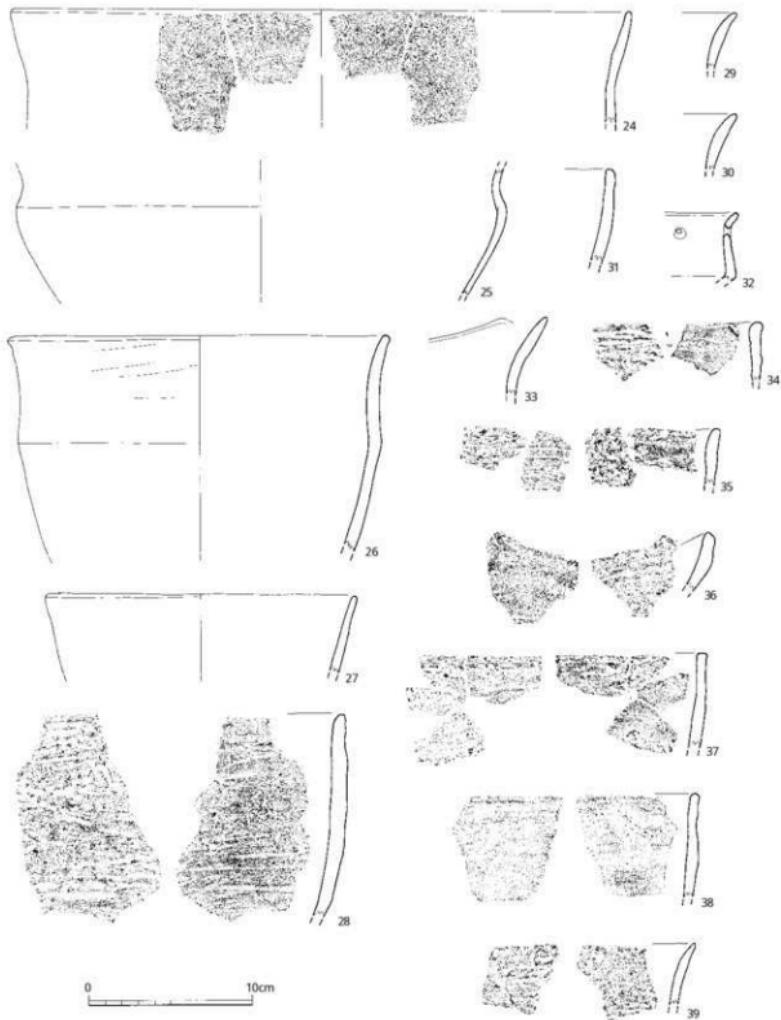
口縁端部のキザミは頂点は山形を呈するが、刺突の先端は鋭く深い。3は直立する口縁部に底部に向かって直線的に径を減じる胴部が続くもの。口縁部と胴部の境には稜をもつ部分がみられ、その稜の延長にイボ状の突起が作り出される。口縁部上面に指による押圧を連続させる。4は浅鉢となろうか。口縁部内面を肥厚させ、上面には指によるものとみられる押圧を連続させる。5~9の口縁端部上面に押圧により山形のキザミをつくるが、指で行うにはピッチが短いので棒状の工具を用いたものと判断される。10は口縁部上面に指による押圧を連続させるが、側面観からは山形をなさない。11~13口縁部上面に板状工具でキザミを連続させるもの。13の外面調整は二枚貝条痕である。

第29・30図には無文の縄文土器を示した。時期を判断する属性は少ないが、胎土の特徴等から縄文時代後期を中心とするもので、一部晩期に入るものも含まれるかと考えられる。第30図に図示した資料のほうが新しく後期後半から晩期のものと考える。

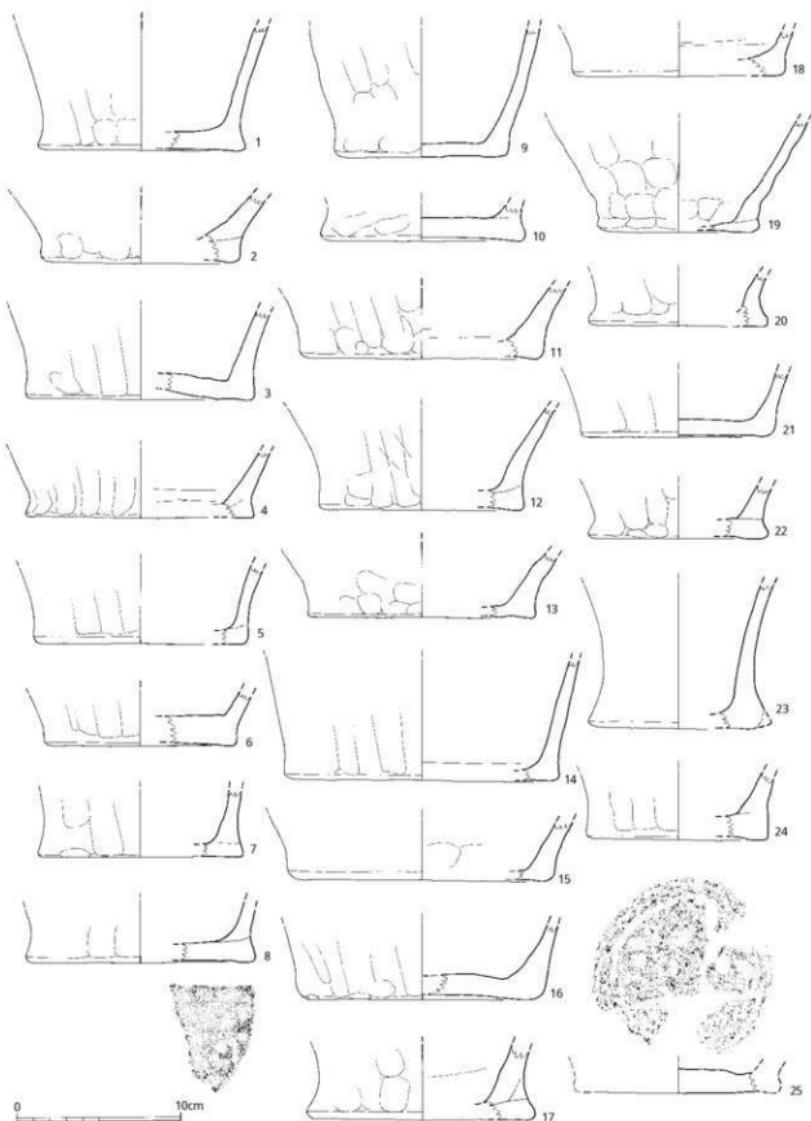
1~3は胎土に滑石を多量に含む特徴的なもの。1は浅鉢形で、弧を描きながら強く外反する口縁部を有する。口縁部に山形の突出部をつくり外面ははらかの意匠を施すようにもみえるが、摩滅しており指オサ工状としか観察できない。2は浅鉢形とみられるが、滑石を多量に含むためか破片



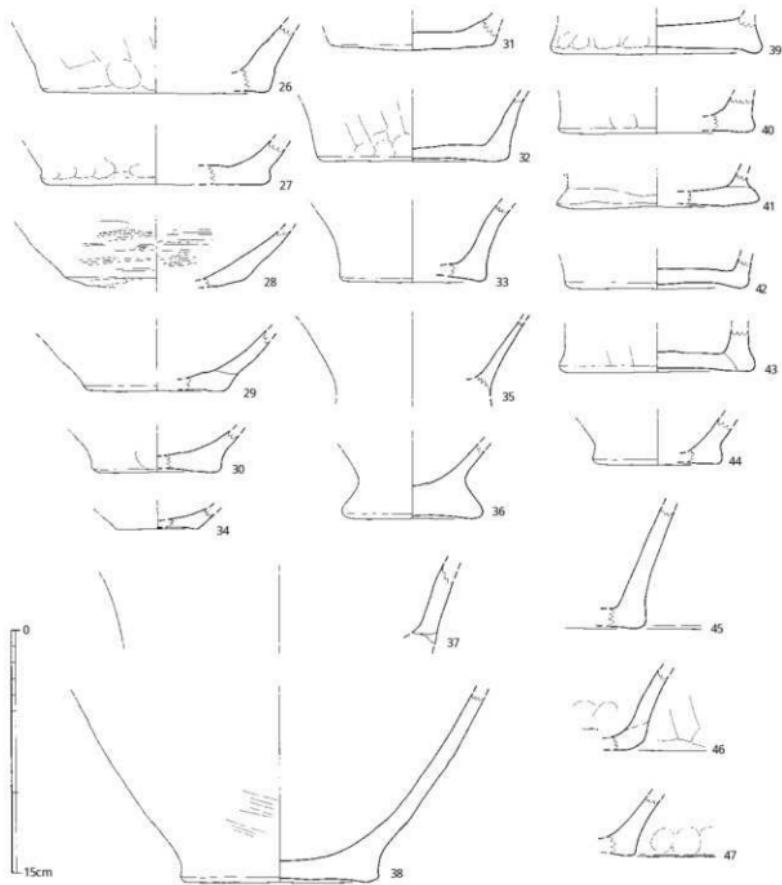
第29図 包含層出土土器実測図◎ (1/3)



第30図 包含層出土土器実測図⑩ (1/3)



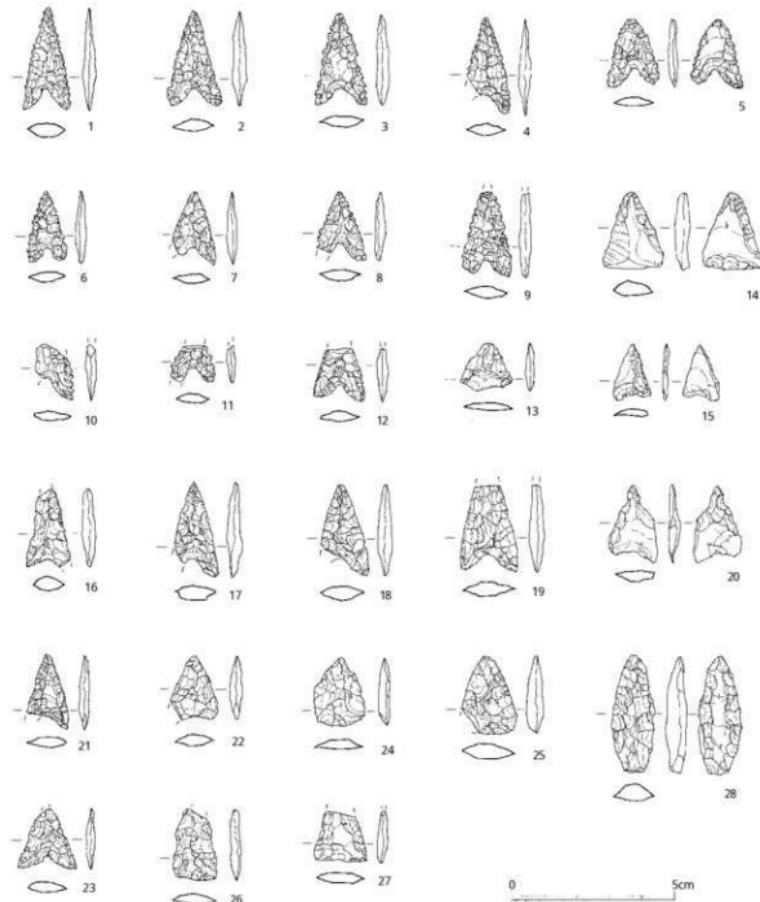
第31図 包含層出土土器実測図® (1/3)



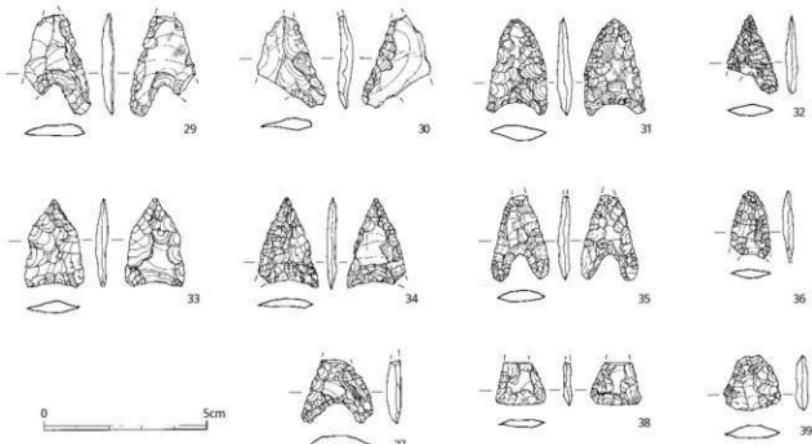
第32図 包含層出土遺物実測図⑩ (1/3)

の割口まで平滑になっており、本来のラインが決定し難くなっている。他は深鉢形となるものが多いと思われるが、小片のため傾きの判断が困難なものも含まれる。口縁部の断面形状はシンプルに丸みを有する四角い形状が多い。9・10・12は口縁部外面を肥厚させ、肥厚帯をつくる。22は波状口縁の波頂部。口縁部上面は強いナデにより凹帶をなす。21・23は水平に走る口縁部に山形の突出部をつくる。32・35は波状口縁の波頂部を含む資料であり、高低差のある波状口縁をつくるものであろう。33～38は内外面ともに条痕調整がみられる。31には補修痕とみられる穿孔がみられる。

第31・32図には底部資料を掲載した。底部付近の外面にまで文様が及ぶ事例はみられない。底面を厚い円盤状につくり、胴部を立ち上げるものが多く、接合痕を反映した割れ口をみせる事例が散見される。外面は縦方向のケズリもしくは強いナデによる調整。指圧痕を残すものも多い。34～38は形態や胎土から考えて後期後半の資料とみられ、それ以外は後期前葉から中葉の資料とみられるが、細かい時期の特定は難しい。



第33図 出土石器実測図① (2/3)



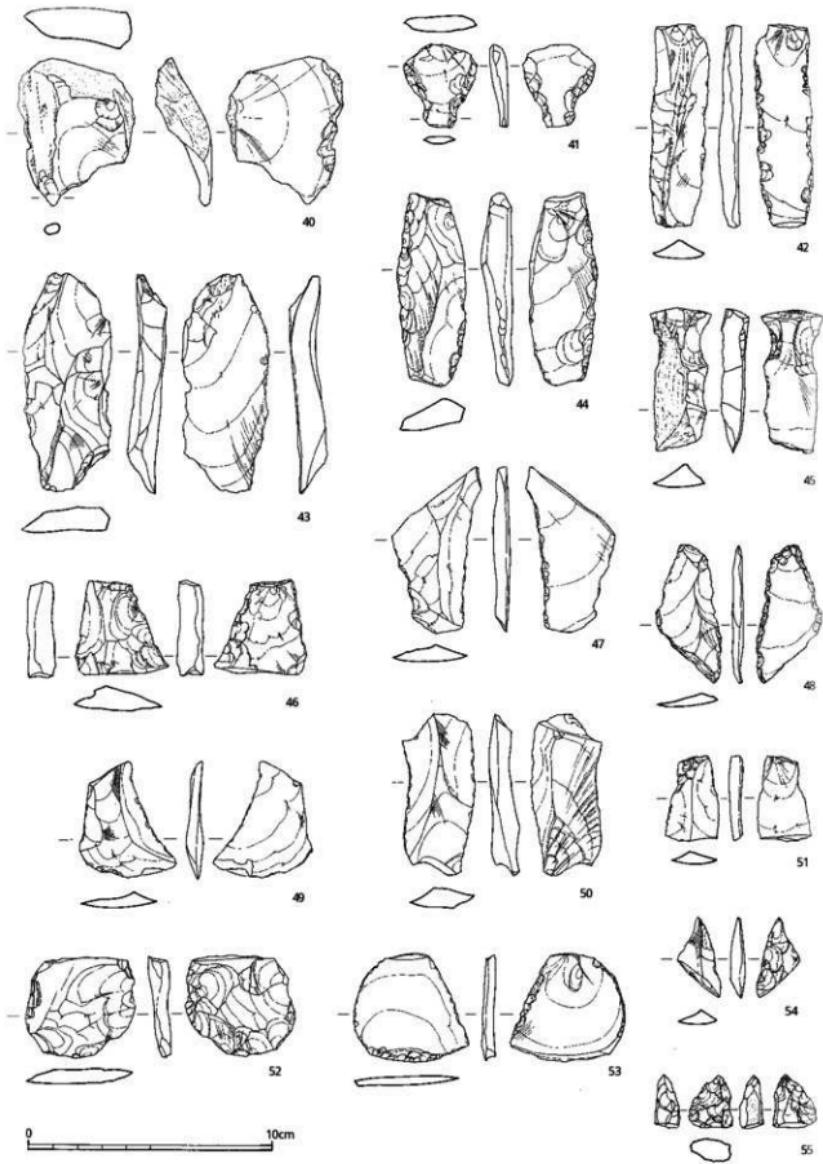
第34図 出土石器実測図② (2/3)

出土石器（第33~41図）

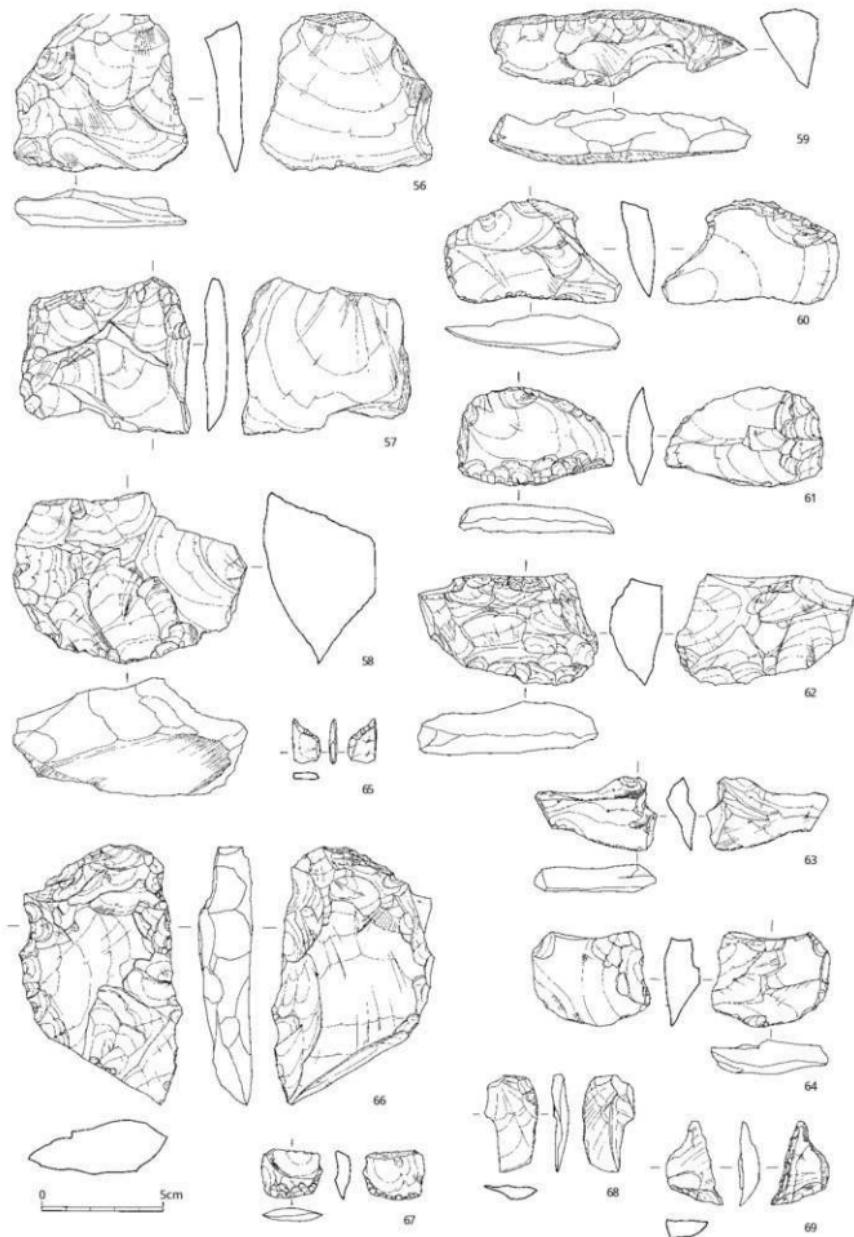
調査では打製石器を中心に数多くの石器が出土し、パンケースにて約4箱を数える。大半は剥片であり、調整剥片が多数を占める。調整を施すものでなくとも使用痕が観察されるものも多い。素材としては、石鐵・スクレーバーについては安山岩が多く、黒曜石製のものがそれに次ぎ、図化した遺物の比は凡そその比率を占めていると考えて良いと思われる。黒曜石は漆黒色を呈する良質のものが多く、透明度の高いものも含まれる。おそらく腰岳産のものが主体と考えられる。姫島産の特徴ある色調の黒曜石は剥片を含め出土していない。またチャートをはじめとする素材によるものも出土していない。黒曜石の剥片は小片となるものが多い一方で、安山岩の剥片には拳大程度の石核状の剥片が比較的多くみられるのが特徴的である。また安山岩には風化が著しく、灰白色を呈するものも多く含まれる。

石錘・すり石・叩石には凝灰岩製や頁岩製のものがみられる。調査中にはこれらの石材が比較的多くみられ、当地では地山に含まれないものであるため持ち込まれたものと判断し、石器の可能性があることで認識していたが、現場での洗浄で使用痕が確認されなかったものについては取り上げを行わなかった。しかし、礫石状の石に石錘が多数含まれていたことが後の整理作業で判明し、現場での取り上げが正確には行えなかった可能性を残す。また、すり石についても使用が顕著ではないものの若干滑らかとなるものが多く、それらについては図化を行っていない。

第33~34図は打製石鐵。刃部を鋸歯状としたものが安山岩製のものを中心に比較的多くを占める。安山岩製のものは比較的丁寧に両面から剥離調整したものが多く、14~15のような剥片石器は少ない。一方で黒曜石製のものは剥離面を残すものが多くみられる。



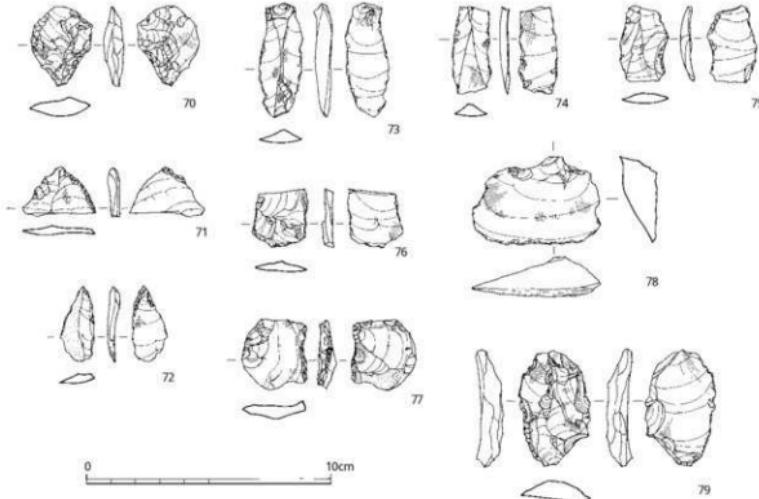
第35図 出土石器実測図③ (1/2)



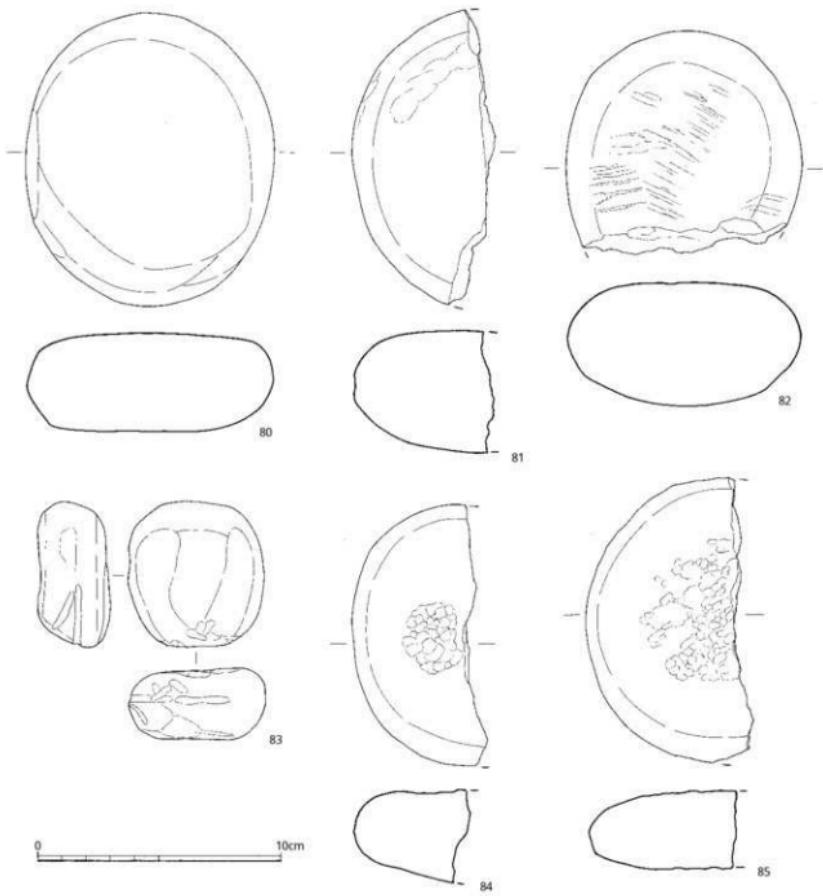
第36図 出土石器実測図④ (1/2)

第2表 I区第1次調査出土石器観察表①

種類	番号	図版	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
打製石器	33-1	17	打製石器	4Cグリッド表土	3.08	1.44	0.42	1.04	安山岩	凹基式
	33-2	17	打製石器	4Cグリッド	2.94	1.66	0.42	1.16	安山岩	凹基式
	33-3	17	打製石器	4Cグリッド	2.78	1.58	0.38	1.08	安山岩	凹基式
	33-4	17	打製石器	15号土坑	2.85	(1.15)	0.38	0.88	安山岩	凹基式
	33-5	17	打製石器	15号土坑	2.06	1.17	0.28	0.65	安山岩	凹基式
	33-6	17	打製石器	SDグリッド	2.18	1.18	0.32	0.49	安山岩	凹基式
	33-7	17	打製石器	SDグリッド	2.18	(1.30)	0.32	0.57	安山岩	凹基式
	33-8	17	打製石器	15号土坑	2.03	(1.50)	0.32	0.62	安山岩	凹基式
	33-9	17	打製石器	13号土坑	(2.54)	1.45	0.38	0.99	安山岩	凹基式
	33-10	17	打製石器	表土	(1.75)	(1.20)	0.30	0.47	安山岩	凹基式
	33-11	17	打製石器	8号土坑	(1.10)	1.38	0.30	0.34	安山岩	凹基式
	33-12	17	打製石器	5Cグリッド	(1.05)	1.58	0.38	0.74	安山岩	凹基式
	33-13	17	打製石器	5Cグリッド表土	1.43	1.56	0.26	0.54	安山岩	凹基式?
	33-14	17	打製石器	2区落ち込み	2.38	1.86	0.47	1.61	安山岩	平基式
	33-15	17	打製石器	4Aグリッド表裏面	1.62	1.14	0.22	0.31	安山岩	凹基式
	33-16	17	打製石器	1号土坑	(2.40)	(1.32)	(0.43)	0.98	安山岩	凹基式
	33-17	17	打製石器	1Aグリッド	(2.74)	(1.24)	(0.48)	0.92	安山岩	凹基式
	33-18	17	打製石器	6Aグリッド	2.64	(1.45)	0.42	1.10	安山岩	凹基式
	33-19	17	打製石器	3Bグリッド	(2.65)	1.80	0.44	1.32	安山岩	凹基式
	33-20	17	打製石器	6Bグリッド	2.40	1.52	0.32	0.81	安山岩	凹基式
	33-21	17	打製石器	P8	2.18	(1.26)	0.32	0.70	安山岩	凹基式
	33-22	17	打製石器	13号土坑	(2.00)	(1.45)	0.39	0.91	安山岩	凹基式
	33-23	17	打製石器	3Aグリッド	(1.85)	1.75	0.30	0.64	安山岩	凹基式
	33-24	17	打製石器	2区落ち込み	(2.04)	1.49	0.32	1.00	安山岩	平基式
	33-25	17	打製石器	表裏	2.33	(1.69)	0.51	1.75	安山岩	平基式
	33-26	17	打製石器	1号土坑	(2.12)	1.30	0.34	0.89	安山岩	平基式
	33-27	17	打製石器	8号土坑	(1.50)	1.59	0.33	0.78	安山岩	平基式
	33-28	17	打製石器	6号土坑	3.55	1.31	0.66	2.98	安山岩	凸基式
	34-29	17	打製石器	13号土坑	(3.08)	(2.10)	0.38	1.64	黒曜石	凹基式, 剥片
	34-30	17	打製石器	1号土坑	(2.85)	(2.15)	0.43	1.45	黒曜石	凹基式, 剥片
	34-31	17	打製石器	6グリッド	(3.00)	1.90	0.45	1.81	黒曜石	凹基式
	34-32	17	打製石器	3Bグリッド	2.401	(1.58)	0.32	0.61	黒曜石	凹基式
	34-33	17	打製石器	2区トレシチ下層	2.11	1.80	0.38	1.53	黒曜石	凹基式(浅い)
	34-34	17	打製石器	2区落ち込み	2.78	(1.80)	0.30	1.12	黒曜石	凹基式(浅い)
	34-35	17	打製石器	1区Bグリッド	(2.65)	1.74	0.34	1.15	黒曜石	凹基式
	34-36	17	打製石器	P1	(2.00)	(1.16)	0.29	0.66	黒曜石	凹基式
	34-37	17	打製石器	1区5~6Aグリッド	(1.91)	(2.14)	0.42	1.38	黒曜石	平基式
	34-38	17	打製石器	2区落ち込み	(1.30)	1.47	0.24	0.57	黒曜石	平基式
	34-39	17	打製石器	2区落ち込み	1.64	1.69	0.27	1.02	黒曜石	平基式



第37図 出土石器実測図⑤ (1/2)

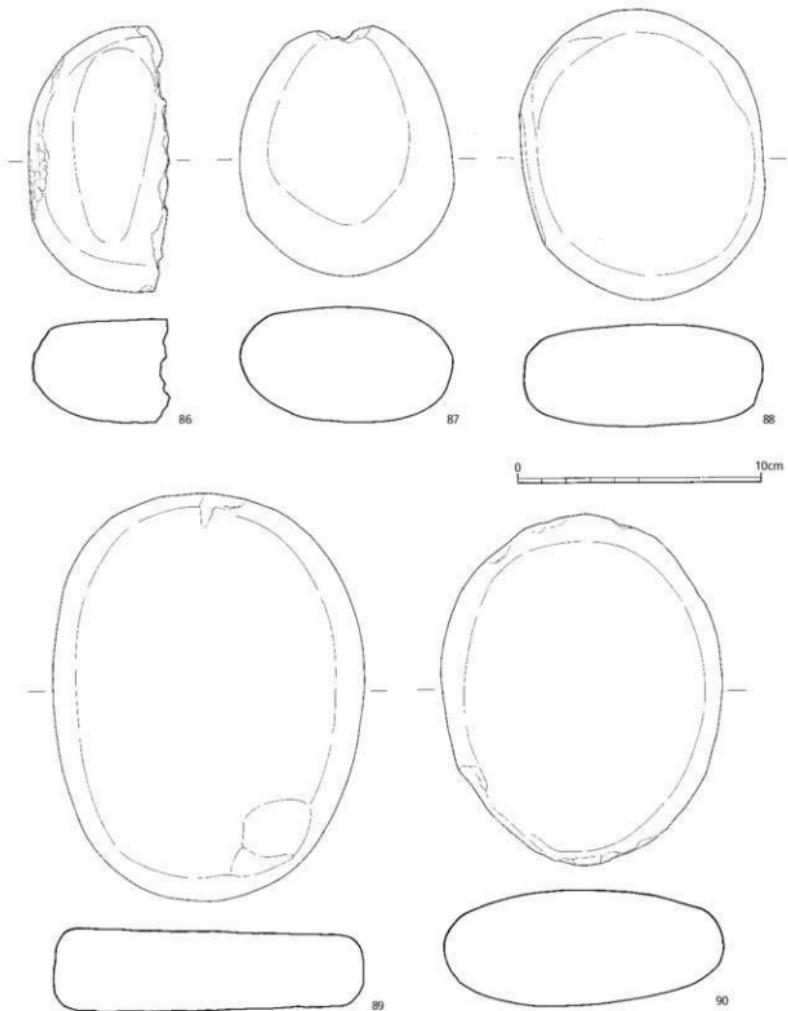


第38図 出土石器実測図⑥ (1/2)

40・41・70は石錐。40は剥片をほとんど調整せずに角を刃部として利用し、使用によりかなり擦れている。

第35～37図はスクレーパー類及び使用痕剥片。第35・36図が安山岩製で、第37図が黒曜石製である。縦長剥片を用いた削器や搔器がみられるが、分類が困難な剥片を利用した石器も多い。安山岩製のものは大形の傾向にあり、黒曜石製のものはいずれも小形である。

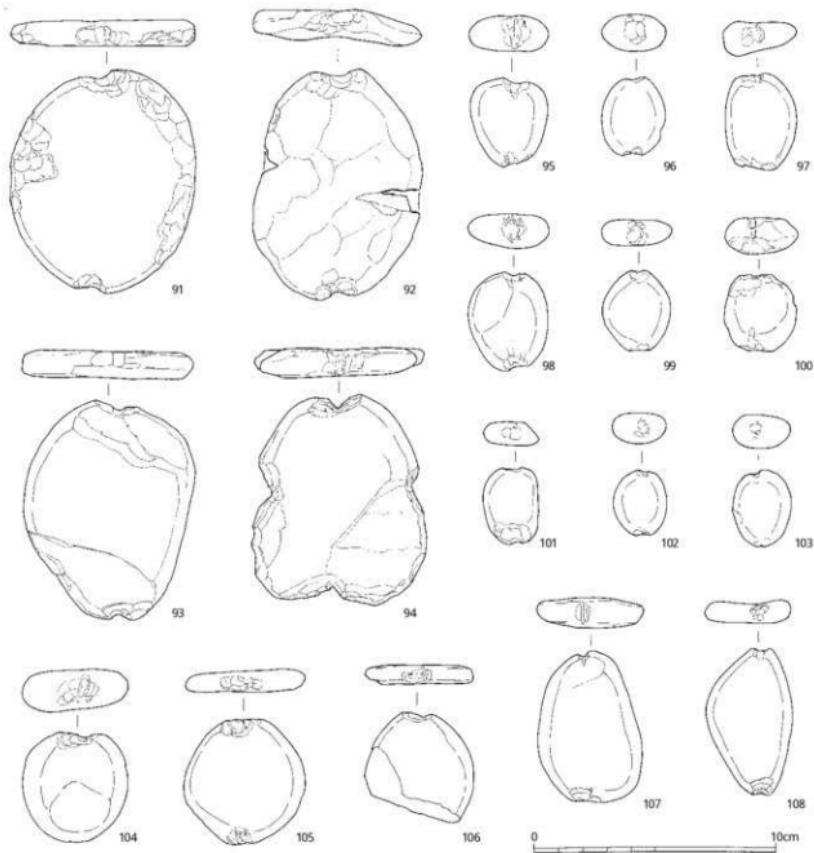
第38・39図はすり石・叩石類。いずれも器種を限定することなく、使用により表面が滑らかになり部分的に敲打がみられる。割れた後も使用を継続し、割れ面より内側に使用痕が顕著に残る例もみられる。



第39図 出土石器実測図⑦ (1/2)

第40図は石錘。大形のものと小形のものの二者に分類できるが、後者は先述のとおり見落として取上げを行い得なかつたものも多いと思われる。それに対し、大形のものは特徴的な形状であるため、見落としなく取上げることができたと思われるが、量は本来少なかったものと判断される。

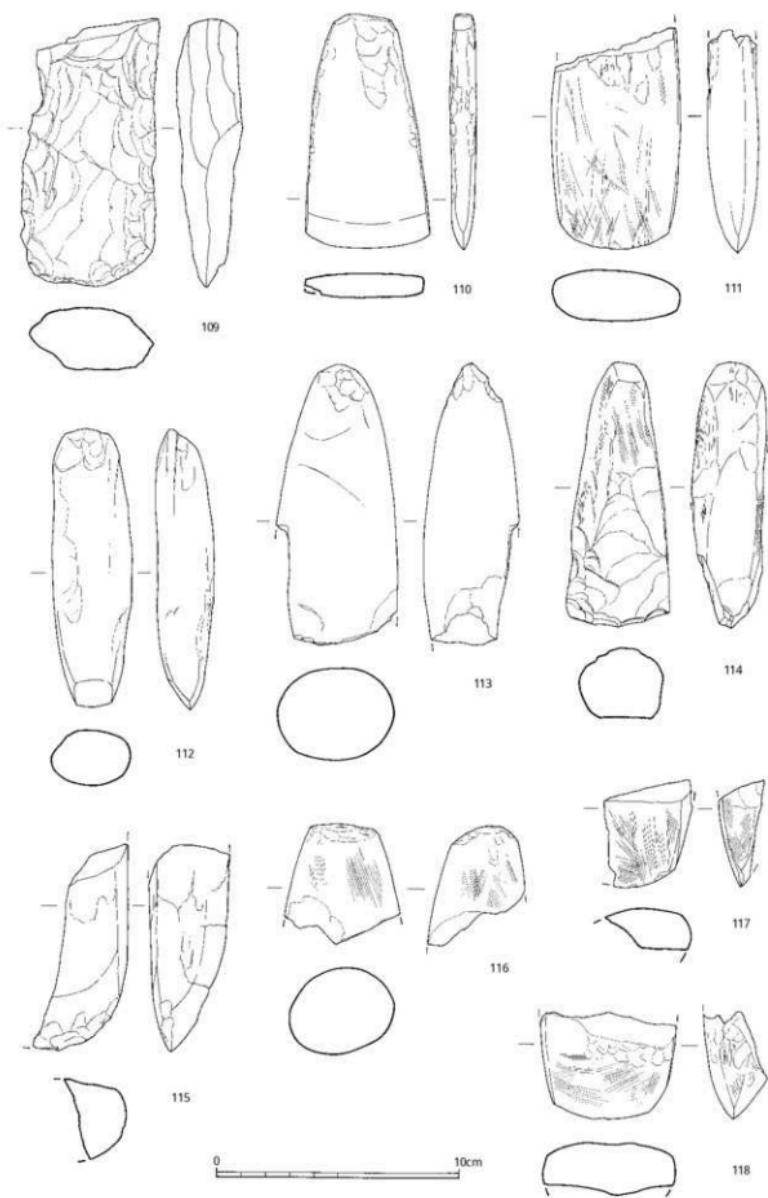
第41は石斧で、打製石斧は1点のみの出土。110は白色頁灰岩製の偏平な磨製石斧。こうした形



第40図 出土石器実測図⑧ (1/2)

状は少なく、体部の断面形状が丸みを帯びる砂岩ないし粘板岩製のものが多くを占める。112は刃部を丁寧に磨くが、体部は自然の形状を利用したものと思われる。

石器の出土地点や法量等の詳細については、第2・3表の観察表に譲ることとした。



第41図 出土石器実測図⑤ (1/2)

第3表 I区第1次調査出土石器観察表(②)

序号	番号	図版	種類	出土地点	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	備考
35	40	18	石錐	2区トレンド1	6.1	4.6	1.6	40.0	安山岩	原石面多く残す 先端使用顕著
35	41	18	石錐	SAグリッド	3.4	3.0	0.7	72	安山岩	先端欠損
35	42	18	石錐	1区SCグリッド	8.2	2.2	0.7	16.0	安山岩	左右縁使用痕
35	43	18	石錐	1区-SAグリッド	8.95	3.5	1.1	38.5	安山岩	左縁使用痕
35	44	18	石錐	1区4Aグリッド表土	7.7	2.8	1.2	29.5	安山岩	左右縁使用痕
35	45	18	石錐	2区落ち込み	5.75	2.5	1.2	12.4	安山岩	左右縁使用痕 原石面多く残す
35	46	18	石錐	1区4Aグリッド	3.9	3.8	0.99	15.0	安山岩	左縁使用痕
35	47	18	石錐	1区-SBグリッド	6.15	3.05	0.66	13.0	安山岩	左右縁使用痕
35	48	18	石錐	1グリッド	5.0	2.5	0.5	6.3	安山岩	左右縁使用痕 下縁は原石面
35	49	18	石錐	1区グリッド	4.8	3.7	0.63	6.8	安山岩	左右下縁使用痕 風化顕著
35	50	18	石錐	2区落ち込み	6.5	2.7	0.89	17.1	安山岩	左右縁使用痕
35	51	18	石錐	2区落ち込み	3.4	2.1	0.52	3.4	安山岩	左右縁使用痕
35	52	18	使用痕剥片	11号土坑	4.1	4.4	0.84	17.1	安山岩	右縁刃部か 風化顕著
35	53	18	剥片	11号土坑	4.4	4.4	0.54	11.3	安山岩	左右下縁使用痕
35	54	18	剥片	3Bグリッド	2.7	1.5	0.56	2.0	安山岩	右縁使用痕
35	55	18	剥片	3Bグリッド	2.1	1.7	0.88	3.3	安山岩	左縁刃部か
36	56	19	剥片	1区6グリッド	6.4	7.05	1.47	62.4	安山岩	右下縁使用痕
36	57	19	使用痕剥片	P43	6.3	6.7	1.2	53.2	安山岩	右下縁使用痕
36	58	20	剥片	12号土坑	7.0	9.45	5.42	250.4	安山岩	下縁使用痕 原石面多く残す
36	59	20	使用痕剥片	1区3Aグリッド	3.1	10.35	2.24	64.1	安山岩	下縁使用痕
36	60	20	剥片	1区5Bグリッド	4.0	6.9	1.44	39.6	安山岩	左下縁使用痕
36	61	20	剥片	1区4Dグリッド	4.0	6.4	1.05	28.7	安山岩	下縁使用痕
36	62	19	剥片	1号溝	4.5	6.85	2.03	75.2	安山岩	下縁使用痕
36	63	20	使用痕剥片	4Dグリッド	3.0	4.6	0.83	10.6	安山岩	下縁使用痕
36	64	20	使用痕剥片	1区5Bグリッド	3.65	4.6	1.46	25.4	安山岩	下縁使用痕
36	65	18	使用痕剥片	15号土坑	1.7	1.1	0.23	0.5	安山岩	右縁使用痕
36	66	19	使用痕剥片	1区5Bグリッド	10.0	6.2	1.95	124.7	安山岩	右縁使用痕
36	67	18	使用痕剥片	2区複疊	2.0	2.5	0.5	28	安山岩	下縁使用痕
36	68	20	使用痕剥片	3Cグリッド	3.92	2.07	0.53	38	安山岩	右縁使用痕
36	69	18	使用痕剥片	2Bグリッド	3.25	2.85	0.73	42	安山岩	右縁使用痕
37	70	20	石錐	2区トレンド1	3.25	2.4	0.75	5.2	黒曜石	黒曜石
37	71	20	ナイフ	2区トレンド1	1.9	3	0.4	17	黒曜石	黒曜石
37	72	20	使用痕剥片	13号土坑	3.0	1.4	2.1	11	黒曜石	左縁先端使用痕
37	73	20	削器	2区落ち込み	4.5	1.75	0.5	40	黒曜石	左右縁使用痕
37	74	20	剥片	1区6Aグリッド	3.6	1.55	4.8	25	黒曜石	左右下縁使用痕
37	75	20	削器	2区落ち込み	3.1	1.9	0.38	2.1	黒曜石	左縁使用痕
37	76	20	使用痕剥片	1区4Bグリッド	2.2	2.1	0.38	18	黒曜石	右縁使用痕
37	77	20	剥片	1区5Bグリッド	2.9	2.6	0.59	4.6	黒曜石	右縁使用痕
37	78	20	剥片	1区6Bグリッド	3.5	5.1	1.48	19.8	黒曜石	右下縁使用痕 原石面多く残す
37	79	20	使用痕剥片	4Dグリッド	4.7	2.8	0.81	11.9	黒曜石	左縁使用痕
38	80	21	すり石	1区2Aグリッド	11.7	9.8	4.15	817.2	凝灰岩	全面的に磨れ
38	81	21	すり石	P43	11.8	5.85	5.05	403.1	凝灰岩	上面使用
38	82	21	すり石	P37	9.1	9.7	5.1	635.1	凝灰岩	全面的に磨れ 滴状使用痕あり
38	83	21	すり石	6号土坑	6.0	5.55	2.68	140.0	凝灰岩	全面的に磨れ 剣面に滴状使用痕
38	84	21	叩石	P43	10.6	4.9	3.81	275.3	凝灰岩	上下面磨れ 片面敲打
38	85	21	叩石	P51	11.6	6.0	3.1	315.0	凝灰岩	上下面磨れ 敲打
39	86	21	すり石	15号土坑	10.8	5.8	4.4	364.4	凝灰岩	上面磨れ 側面一部敲打
39	87	21	すり石	1区3Cグリッド	10.0	8.7	4.8	623.7	凝灰岩	上面磨れ 下面わざかに磨れ
39	88	21	すり石	1区2Aグリッド	11.9	10.0	4.1	809.1	凝灰岩	全面磨れ
39	89	21	すり石	1区3Cグリッド	16.7	12.65	3.4	1304.2	凝灰岩	全面状に整形
39	90	21	すり石	2区落ち込み	14.2	11.5	4.6	1106.5	凝灰岩	上下面磨れ
40	91	17	石錐	表土	9.15	7.55	1.15	118.3	凝灰岩	一方向打ち欠き
40	92	17	石錐	表土	9.3	6.75	1.2	93.7	安山岩	二方向打ち欠き
40	93	17	石錐	14号土坑	8.9	6.8	1.16	101.0	片岩	二方向打ち欠き
40	94	17	石錐	5Bグリッド	8.5	7.1	1.18	107.4	片岩	四方向打ち欠き
40	95	17	石錐	2区トレンド1	3.65	3.15	1.36	22.7	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	96	17	石錐	1号溝	3.2	2.65	1.54	16.3	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	97	17	石錐	1区4Aグリッド	4.0	3.0	1.36	22.4	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	98	17	石錐	4Aグリッド	4.1	3.29	1.34	24.5	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	99	17	石錐	15号土坑	3.22	2.8	1.02	139	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	100	17	石錐	15号土坑	3.12	3.0	1.5	19.1	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	101	17	石錐	15号土坑	3.04	2.22	0.86	9.3	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	102	17	石錐	15号土坑	2.68	2.27	1.23	102	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	103	17	石錐	1号溝	3.1	2.42	1.27	118	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	104	17	石錐	4Bグリッド	4.45	4.36	1.7	47.2	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	105	17	石錐	1区2グリッド	5.03	4.87	0.87	29.7	凝灰岩	二方向打ち欠き
40	106	17	石錐	4Bグリッド	(4.2)	4.42	0.75	20.6	片岩	二方向打ち欠き
40	107	17	石錐	2区包含層	6.12	4.28	1.16	42.8	片岩	二方向打ち欠き
41	108	17	石錐	1区3Aグリッド	5.93	3.53	0.76	25.4	片岩	二方向打ち欠き
41	109	21	打製石斧	2区落ち込み	10.7	5.5	2.5	191.9	片岩	白色石岩
41	110	21	打製石斧	1区透構面	9.6	5.0	9.53	107.6	白色石岩	白色石岩
41	111	21	打製石斧	1区SB-Cグリッド	(8.55)	5.25	2.1	166.4	片岩	白色石岩
41	112	21	打製石斧	50グリッド	11.26	3.27	2.23	107.6	白雲石	白雲石
41	113	21	打製石斧	試掘調査	(11.4)	4.9	3.8	290.8	粘板岩	粘板岩
41	114	21	打製石斧	包裏層	(10.8)	4.3	2.8	178.9	頁岩質砂岩	頁岩質砂岩
41	115	21	打製石斧	1号溝	(7.5)	(3.3)	3.05	87.0	頁岩質砂岩	頁岩質砂岩
41	116	21	打製石斧	1区6Bグリッド	(4.9)	3.6	3.65	95.3	頁岩質砂岩	頁岩質砂岩
41	117	21	打製石斧	6グリッド	(3.95)	(3.55)	1.7	29.8	玄武岩	玄武岩
41	118	21	打製石斧	4Dグリッド	(4.35)	5.56	2.16	71.9	粘板岩	粘板岩

2 I区第2次調査

1) 調査の経過

平成20年度に実施した第2次調査区は、インターチェンジ本体部分の南西端部に位置する。平成18年度に調査を実施した第1次調査地点の道路を挟んで南側に当たる。沖積地の微高地上の立地と考えられ、調査面積は600m²で、調査面の標高は7m前後である。

最初の検出面ではほとんど遺構は検出されず、第1次調査の内容から縄文時代後期の包含層の堆積が想定されたため、A～Pのグリッドで徐々に掘り下げ、包含層の堆積状況を確認しながら、遺構の検出を行っていった。

2) 遺跡の概要

主な遺構は、溝と土坑である。最初に検出を行った調査面において2条の小さな溝が認められたが、非常に浅く、明確な時期を示す遺物は少ない。土坑は計7基検出され、多くはグリッドMとその周辺に位置する。また、グリッドJ・K間のベルトの西端部付近の下位で、小碟の集中する部分が見られた。遺物については、土坑や包含層から多くの縄文時代後期の土器とともに、黒曜石や安山岩製の打製石器や磨製石器等が出土した。

北西端部では、わずかな範囲であるがにごった暗灰褐色土が浅く堆積しており、第1次調査地点から連続するクリークの一部であると思われる。小片であるが須恵器等の出土も見られた。北東端部のグリッドL・N内では、谷部への落ち際が認められ、広く東側へ急激に落ち込むと見られる。この谷部は第1次調査から連続しており、また東側に隣接する地点の確認調査の際のトレーニングでも認められた。包含層を掘削した後の基盤層の地形は、全体的に南東方向へ下がり、包含層の堆積状況からも同様の傾向が認められる。

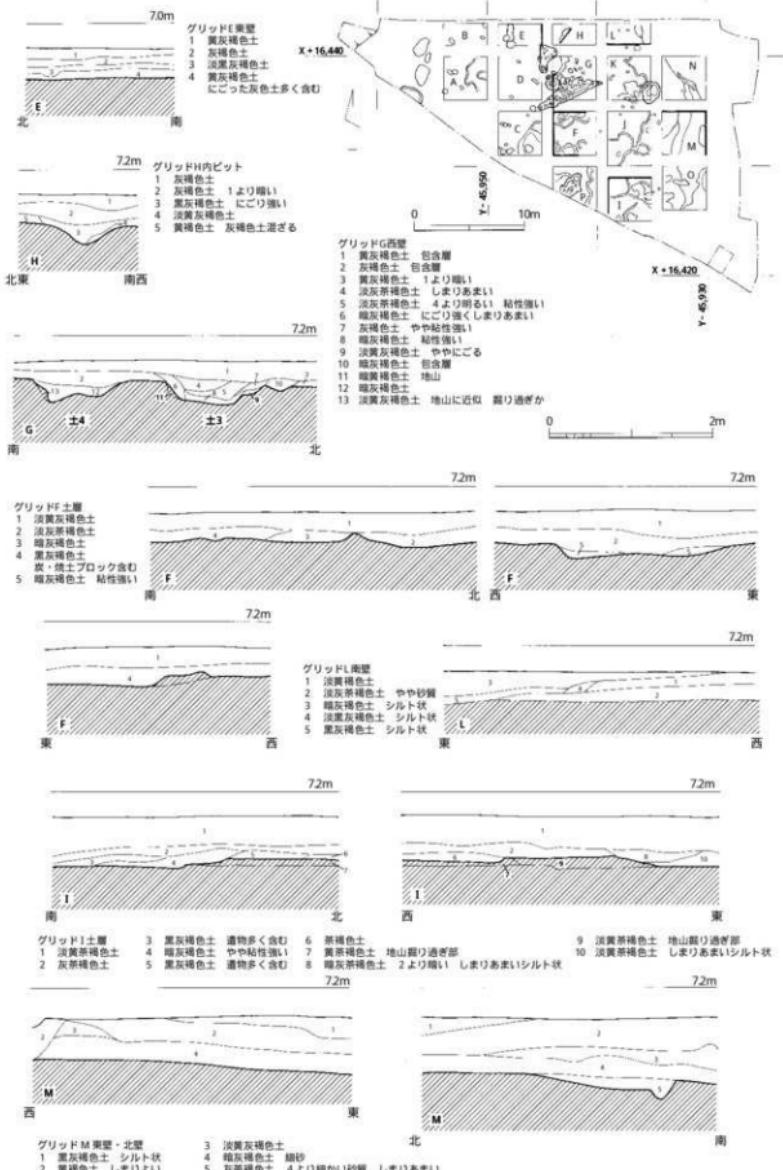
包含層の堆積状況（第42図）

調査区内における包含層の堆積状況の傾向について、数箇所のグリッド壁の土層等から判断し、以下に整理する。

基盤層は全体的に南東方向へ下がる地形となっており、当初の調査面は全面的に高低差があまりないため、包含層は南北しくは東側になるにつれ厚く堆積する傾向がある。グリッドA・Bでは深さ20cm程度の深さまでの掘削であるが、グリッドFやGでは30～40cm程度の深さが中心で、グリッドIやMでは50cm以上掘削した部分もある。

調査区西側を中心にほとんどの範囲での最上層は、淡黄褐色、黄灰褐色、淡黄灰褐色と観察部分によりわずかに色調の相違はあるが、基本的に同一の層と考えられる。この層については、出土遺物が少なく、後出の切り込む遺構は平面的にわずかに検出されただけである。その下位でも、灰茶褐色、灰褐色等の色調の差はあるが同一と考えられる層が広い範囲で認められる。この層の出土遺物は最上層より多く、グリッドGで見られるように遺構面はその上下両面で認められる。更に下位で、非常に多くの遺物が出土する黒灰褐色土主体の層が認められる部分もある。

なお、グリッドL・Mで見られるように、調査区東端に近い部分のみの上層で、シルト状の黒灰褐色土層、暗灰褐色土層やその下位で明るくしまりのよい黄褐色土層が堆積する。基盤層が東



第42図 包含層堆積土層図(1/60、略配置図は1/450)

側に向けて急激に落ち込む谷状部分に隣接し、遺物の出土がほとんど無いため、それらは谷部のある程度の埋没後も低かった部分に流入した比較的新しい堆積土と想定される。

3) 検出された遺構

土坑

1号土坑（図版23、第43図）

調査区北西部で調査区壁際に位置しており、南側は調査区外に及ぶ。検出した範囲で長軸224cm、短軸89cm、深さ18cmで、不整橢円形のような平面形となる可能性がある。グリッドを掘削して下層で検出したのではなく、当初の調査面で検出した唯一の土坑である。ただ、浅く壁の立ち上がりが緩やかであるため、落ち込み状のものである可能性が高い。埋土は淡灰褐色土の1層である。図示できる遺物は出土していない。

2号土坑（図版23、第43図）

調査区北端部のグリッドE内に位置する土坑である。本遺構の検出前に、先行する切り合い関係のピットを2基検出して掘削したが、一部本遺構の埋土まで誤って掘り過ぎてしまい、南側で欠失した部分がある。長軸164cm、短軸59cmの細長い不整形の平面形で、長軸の中央付近でやや括れる。深さは30cm程度の部分が多く、南端部で40cm程度とそれよりやや深い。壁の立ち上がりは全体的に緩やかなため、底面は非常に狭くなっている。埋土は2層からなり、上層で淡灰黒褐色土、下層で淡灰茶褐色土である。切り合うピットに伴って設けていたベルトで観察を行った土層断面から、遺構面は検出面とさほど変わらない高さと確認された。出土土器はほとんどが小片で、北側で礫がまとまって検出された。

出土土器（図版28、第45図1~8）

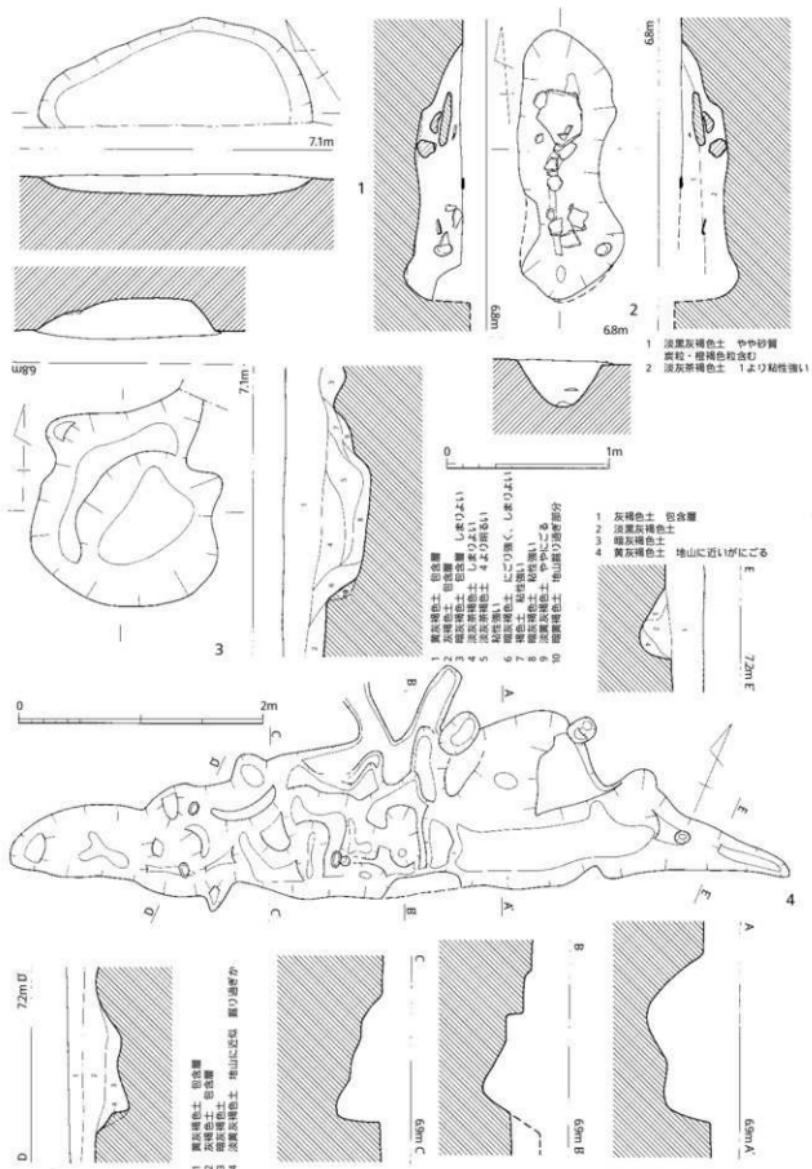
1・2は、斜行する短い沈線が施される深鉢口縁部である。3は、爪による縦位の施文が見られる深鉢口縁部である。4は無文の深鉢で、外面口縁部付近が凹線状の窪みが見られる。5は無文の深鉢口縁部で、口唇部にはキザミが施される。6は深鉢口縁部で、内側して立ち上がる。外面には浅い凹線の施文が見られ、幅広の口唇部には細かいキザミが施される。7は深鉢底部の小片で、外面にわずかに文様が残存する。胎土には滑石が含まれる。8は深鉢底部の小片で、無文である。

3号土坑（図版23、第43図）

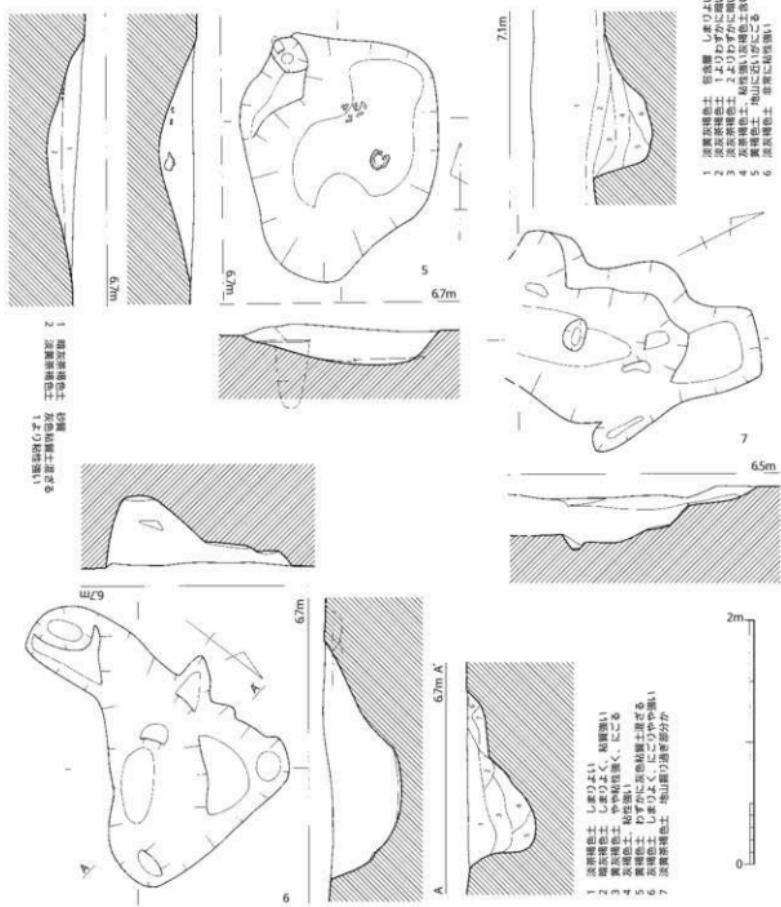
グリッドG内および一部外側に位置する土坑で、4号土坑の北側および6号土坑の南側に隣接する。径115~120cm程度の非常に不整な円形状の平面形で、深さ24cmである。北東側に浅いテラス状の部分があり、壁の立ち上がりは全体的に緩やかである。埋土は淡灰茶褐色土が主体でレンズ状に堆積し、黄灰褐色土の包含層の下位に遺構面があることが確認された。

4号土坑（図版24、第43図）

グリッドG内および一部外側に位置する土坑で、3号土坑の南側に隣接する。長軸640cm、短軸130cm程度の非常に細長く不整な溝状の平面形である。壁の立ち上がりや底面は一様ではなく、多数のテラス部があるとともに、傾斜の変化や起伏が著しく、複雑な内部となっている。最も低い



第43図 1~4号土坑実測図 (1・4は1/40、他は1/30)



第44図 5~7号土坑実測図 (1/40)

位置で50cm程度の深さである。暗灰褐色土をはじめとした層からなり、あまり複雑な堆積は見られない。図示できる遺物は出土していない。

5号土坑（図版25、第44図）

グリッドK内および一部外側に位置する土坑で、長軸200cm、短軸160cmで不整隅丸方形のような平面形で、深さ35cmである。壁の立ち上がりは全体的に緩やかで、底面との境界は明瞭ではなく、そのため底面は不整な形状となる。埋土は2層からなり、上層は砂質の暗灰茶褐色土、下層は粘質土を含む淡黄茶褐色土である。北西側にテラス状の部分およびピットが見られる。土坑内で

小碟がまとまる部分があり、北西部のピット内では小碟がつまっていた。出土土器はわずかである。
出土土器（図版28、第45図9～11）

9は深鉢口縁部で、爪によると見られる縦位の施文が見られる。10は無文の深鉢口縁部で、端部は肥厚する。11は深鉢底部で無文である。

6号土坑（図版25、第44図）

グリッドD・E・G・H間のベルトの下位で検出された土坑で、3号土坑の北側に隣接する。長軸242cm、短軸160cm程度の非常に不整な平面形である。壁の立ち上がりは一様ではなく、複数のテラス部や起伏があるため底面は非常に狭くなり、深さ63cmである。複数の堆積土層が認められ、全体的に粘性のある特徴がある。出土土器はわずかである。

出土土器（図版28、第45図12～15）

12～15はいずれも深鉢口縁部である。12は外面に刺突文と沈線が認められる。13は無文で、わずかな屈曲で稜線が認められる。14は外面にやや幅広の沈線が残る。15は無文で、外反気味にわずかに開き、口唇部にはキザミが施される。

7号土坑（図版26、第44図）

調査区南壁際の中央付近のグリッドP内で検出された土坑で、一部は調査区外に及ぶ。検出した範囲で長軸200cm程度、短軸140cm程度で不整な平面形である。壁の立ち上がりは一様ではなく、傾斜の変化や複数のテラスの状部分見られるため底面は非常に狭くなり、深さは45cm程度である。遺構面は、淡黄灰褐色土、淡灰茶褐色土の包含層の下位に認められ、埋土は複数の堆積層が認められ、粘性のあるものが主体である。図示できる遺物は出土していない。

ピット出土の土器（図版28、第45図16～19）

16～19はいずれも深鉢の口縁部である。16には外面に強いナデによる施文が残存する。17は内傾して立ち上がっており、口唇部には細かいキザミが見られる。18は無文で、口縁部は屈曲してわずかに開く。19には端部付近を肥厚させた部分に刺突による文様が見られる。

溝

1号溝（図版22、第1図）

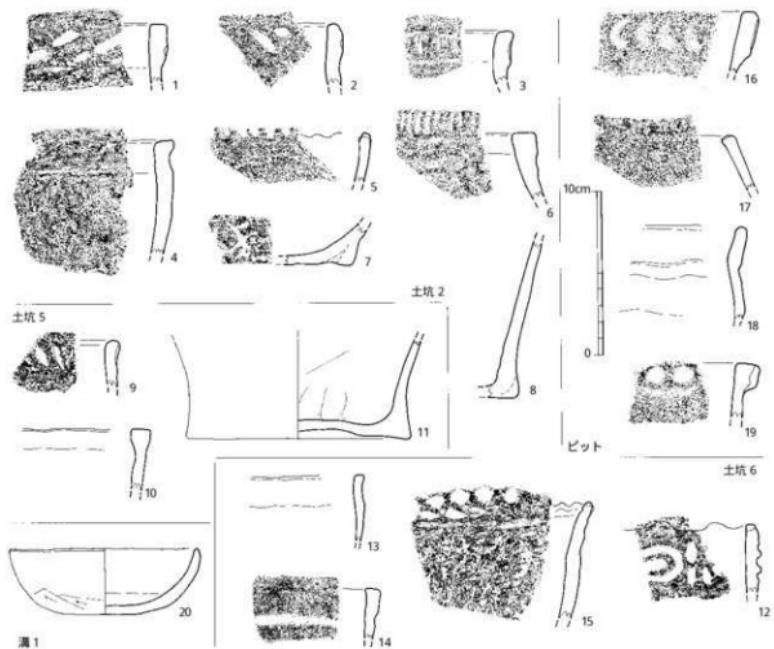
調査区西半部に位置し、北東—南西の軸で通る溝である。表土直下の包含層掘削前の調査面で検出された。調査面での幅は20cm以下、深さは10cm以下と非常に小型である。南側は調査区外に延び、中途で一旦途切るとともに北端でも途切れる。埋土は淡灰茶褐色土の一層である。出土土器はわずかである。

出土土器（第45図20）

20は土師器碗で、外面下位にはケズリが施される。古墳時代後期の所産と考えられる。

2号溝（図版22、第1図）

調査区東半部に位置し、南北の軸で通る溝である。表土直下の包含層掘削前の調査面で検出さ



第45図 遺構出土土器実測図 (1/3)

れた。調査面での幅は20cm以下、深さは10cm以下と非常に小型である。南側は調査区外に延び、中途で一旦途切るとともに北端でも途切れる。また、一部で切り合いが見られ、掘り返しや複数回にわたって部分的に掘削していくた可能性がある。埋土は淡灰茶褐色土の一層である。図示できる遺物は出土していない。

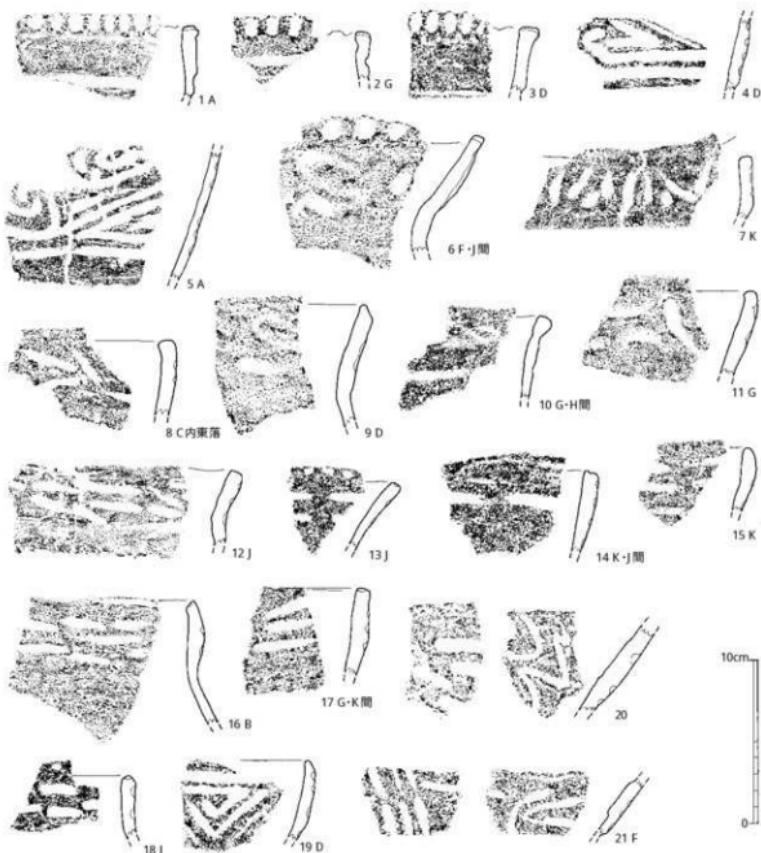
包含層出土の土器（番号の右は出土グリッド）

第46図に示した土器は、横位をはじめとした沈線や浅い凹線状の施文が見られる縄文土器である。口唇部にキザミが施されるものもある。1~5・10の胎土には滑石が多量に含まれる。20~21は、内外面に文様が施される浅鉢と考えられ、他は深鉢である。阿高系土器で、坂の下式の範疇となるものが主体と考えられる。

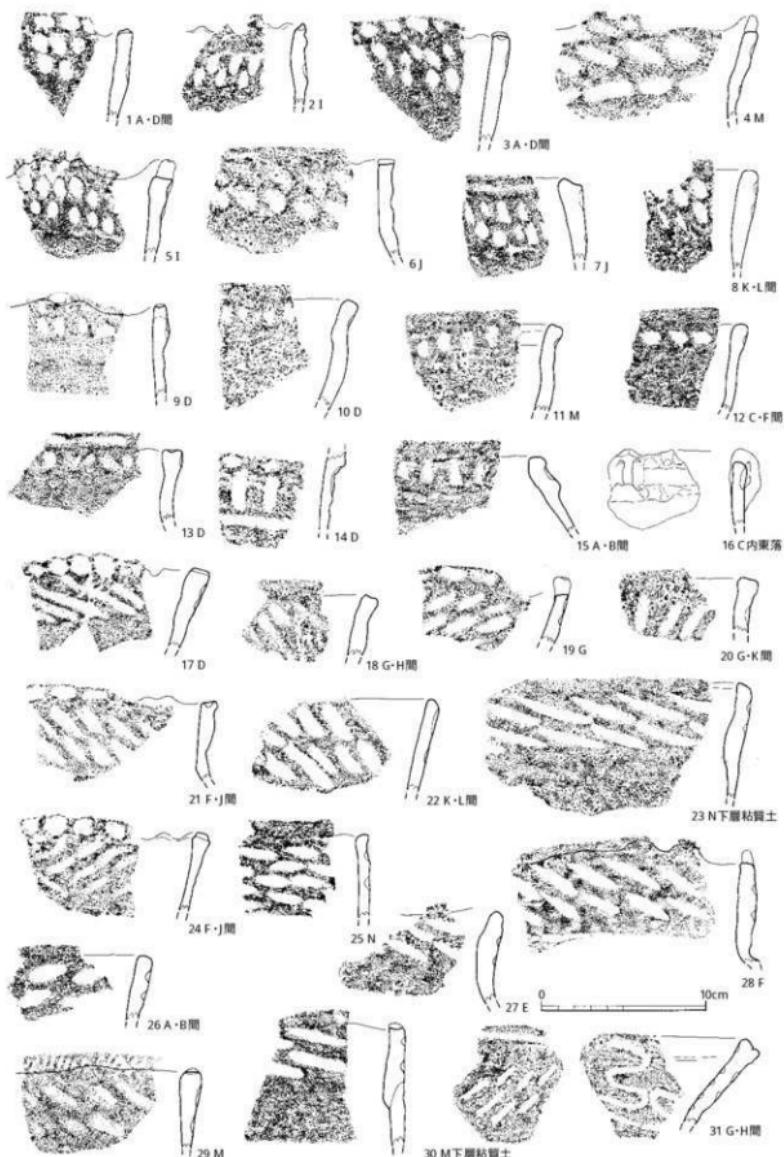
第47図1~15に図化した土器は、深鉢口縁部に凹点文が連続する特徴が見られる縄文土器である。1~7は2列にわたって見られ、口唇部に刻みを施すものもあり、8~15は1列である。4はやや長い凹点文で、綾杉文に近い配置である。13はやや縦長の凹点文で、沈線も見られ、胎土には滑石の含有が目立つ。15の凹点文は微かなものである。坂の下式の範疇となるものが主体と考えられる。第47図16~31に図化した土器は、口縁部に斜行する凹線が連続する特徴が見られる縄文土器である。30は内外面に施文される浅鉢で、他は深鉢である。口唇部にキザミが施されるものがあり、その内28のキザミは細かいものである。南福寺式の範疇となるものが主体と考えられる。

第48図に図化した土器は、沈線による文様を有する縄文土器深鉢で、綾杉状や逆S条に連続して施文されるものも含む。また、幅広の浅い凹線状の文様をもつものも含まれる。口唇部にキザミを有するものもあり、13には沈線とともに低い突帯部分に廻るキザミが見られる。6・7・11・14・19・20の胎土には滑石が多く含まれる。南福寺式の範疇となるものが主体と考えられる。

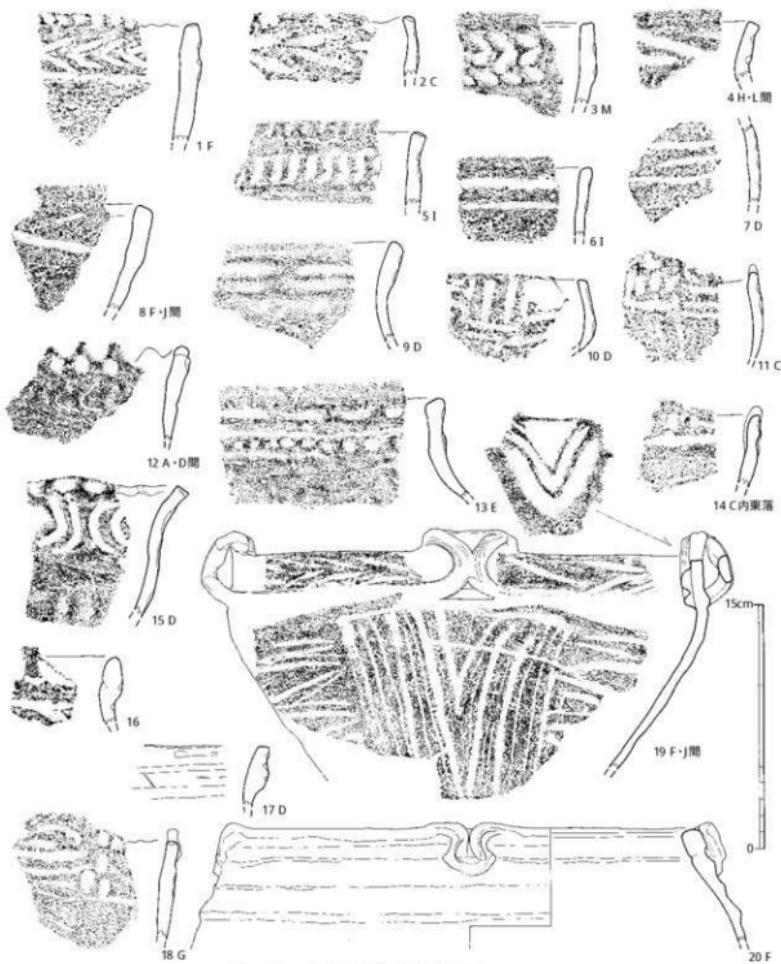
第49図1~16に図化した土器は、主に細い沈線による文様を有する縄文土器深鉢である。1~9には爪により施したと見られる斜行する細い沈線が連続する。1・4の胎土には滑石が多く含まれる。7は内面に施文され、10・15には内外面ともに施文が見られる。口唇部にキザミを施すものも見られる。出水式の範疇となるものが主体と考えられる。



第49図 包含層出土土器実測図① (1/3)



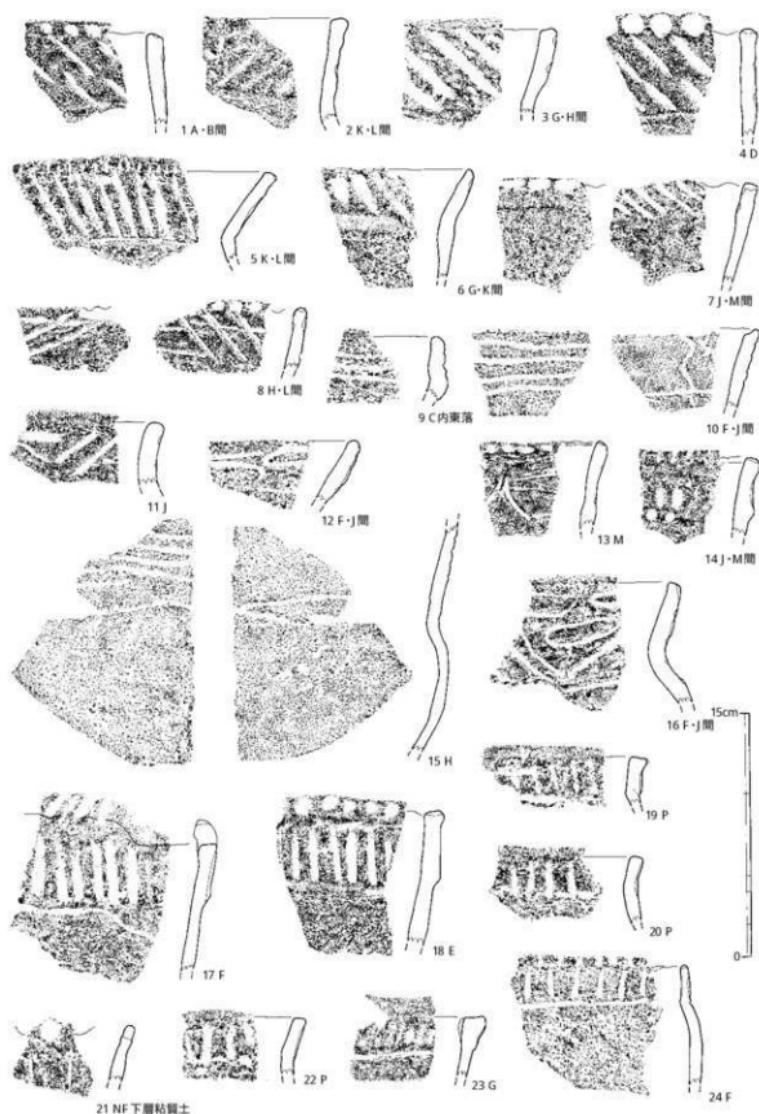
第47図 包含層出土土器実測図② (1/3)



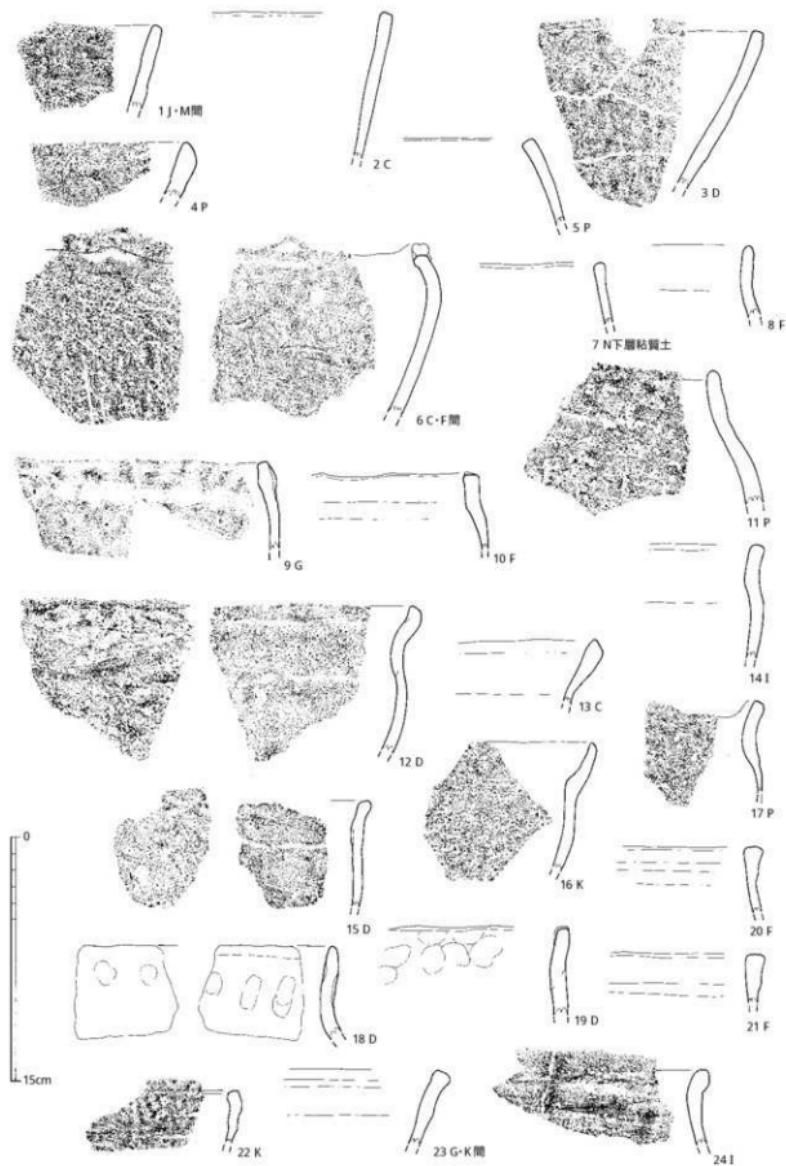
第48図 包含層出土土器実測図③ (1/3)

第49図17~24に図化した土器は、縦位の沈線が連続する縄文土器深鉢で、横位の沈線が伴うものも多い。19・20は同一個体の可能性が高い。口唇部にキザミを施すものも見られる。23は突帯状に低く隆起する部分にキザミを有する。出水式の範疇となるものが主体と考えられる。

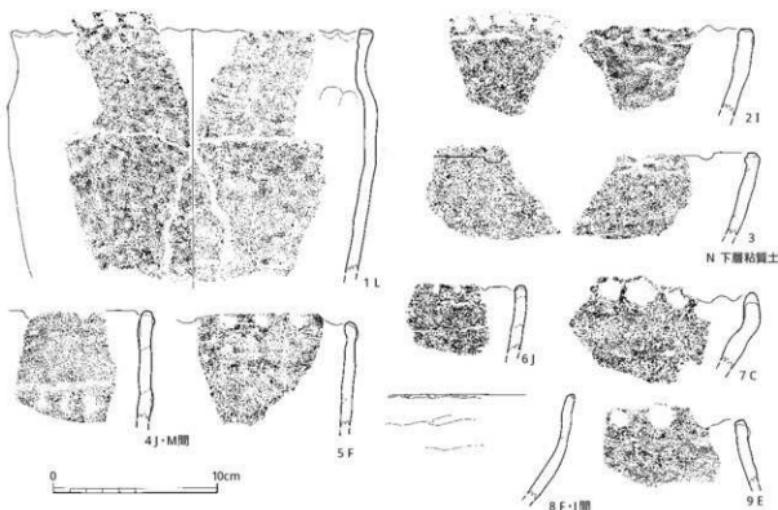
第50図に示した土器は、無文の縄文土器深鉢である。9・18・19には強い指押さえの痕跡が連続して見られる。1~4の口縁部はほぼ直線的に外側に延び、5~11は内傾気味にすぼまる部分がある。12~19の口縁部は、わずかであるものもあるが屈曲して外側へ開く。20~21の口縁端部付近が肥厚



第49図 包含層出土土器実測図④ (1/3)



第50図 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)



第51図 包含層出土土器実測図◎ (1/3)

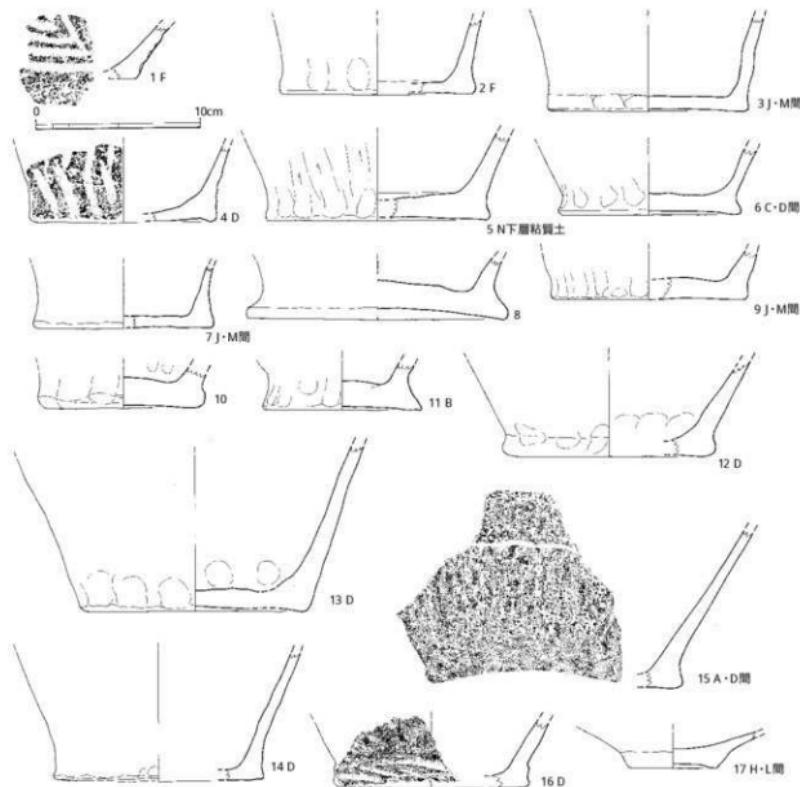
する。22は胎土に多量に滑石を含む。

第51図に示した土器は、無文で口唇部にキザミを有する縄文土器深鉢である。4には強い指押さえによる痕跡が外面に見られる。

第52図に図化した土器は、縄文土器深鉢の底部である。1・4には施文が見られ、4・8の胎土には多量の滑石が含まれる。7は突出した底部で、他のものとは時期が大きく異なる可能性がある。

第53図1~6に図化した土器は、キザミを伴う突帯を有する特徴のある縄文土器である。2の突帯は非常に低く、口縁端部外面に貼り付けられる。1・2・4には細い沈線も伴い、1は内面にも施文が見られるとともに、口唇部にキザミが施される。23には「×」状の施文が残存する。

上で行った分類に当てはまらない資料について、第53図7~20に図化した。7~10は縄文土器深鉢口縁部の一部である。10の胎土には多量の滑石が含まれる。11~13は三本沈線の特徴等から福田K II式の範疇のものと考えられる。14・15はともに胎土に多量の滑石を含み、同一個体の可能性がある。14は、その形状から対称的な器形ではなく、細長い器形に復元されると考えられる。また、突出部が伴い、外面には一部沈線が残存する。15は注口部分である。16・17は爪によるとみられる連続施文が認められるもので、御手洗式の範疇と考えられる。18には細い沈線が複数斜行し、鐘崎式の範疇のものである可能性がある。19は、屈曲部から口縁部が内傾しながら立ち上がり、外面には細い沈線が施される。縄文時代晩期の浅鉢の可能性がある。20は須恵器杯身の口縁部付近の小片である。



第52図 包含層出土土器実測図⑦ (1/3)

出土石器 (図版32~34、第54~59図)

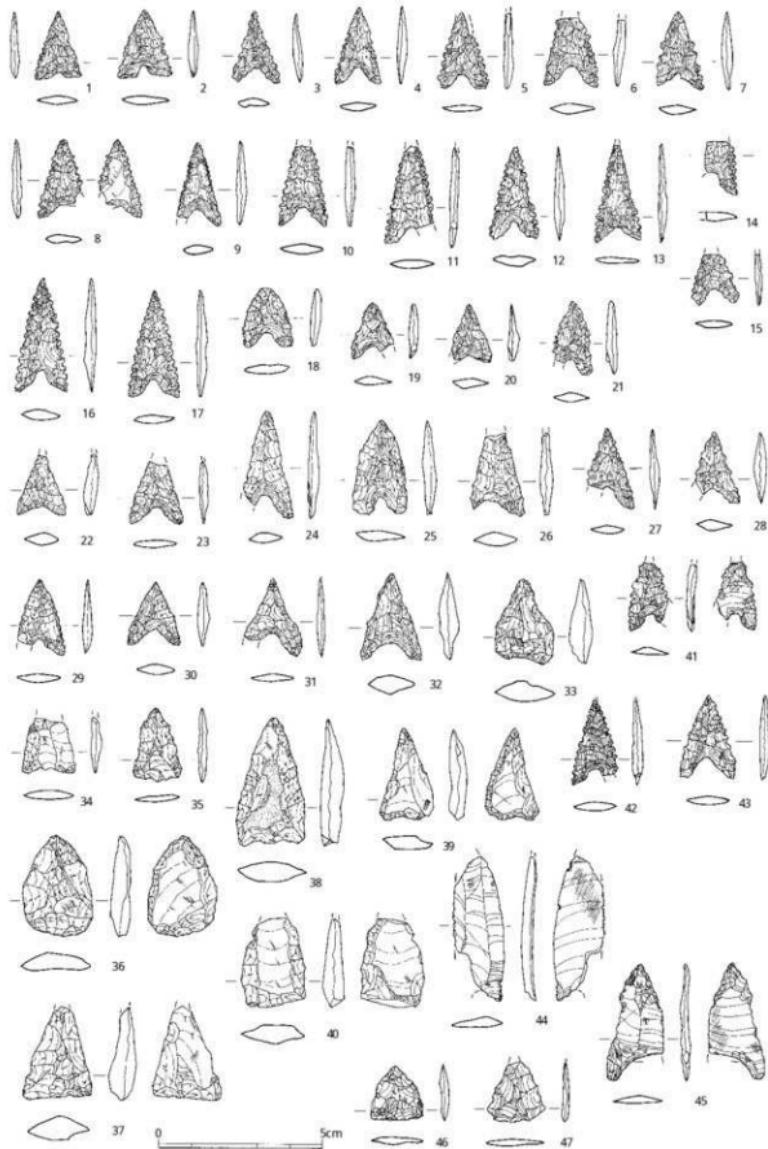
本吉遺跡I区第2次調査において、包含層から数多くの打製石器・磨製石器が出土した。打製石器は安山岩もしく黒曜石で、大半は安山岩のものが占める。これらについて、以下に整理するが、個別の出土地点・法量については第4・5表を参照していただきたい。

1~47は打製石鎌およびその未完成品と判断したものである。1~17は安山岩製石鎌で刃部を鋸歯状に作り出したものである。これらは鉢と捉えられることも多い。いずれも凹基式である。8には片面に主要剥離面が残る。18~38は、通常の刃部の安山岩製の打製石鎌である。18~34は凹基式で、33・34の基部の凹みはわずかである。35~38は平基式である。34~36・37は主要剥離面が見られ、38は原礫面が残存する。32・33・36~38は厚みがあるため重量も大きく、36~38は特に大型である。39~40は主要剥離面が大きく残存するが、縁辺に連続して調整剥離が認められ、石鎌の



第53図 包含層出土土器実測図⑧ (1/3)

未完成品と判断した。特に39は先端部が概ね形成されている。ともに安山岩製である。41~47は黒曜石製の打製石鏟である。41~45は凹基式である。41~43は刃部が鋸歯状に作り出され、銛とされることもあり、そのうち41の片面には主要剥離面が見られる。44・45は剥片鏟で、ともに大きく主要剥離面が認められ、44は微細剥離が認められるが調整剥離は少なく、45は先端および基部に密に調整剥離が施される。46・47は小型の平基式で、非常に扁平である。48は安山岩製の尖頭器である。基部は平基式で、下端部よりやや上方の両側縁に、着柄用と考えられる抉りを設けるための剥離を施す。49は細くなる部分が中途で欠損し、先端部の形状は不明であるが、その周辺は調整剥離が施され、石錐と考えられる。安山岩製で原礫面が残存する。



第54図 出土石器実測図① (2/3)

50～63は削器で、50～61は安山岩製、62・63は黒曜石製である。53には主要剥離面に打痕が見られる。刃部形成のための調整剥離がほとんど片側から施されるものが主体であるが、54は両面からの連続した剥離で刃部が形成されている。50・52・55～58・60・61には原礫面が残存し、特に57の片面は刃部形成の調整剥離面以外は原礫面が占めている。60の側縁の一部には刃潰し状の調整が見られる。黒曜石製の62・63は他に比べ小型である。62は形状から石鎚未成品とも考えられるが、刃部がやや大きな角度となる調整剥離が施されるため異なるものと判断した。63には調整剥離に加え、使用痕と思われる微細剥離も見られる。64～71は搔器で、64～69は安山岩製で70・71は黒曜石製である。64・66・67・69は原礫面が残り、特に69の片面に広く原礫面が見られる。65の刃部は、片面から反対側へ急に屈曲する片刃で角度のやや大きなものである。69は片面からの調整剥離が集中する部分があり、角度の大きな刃部が形成される。

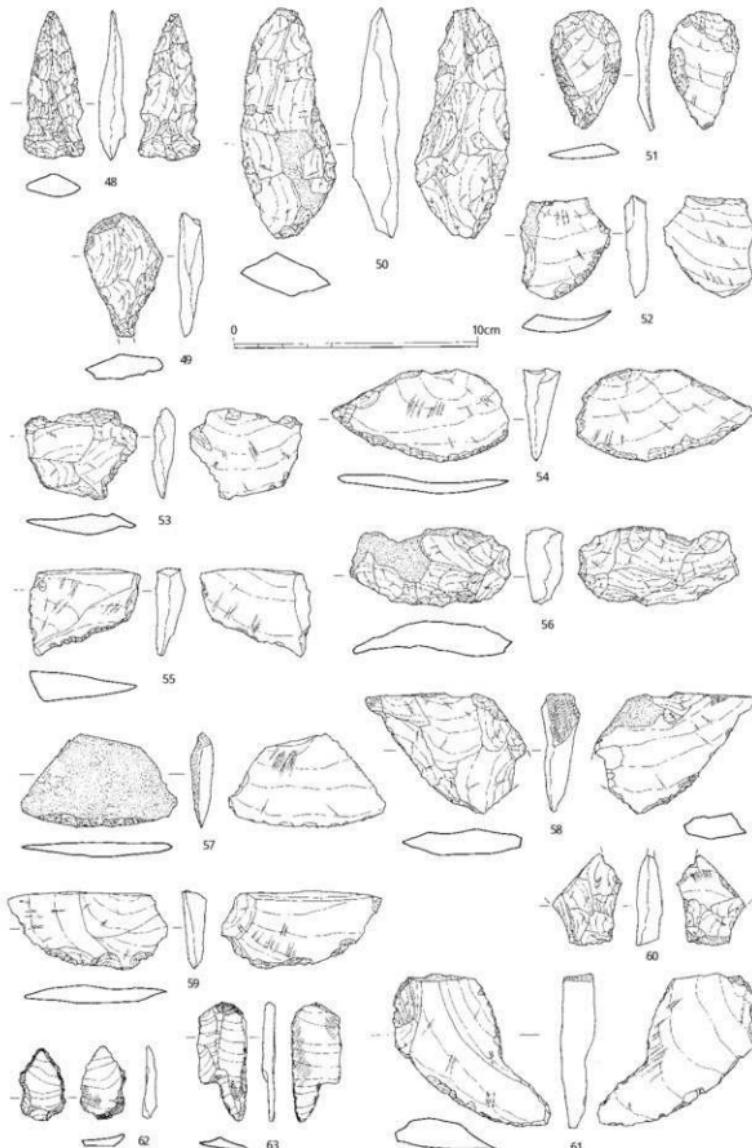
黒曜石製の70・71は他よりも非常に小型である。70は、下端の一部に両面からの剥離により刃部が作られる。71は両側縁が刃部と見られ、主要剥離面には打痕が残る。

72～78は使用痕剥片で、72～76は安山岩製で77・78は黒曜石製である。74～78は原礫面が残存する。また、72～74には整形のための調整剥離が認められる。79は両側縁に抉りを有しており、欠損しているが、鉢桶技法による剥片割り出しが行われていることを表すつまみ形石器である。80は黒曜石製の石核である。円錐状の形状をしており、下面が原礫面である。その原礫面を打面として、多数の剥片を剥離した痕跡が認められる。81は片岩製の小型の石錘である。対になる両端に抉りが施される。

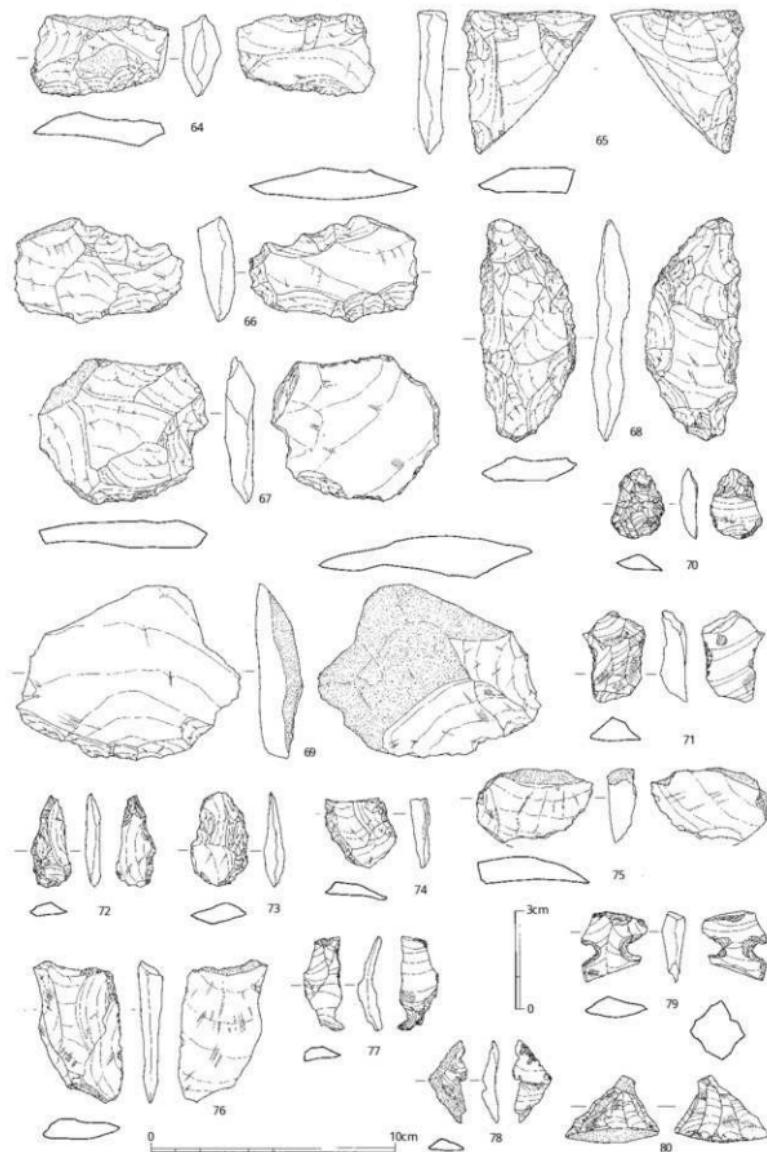
82は砂岩製の凹石である。あまり明瞭ではないが、両面がわずかに使用され、表面はやや風化で脆くなっている。83は凝灰岩製の叩石で、側縁の一部を集中的に使用する。

84～92は磨石である。84は凝灰岩製で、両面が顕著に使用され、非常に平滑となる。85は砂岩製で、明瞭ではないが側縁が一部使用された可能性がある。86は玄武岩製で、あまり明瞭ではないが、一部が使用されたと考えられ、側縁で叩石として集中的に使用される部分がある。87は玄武岩製で、あまり明瞭ではないが、片面および側縁の一部が使用された可能性がある。88は玄武岩製で、明瞭ではないが側縁の一部が使用された可能性がある。89は砂岩製で、あまり明瞭ではないが、一部の面が使用された可能性がある。90は玄武岩製で、両面が著しく使用され非常に平滑である。91は片面と側縁の一部が使用され、また側縁は広い範囲で叩石として用いられる。92は凝灰岩製で、片面の使用が顕著で非常に平滑で、逆の面もやや使用された可能性がある。また、側縁の一部が叩石として使用された可能性がある。

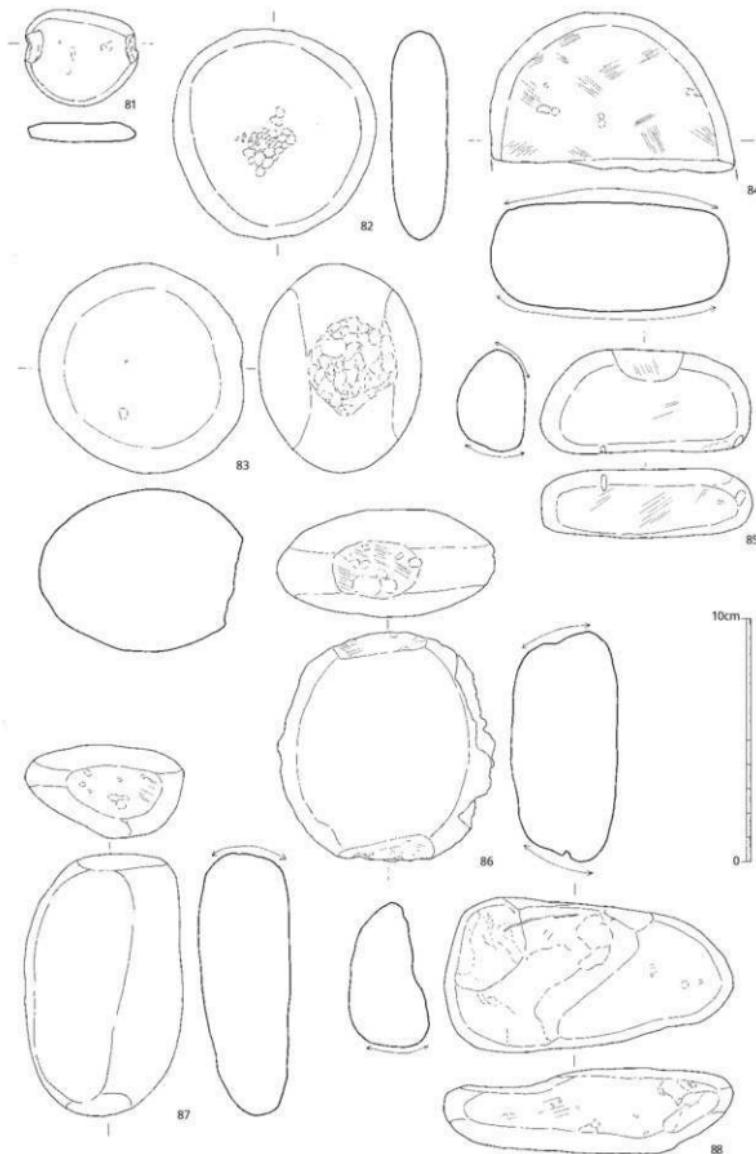
93～100は磨製石斧である。93は片岩製で、大きく欠損して刃部付近の一部が残るのみで、表面は非常に研磨され平滑で、刃部は鋭い。94は玄武岩製で、大きく欠損して、刃部は残存していない。また、表面の風化が著しい。95は細粒砂岩製で、大きく欠損するが刃部が残存する。研磨部分は平滑であるが、敲打痕が集中して残存する部分が認められる。96は砂岩製で、欠損して刃部が失われる。残存する研磨面は平滑であるが、表面は風化が著しい。97は砂岩製で、欠損して刃部が失われる。残存する研磨面は平滑であるが、敲打痕も多数認められる。98は砂岩製で、表面の風化が著しい。また、完形であるが刃部がやや歪な形状でもあるため、欠損後に再研磨して整形した可能性がある。99は砂岩製で、完形でやや弧状に反った形状である。刃部付近は非常に丁寧に研磨され平滑であるが、全体的には多数の敲打痕が認められる。100は玄武岩製で、完形



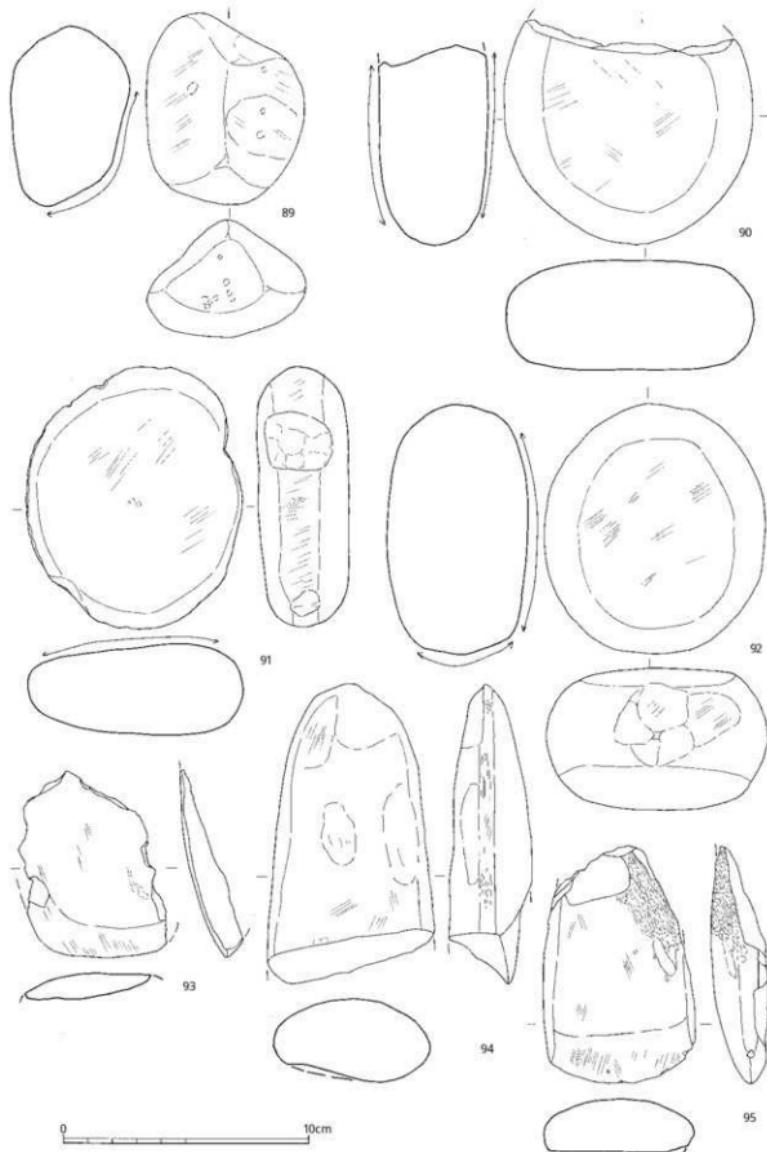
第55図 出土石器実測図② (1/2)



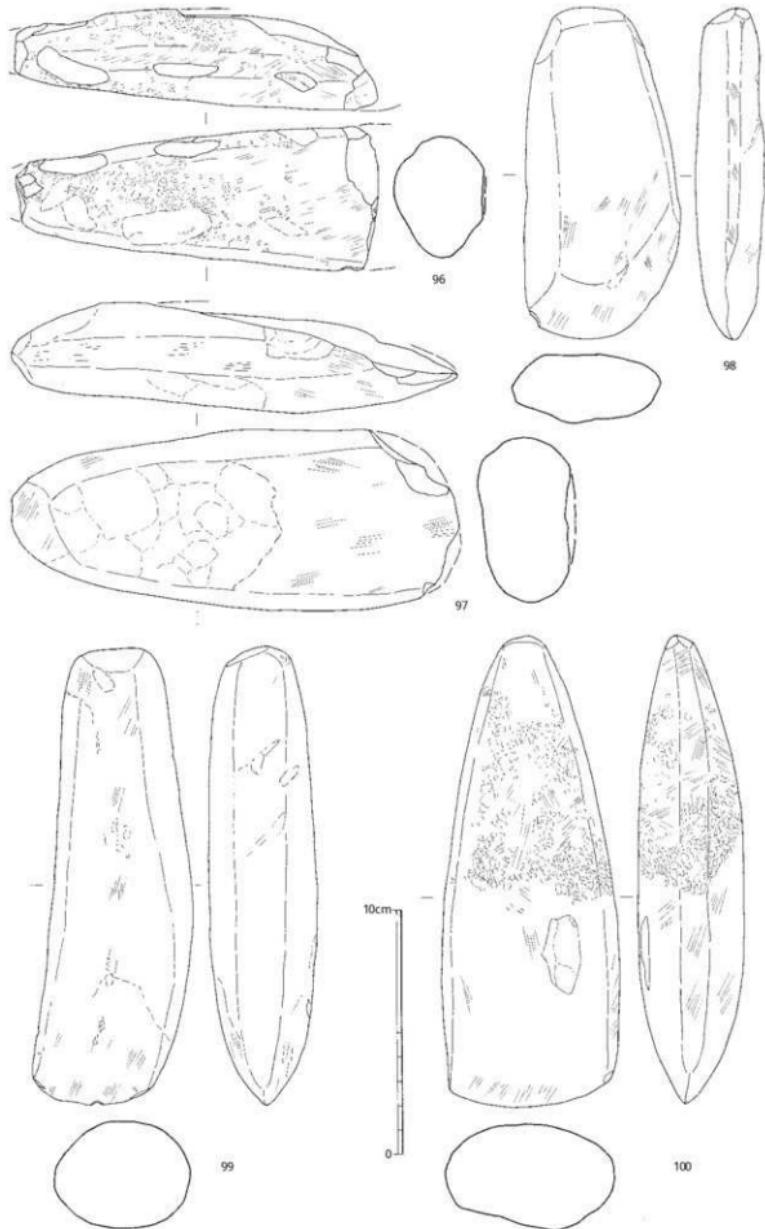
第56図 出土石器実測図③ (79・80は2/3、他は1/2)



第57図 出土石器実測図④ (1/2)



第58図 出土石器実測図⑤ (1/2)



第59図 出土石器実測図⑥ (1/2)

第4表 I区第2次調査出土土器観察表(①)

掲図番号	番号	図版	種類	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	遺物番号
54	1	32	打製石器	I2次	クリトK	2.1	1.45	0.25	0.57	安山岩	凹基式刃部縫隙状	63
54	2	32	打製石器	I2次	クリトK	2.1	1.65	0.3	0.88	安山岩	凹基式刃部縫隙状	5
54	3	32	打製石器	I2次	クリトK	2.2	1.45	0.3	0.59	安山岩	凹基式刃部縫隙状	41
54	4	32	打製石器	I2次	クリトK	2.35	1.4	0.3	0.69	安山岩	凹基式刃部縫隙状	19
54	5	32	打製石器	I2次	クリトH-L型ベルト	2.4	1.6	0.3	0.79	安山岩	凹基式刃部縫隙状	59
54	6	32	打製石器	I2次	クリトL・M型ベルト	2.1	1.65	0.35	1.00	安山岩	凹基式刃部縫隙状	57
54	7	32	打製石器	I2次	表鉢	2.4	1.45	0.3	0.88	安山岩	凹基式刃部縫隙状	56
54	8	32	打製石器	I2次	クリトK-L型ベルト	2.4	1.35	0.3	0.69	安山岩	凹基式刃部縫隙状	64
54	9	32	打製石器	I2次	クリトK	2.6	1.35	0.3	0.72	安山岩	凹基式刃部縫隙状	52
54	10	32	打製石器	I2次	クリトK	2.45	1.5	0.35	1.08	安山岩	凹基式刃部縫隙状	6
54	11	32	打製石器	I2次	クリトL	3.0	1.5	0.3	1.09	安山岩	凹基式刃部縫隙状	24
54	12	32	打製石器	I2次	クリトE-R51	2.85	1.5	0.3	0.94	安山岩	凹基式刃部縫隙状	27
54	13	32	打製石器	I2次	クリトK	3.05	1.45	0.3	0.95	安山岩	凹基式刃部縫隙状	53
54	14	32	打製石器	I2次	クリトL	1.65	1.0	0.3	0.43	安山岩	凹基式刃部縫隙状	49
54	15	32	打製石器	I2次	クリトH-G型ベルト	1.6	1.45	0.2	0.47	安山岩	凹基式刃部縫隙状	65
54	16	32	打製石器	I2次	クリトK	3.5	1.6	0.4	1.33	安山岩	凹基式刃部縫隙状	40
54	17	32	打製石器	I2次	クリトH-G型ベルト	3.3	1.6	0.35	1.27	安山岩	凹基式刃部縫隙状	61
54	18	32	打製石器	I2次	クリトF	1.8	1.55	0.35	0.94	安山岩	凹基式	8
54	19	32	打製石器	I2次	クリトD-拡張部	1.7	1.3	0.3	0.49	安山岩	凹基式	33
54	20	32	打製石器	I2次	クリトG-西脇張部	1.75	1.25	0.35	0.50	安山岩	凹基式	58
54	21	32	打製石器	I2次	クリトG-西脇張部	2.25	1.2	0.3	0.78	安山岩	凹基式	55
54	22	32	打製石器	I2次	クリトG	1.9	1.5	0.45	0.77	安山岩	凹基式	21
54	23	32	打製石器	I2次	クリトK-L型ベルト	1.85	1.65	0.3	0.75	安山岩	凹基式	39
54	24	32	打製石器	I2次	クリトA-B開口部	3.3	1.55	0.35	1.17	安山岩	凹基式	45
54	25	32	打製石器	I2次	南東面蓮輪	2.9	1.65	0.4	1.59	安山岩	凹基式	17
54	26	32	打製石器	I2次	クリトG-西脇張部	2.55	1.7	0.4	1.47	安山岩	凹基式	43
54	27	32	打製石器	I2次	クリトK	2.5	1.45	0.3	0.63	安山岩	凹基式	38
54	28	32	打製石器	I2次	クリトL-M型ベルト	2.2	1.35	0.4	0.71	安山岩	凹基式	31
54	29	32	打製石器	I2次	クリトE	2.3	1.5	0.3	0.82	安山岩	凹基式	15
54	30	32	打製石器	I2次	クリトL	1.9	1.6	0.35	0.77	安山岩	凹基式	34
54	31	32	打製石器	I2次	表鉢	2.4	1.75	0.3	0.65	安山岩	凹基式	50
54	32	32	打製石器	I2次	クリトF	2.65	1.85	0.65	1.93	安山岩	凹基式	33
54	33	32	打製石器	I2次	クリトI-M型ベルト	2.6	1.8	0.7	2.57	安山岩	凹基式	14
54	34	32	打製石器	I2次	クリトK	1.7	1.6	0.35	0.99	安山岩	凹基式	13
54	35	32	打製石器	I2次	クリトL	2.35	1.5	0.25	0.85	安山岩	平基式	62
54	36	32	打製石器	I2次	クリトK	3.1	2.15	0.6	4.50	安山岩	平基式	16
54	37	32	打製石器	I2次	クリトD	2.9	2.1	0.8	3.47	安山岩	平基式	44
54	38	32	打製石器	I2次	クリトG-K型ベルト	3.95	2.1	0.7	5.73	安山岩	平基式	54
54	39	32	石器未成品	I2次	クリトH-東面下層	2.85	1.65	0.55	2.12	安山岩	平基式	12
54	40	32	石器未成品	I2次	クリトD	2.75	2.0	0.7	4.07	安山岩	平基式	26
54	41	32	打製石器	I2次	クリトH-G型ベルト	2.15	1.2	0.3	0.63	黒曜石	凹基式	37
54	42	32	打製石器	I2次	クリトK-N型ベルト	2.6	1.4	0.3	0.86	黒曜石	凹基式刃部縫隙状	9
54	43	32	打製石器	I2次	クリトI	2.55	1.7	0.3	0.98	黒曜石	凹基式刃部縫隙状	30
54	44	32	打製石器	I2次	クリトG-F型ベルト	4.5	1.55	0.45	2.22	黒曜石	剝片跡 凹基式	2
54	45	32	打製石器	I2次	クリトD-G型ベルト	3.6	1.75	0.3	1.41	黒曜石	剝片跡 凹基式	47
54	46	32	打製石器	I2次	クリトN	1.7	1.6	0.3	0.66	黒曜石	平基式	3
54	47	32	打製石器	I2次	クリトN	1.85	1.8	0.25	0.77	黒曜石	円基式	25
55	48	32	尖頭器	I2次	クリトK	6.05	2.5	1.1	12.60	安山岩	基部に抉りあり	46
55	49	32	石錐	I2次	クリトF	5.05	3.25	1.0	15.77	安山岩	28	
55	50	32	削器	I2次	クリトN	9.4	3.8	19	55.07	安山岩	81	
55	51	32	削器	I2次	クリトM東面下層	4.8	2.85	0.75	7.77	安山岩	凹基式刃部縫隙状	36
55	52	32	削器	I2次	クリトA下層	4.2	3.65	0.85	11.99	安山岩	29	
55	53	32	削器	I2次	クリトA	3.7	4.6	0.9	12.87	安山岩	70	
55	54	32	削器	I2次	クリトG	3.85	7.2	1.0	22.02	安山岩	10	
55	55	32	削器	I2次	クリトF	3.55	4.5	5.12	18.63	安山岩	68	
55	56	32	削器	I2次	クリトF-I型ベルト	3.2	6.55	1.55	31.78	安山岩	68	
55	57	32	削器	I2次	クリトL	3.85	6.35	0.9	18.57	安山岩	73	
55	58	32	削器	I2次	クリトF	5.0	6.6	1.5	33.44	安山岩	75	
55	59	32	削器	I2次	クリトM	3.2	6.5	0.95	20.52	安山岩	67	
55	60	32	削器	I2次	クリトD	3.75	2.8	1.05	10.48	安山岩	24	
55	61	32	削器	I2次	クリトI	6.5	5.5	1.4	33.08	安山岩	76	
55	62	32	削器	I2次	クリトL	3.0	1.85	0.6	2.52	黒曜石	51	
55	63	32	削器	I2次	クリトG	4.9	2.05	0.55	4.11	黒曜石	35	
56	64	33	擦器	I2次	クリトA	3.35	5.6	1.6	27.76	安山岩	74	
56	65	33	擦器	I2次	クリトD南	5.85	5.4	1.25	36.12	安山岩	69	
56	66	33	擦器	I2次	クリトK	4.35	6.85	1.5	39.20	安山岩	71	
56	67	33	擦器	I2次	クリトN下層谷粘質土	5.95	6.9	1.2	53.72	安山岩	80	
56	68	33	擦器	I2次	クリトL-I型ベルト	9.15	3.9	1.55	47.05	安山岩	77	
56	69	33	擦器	I2次	クリトM	7.15	9.15	1.9	108.11	安山岩	79	
56	70	33	擦器	I2次	クリトN下層谷粘質土	2.85	2.15	0.7	3.46	黒曜石	4	
56	71	33	擦器	I2次	クリトL	3.75	2.6	1.1	1.83	黒曜石	11	
56	72	33	使用痕削片	I2次	クリトC	3.8	1.65	0.6	3.22	安山岩	60	
56	73	33	使用痕削片	I2次	クリトN	3.9	2.35	0.85	6.85	安山岩	1	
56	74	33	使用痕削片	I2次	クリトL	2.85	2.9	0.8	5.71	安山岩	20	
56	75	33	使用痕削片	I2次	クリトD	3.05	4.75	1.15	16.23	安山岩	42	
56	76	33	使用痕削片	I2次	クリトM	5.8	3.65	1.05	17.51	安山岩	72	
56	77	33	使用痕削片	I2次	クリトL	3.8	1.7	1.0	2.88	黒曜石	66	

第5表 I区第2次調査出土石器観察表②

拂図番号	番号	図版	種類	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	遺物番号
56	78	33	使用痕剥片	I2次	渕1南	3.4	1.6	0.65	1.88	黒曜石		23
56	79	33	つまみ形石器	I2次	グリッドH	2.15	2.05	0.7	1.92	黒曜石	鉛錠技法による剥片形成	48
56	80	33	石核	I2次	グリッドN	2.05	2.9	2.2	8.32	黒曜石		16
57	81	33	石錐	I2次	グリッドH	3.95	4.65	0.8	23.12	片岩		94
57	82	33	凹石	I2次	グリッドN R-155	8.25	8.6	2.3	215.2	砂岩		83
57	83	33	叩石	I2次	グリッドE 6.6	8.6	8.35	6.65	623.3	凝灰岩		88
57	84	33	磨石	I2次	グリッドE B	10.0	6.5	4.45	469.4	凝灰岩		95
57	85	33	磨石	I2次	グリッドE R-30	8.6	4.35	2.8	160.1	砂岩		96
57	86	33	磨石	I2次	グリッドH	8.9	9.45	4.4	519.5	玄武岩		87
57	87	34	磨石	I2次	グリッドH R-36	6.5	10.75	3.8	409.8	玄武岩		91
57	88	34	磨石	I2次	グリッドE R-30	11.85	6.4	3.5	344.7	玄武岩		96
58	89	34	磨石	I2次	グリッド E R-30	6.5	7.85	4.85	293.2	砂岩		92
58	90	34	磨石	I2次	グリッドG+墨ベット R-213	10.15	9.25	4.5	662.3	玄武岩		93
58	91	34	磨石	I2次	グリッドN	10.7	8.8	3.75	539.3	玄武岩		86
58	92	34	磨石	I2次	グリッドG+墨ベット H-9	9.1	10.2	5.8	855.2	凝灰岩		90
58	93	34	磨製石斧	I2次	グリッドC	7.7	6.0	2.55	69.5	片岩		78
58	94	34	磨製石斧	I2次	グリッドC・開ベルト	12.2	6.85	3.4	381.7	玄武岩		85
58	95	34	磨製石斧	I2次	グリッドM東側下層	9.65	6.2	2.3	187.5	細粒砂岩		84
59	96	34	磨製石斧	I2次	グリッドK	14.85	5.95	4.15	451.3	砂岩		97
59	97	34	磨製石斧	I2次	グリッドH R-36	18.4	7.45	4.5	721.6	砂岩		99
59	98	34	磨製石斧	I2次	グリッドD墨ベット R-119	13.6	6.4	2.85	340.7	砂岩	完形再加工か	89
59	99	34	磨製石斧	I2次	グリッド E R-30	18.8	6.6	4.4	738.7	砂岩	完形	100
59	100	34	磨製石斧	I2次	グリッドH R-137	19.3	7.4	4.4	926.1	玄武岩	完形	82
101	34		削器	I2次	グリッドD	5.3	4.5	0.7	23.4	安山岩	2側縁に刃部あり	
102	34		削器	I2次	グリッドE東側落ち込み内	3.7	5.6	0.8	12.3	安山岩		
103	34		石錐	I2次	グリッドE・1層ベルト	5.6	4.0	2.4	26.8	片岩		
104	34		凹石	I2次	グリッドN R-154	9.0	8.6	4.4	460.3	凝灰岩		
105	34		叩石	I2次	グリッドH R-52	14.1	13.6	3.5	960.8	玄武岩	側縁を叩石として使用	
106	34		磨製石斧	I2次	グリッドH R-35	11.2	4.0	2.4	173.9	蛇紋岩		

で非常に整った形状である。刃部側の半分は非常に丁寧に研磨され著しく平滑であるが、反対側の半分には敲打痕が多数残存する。

図示していない石器(図版34右下)について以下にまとめる。101・102は安山岩製の削器である。101では、側縁のうち二辺で刃部を形成する剥離が見られる。内一辺の剥離は、片面からの細かいもので、もう一辺の剥離はやや大きく、両面から施される。また、刃潰し状の調整剥離の認められる部位もある。102は主要剥離面に打瘤が認められ、一部に両面から細かい剥離を施した刃部が認められる。103は片岩製の扁平な石錐で、長軸上の片側端部に小さな抉りが施されており、逆の端部も抉りが施されたと考えられるが、欠損している。104はやや扁平な形状の叩石で、側縁の一部が集中的に使用される。105は凹石で両面のほぼ中央部に使用痕が見られる。また、側縁がほぼ全周的に叩石としても使用される。106は幅の狭い磨製石斧で、刃部側が大きく欠失し、更に残存部の片側の表面は大きく剥離している。また、全面的に風化が著しく、白色化している。

3 II・III区の調査

1) 調査の経過

本吉遺跡II・III区は、I区とは九州縦貫自動車道をはさんだ東側に位置する。九州縦貫自動車道路の測道東側にトレーンチを設定し、南側から順次試掘を行なながら遺構が確認できた箇所について調査区を広げて発掘を行った。南側のII区の調査は平成18(2006)年2月26日から重機による表土剥ぎを始め、3月6日まで実施した。その後、引き続いて北側のIII区の調査に着手し、3月16日までには全体写真撮影と実測を完了し埋め戻しを行った。調査面積はII区が150m²、III区が215m²。

2) 遺跡の概要

II区では東西方向の細い溝状遺構を検出したのみであり(図版35-1)、また、その北側に位置するIII区においても東西方向の溝状遺構2条と落ち込み状遺構を確認したにとどまり(図版35-2)、顕著な遺構の展開は見られなかった(第60図)。基本層序は灰色土・バラス(表土)→灰色土(旧表土)→茶褐色粘土層・暗褐色粘質土(埋め土)→黄褐色粘質土層(床土)→黒茶色粘質土層(遺物包含層)→淡黄褐色シルト層で、その下部の黄褐色粘土層(地山)面が遺構面となる(第61図)。出土遺物には弥生土器・土師器・青磁・石鎧などの石器類がある。

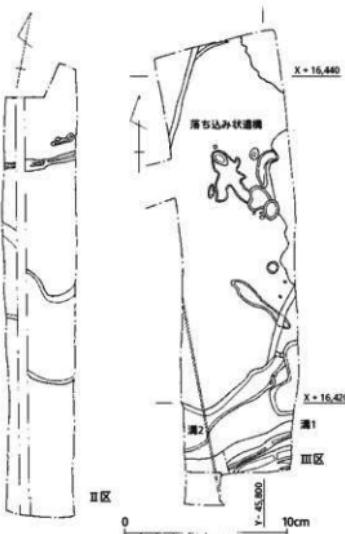
3) 検出された遺構

1号溝状遺構(図版35-3、第60図)

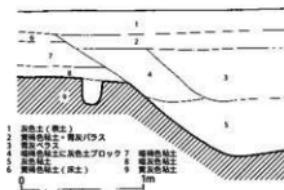
III区の南端部で北側の肩を検出した。南側については発掘区外となる。溝幅は6m以上、深さは0.5mを測る。溝は表土下の床土面から切り込んでいる。埋土は下層が灰色粘質土、上層は灰色粘土ブロックが混じった暗褐色粘質土と青灰色バラスで人為的に埋められている。

2号溝状遺構(図版35-3、第60図)

III区の南半部、1号溝状遺構の北でこれと平行して検出した。上端幅0.85m~3.10m、下端幅0.30m~2.55m、深さ0.10mを測る。



第60図 II区・III区遺構配置図(1/300)



第61図 III区土層模式図

出土遺物（第62図）

1は亀の甲タイプの甕の口縁部破片。

落ち込み状遺構（第60図）

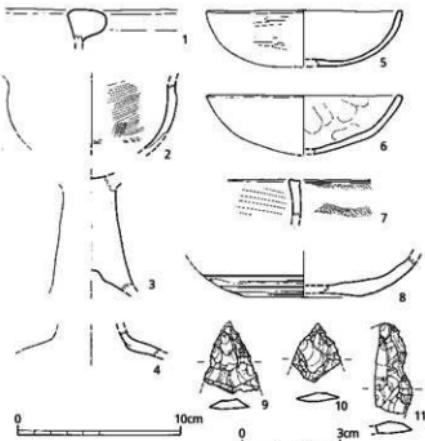
III区の北東部で北東部に向かって落ち込んだ遺構の肩の一部を確認したのみで、全容は知れない。

出土遺物（第62図）

6は土器器の椀。内面に成形時の指頭圧痕が残る。小片のため傾きや径にやや不安が残る。7は弥生土器鉢。端部に面をなす。調整は内外面ともハケ。

その他の出土遺物（図版35-4、第62図）

2は土器器の小形丸底壺。摩滅が著しいが内面にはハケメが残る。3は高環の脚柱部。5は土器器椀。調整は内面が横方向のミガキ。復元口径12.1cm、器高3.5cmを測る。8は青磁皿。胎は灰色で緑灰色の釉を施す。底部から体部下半にかけては露胎となる。9・10は黒曜石製の石鏃。9は基部を欠失する。裏面は先端部のみに二次加工を施すが、主要剥片の面をそのまま残す。10は先端部のみを残す。11は黒曜石製スクレイバー。打点（上部）寄りは厚みを持ち刃溝し様の加工を施し、下方に刃部を作り出す。裏面には主要剥離面を残す。1~7・9・10はIII区、8・11はII区から出土した。



第62図 II区・III区出土土器・石器実測図 (1/3・2/3)



写真2 造成の進むみやま柳川インターチェンジ

4 IV区（本吉条里跡）の調査

1) 調査の経過

本吉遺跡IV区（本吉条里跡）は、みやま市瀬高町本吉2070-1・2番地に所在し、地目は畠・水田である。調査箇所は、九州縦貫自動車道「みやま柳川」インターチェンジの進入路部分で、料金徴収所周辺に該当する。建設工事を担当していた福岡県土木部柳川土木事務所道路建設課より、当該地における文化財の有無の問い合わせがあった。進入路部分が周知の埋蔵文化財「本吉条里」に含まれているため確認調査の必要性を説明し、平成19年12月21日に調査を実施した。確認調査段階では用地買収が完了しておらず、買収が終了した部分のみにトレンチを6本設定し、重機により掘削を行った。調査の結果、AトレンチとCトレンチにおいて上面幅1.6~1.8mの溝を検出した。両トレンチは14m程の間隔を有するが、両トレンチで検出した溝は埋土・形状から一連のものと判断された。また、確認調査においては、溝1条とピット数個を検出したのみであったが、遺構が存在するので事前に発掘調査を行う必要がある旨を文書により回答した。

年末に土木事務所から地権者の承諾が得られたので発掘調査を実施して欲しいとの連絡が入った。調査第1係としては人員を割けない状況下にあり、検出した遺構も溝1条とピット数個であったので本格的な発掘調査ではなく、溝の延長をつかむ確認調査と言うことで小田が担当することとした。本調査は新年早々の平成20年1月8日に重機を投入し、溝の延長をつかむことから始めた。予測どおり確認調査のA・Cトレンチで検出した溝は繋がり、北西-南東方向に走る一連の溝であることが判明し、溝の延長を追いかけていくと約45mまで確認できた（1・2区）。また、溝には排水口を伴っていることが判り、条里の坪境の溝になる可能性が出てきた。

しかし、それ以上は進入路外であり、緑地帯として保全されるということであった。ただ、将来、関連施設が建設される可能性があったので、溝の延長と坪の単位を把握する目的で調査区（3区）を拡張した。また、東隣の畠（4区）にもトレンチを入れて溝の延長を確認することとした。その結果、溝は延長約117mで、7.2m間隔で排水口を設けていることが判り、それから復原すると一辺108mの区画が復原される。3・4区については上面検出に留めたものの、大きな成果を得ることができた。調査は写真・実測作業を含め1月18日で終了した。調査面積は約570m²である。

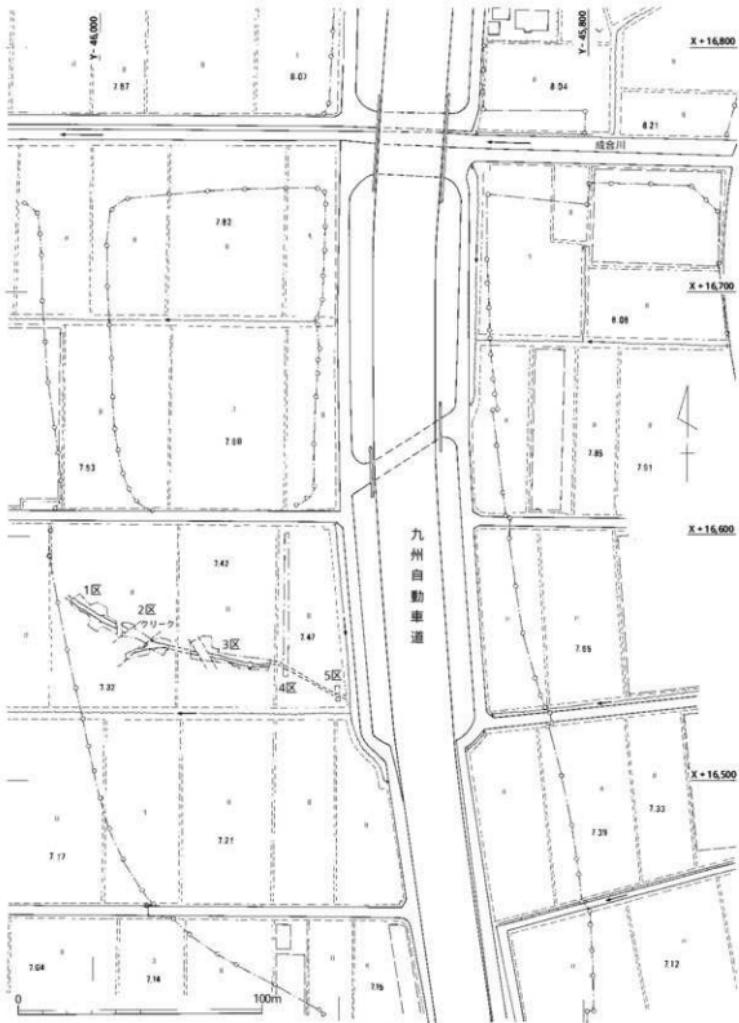
2) 検出された遺構

今回の調査で検出した遺構は、大小の溝2条であった。条里坪境の溝と考えられる大溝をSD01とし、2区においてSD01と重複する小溝をSD02とした。また、排水口をSX01~05として番号を付した。

大溝

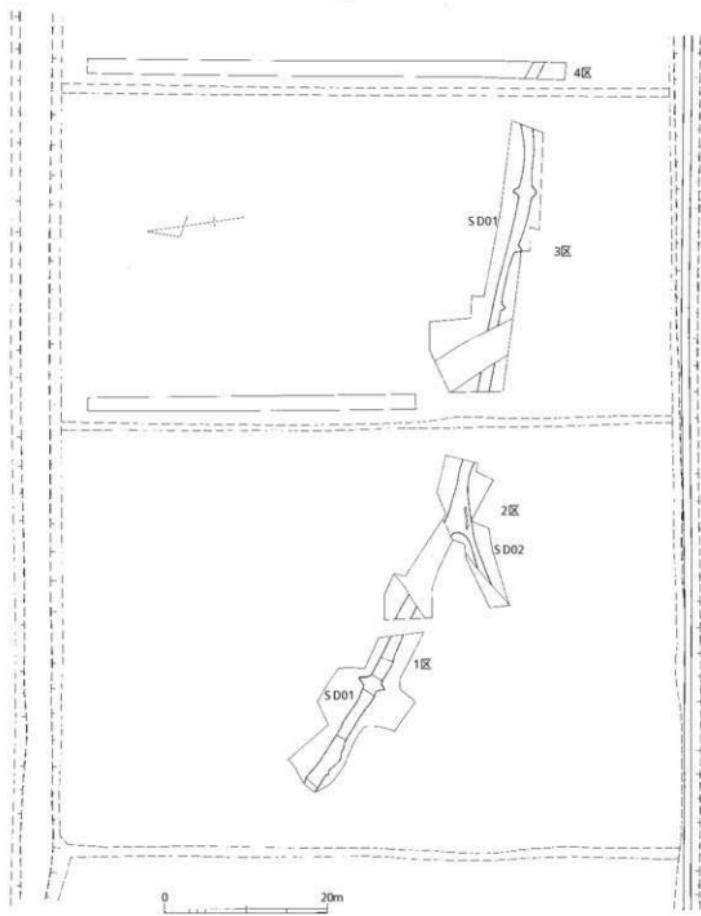
SD01（図版36、第65~67図）

表土から45~65cm掘り下げて上面を検出した。2区中央と3区西端は現代のクリークによって切られている。調査区を北西-南東方向に走る溝で、1区で長さ22.0m、2区で長さ21.5m、3区で長さ33.2m、4区トレンチ間で26.0mを確認し、総延長は117mにも及ぶ。溝の規模は1区東端の土層実測箇所で上面幅1.86m、底面幅0.88m、深さ0.76mで、2区東端の土層実測箇所では上面幅1.61m、底



第63図 IV区周辺地形図 (1/2,000)

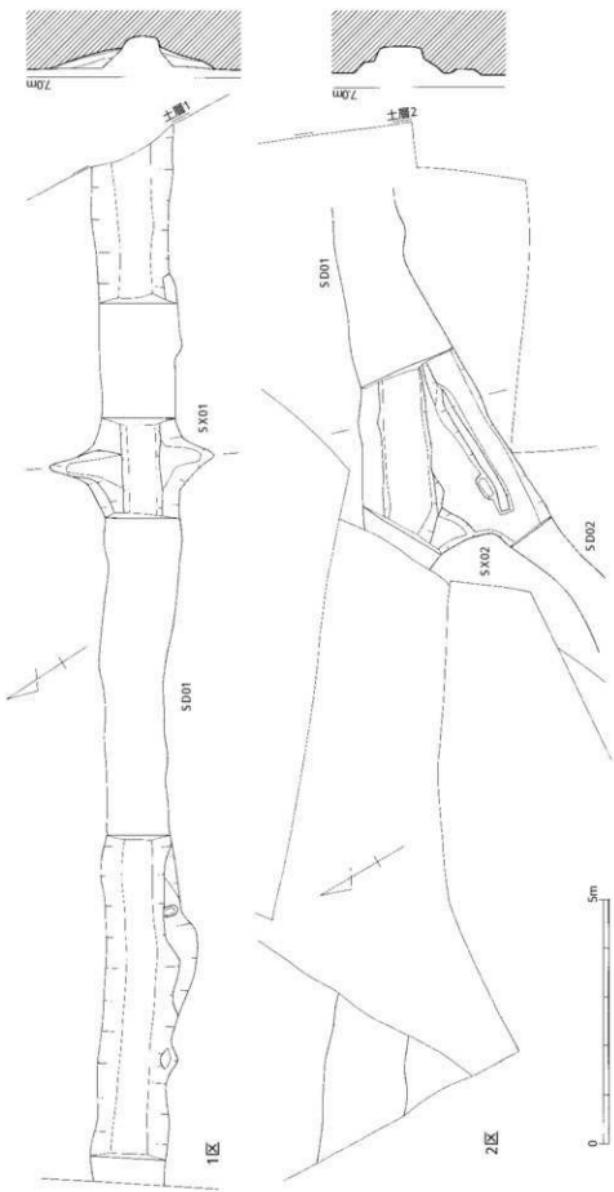
面幅0.68m、深さ0.86mを測り、断面逆台形を呈する。底面のレベルは2区東端側で標高6.18m、1区西端側で6.17mであり、比高差はほとんどない。なお、3区での上面幅は1m余りであるが、これは地山と堆積土との判別が付け難く、重機で下げ過ぎたためによる。

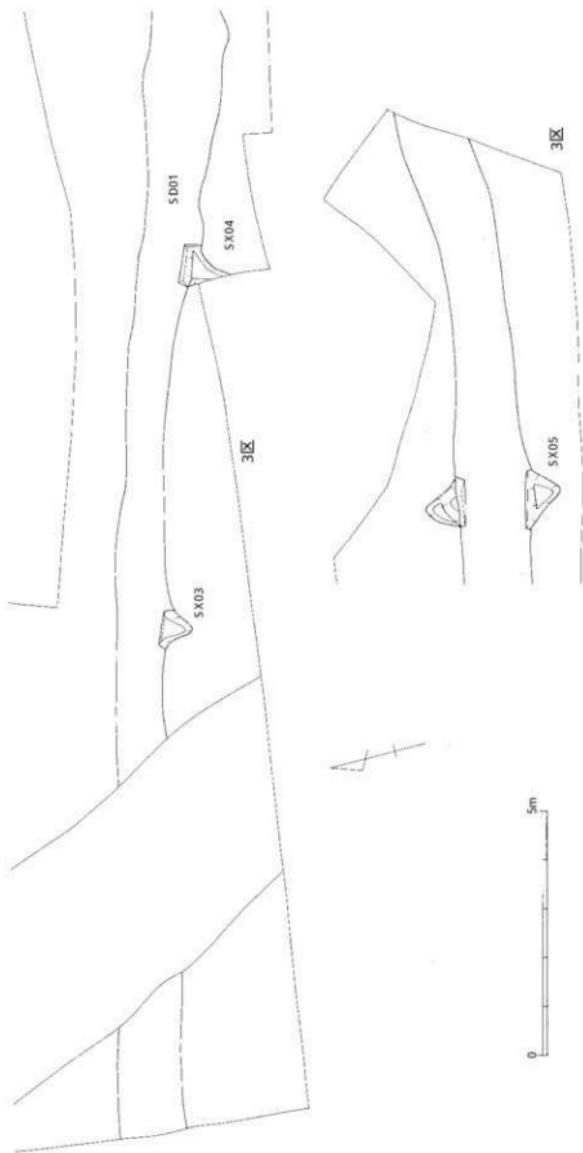


第64図 IV区遺構配置図(1/600)

また、2区の中程で小溝SD02と重複するが、土層を観察すると小溝SD02が大溝SD01を切っている。溝の方位は1-2区間は磁北から西に $53^{\circ} 30'$ 振っているが、3区においてはなだらかとなり、磁北から西に $70^{\circ} 30'$ と方位を変える。4区においては再度磁北から西に $53^{\circ} 30'$ の方位を示すが、3区と4区間に屈曲するようである。西端部での溝の堆積土は、上層が灰褐色粘土、中層が灰色粘土、下層が地山(褐色土)の崩落土を含む暗灰色粘土で、最下層が暗灰色粘土であった。2区SD02との重複箇所から外面ハケ目、内面ヘラケズリによる土師器甕の胴部小片が出土したが、図示に耐えないため割愛した。手法・胎土からして古代の所産とみられる。

第65図 溝SD01・02実測図① (1/100)





第66図 溝S0D01実測図① (1/100)

小溝

SX02 (図版37-2、第65図)

2区の南半部で検出した小溝で、SD01と交差する。検出当初は前後関係がつかめなかつたが、調査区東端の断ち割り箇所において当溝がSD01を切っているのを確認した。上面幅1.12m、長さ15.6mまでは検出したが、西端部がクリークに切られるのと東端が調査区外であることから、さらに東西に延びるものと思われる。また、排水口SX02付近で分岐し、上面幅32cm、下面幅18cm、深さ16cmの細いものとなっている。溝の方位はMN84°Eを示す。

排水口

SD01に排水するためのもので、本来はSD01と直交する区画を兼ねた排水溝であったのが、上部の削平により基部を留める格好となっている。上下対になって存在する形態aと下方のみ存在する形態bがあり、7.2~7.4mの間隔で設けられている。

SX01 (図版36・37、第65図)

1区SD01の中程で検出した。溝の上面がかなり削平されているため、溝との接続部しか遺存していないが、上面形は三角形を呈する。形態aで、上方が基部幅2.04m、残長15mで、下方が基部幅1.48m、残長0.74mを測る。底面は上下方とも溝側に向かって傾斜している。

SX02 (図版37、第65図)

2区のSD01とSD02が交差する箇所で検出した。下方のみの形態bで、SX01同様、溝との接続部しか遺存していないが、基部幅1.3m、残長0.86mを測る。当排水口も溝側に向かって傾斜している。SX01-02間の距離は21.2mを測り、7.2mの約3倍である。

SX03 (図版37、第66図)

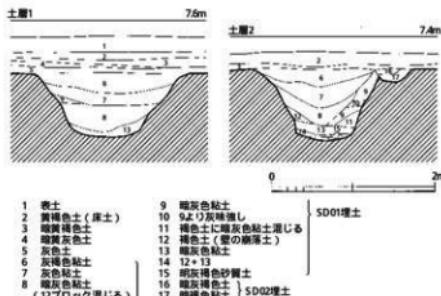
3区の西側で検出した。下方のみの形態bで、基部幅1.12m、残長0.6mの遺存状態である。底面は溝に向かって傾斜している。SX02-03間の距離は28.2mで、7.2mの約4倍である。

SX04 (図版37、第66図)

3区の中程で検出した。下方のみの形態bで、基部幅0.78m、残長0.8mの遺存状態である。他と同様、底面は溝に向かって傾斜している。SX04-03間の距離は7.2mで、同じくSX04-05間の距離は7.4mを測る。

SX05 (図版37、第66図)

3区の東側で検出した。上下対となる形態aで、上方が基部幅1.02m、残長0.66mで、下方が基部幅1.22m、残長0.54mを測る。上方にステップを有し、上下方ともに溝側に傾斜する。



第67図 溝SD01土層実測図 (1/60)

5まとめ

1) 縄文時代の遺構・遺物について

本吉遺跡Ⅰ区に関しては、縄文時代の包含層が大部分を占め、遺構は検出されたものの不定形のものが多く、いわゆる住居跡等の評価できるものはない。遺構からの検討は十分に行える成果は得られなかつたが、遺物は比較的まとまった量の出土があり検討の余地がある。石器については安山岩製を主体とする石鎌・スクレーバー類が多く出土し、石斧や石錘等当該時期の石器組成を検討する上で良好な資料が得られたといえよう。土器については若干の時期幅は想定され、また遺構の性格が不明な点からそこでの共伴関係を検討対象とはし難い状況にあるが、重要な資料も含まれると考えられるため、若干の方向性を述べてみたい。

今回の発掘調査で確認された縄文土器は、後期前葉の南福寺式・坂の下式・出水式・御手洗A式を中心とするものである。より古式なものとして、より具体的な文様を凹線文で描く資料がみられ、阿高式の範疇でとらえられるものもあるが、ごく少量に留まるが、第2次調査に多く含まれる印象を受ける。また胎土に滑石を多量に含む縄文時代中期的な要素を含む資料も比較的多く確認できるが、文様が簡素化したものも含まれており、その消長は明らかにできない。また、後期中葉の資料、すなわち鐘崎式・北久根山式・太郎迫式・三万田式等を含むが、断片的な資料をわずかに含む程度であり、第1次調査に限定できるようである。このように、周辺では縄文時代中期後半から後期全般にわたる遺跡が展開していることを窺い知る事ができ、今回断片的に知られる資料に関しては今後の調査成果に期待すべきといえよう。

今回の調査で特筆されるのが、縄文時代後期前葉の資料である。北部九州における既往の調査では、当該時期の資料は出土例が少なく、貴重な発見と評価できる。近隣においては北約1kmにある大道端遺跡で包含層からの出土ではあるが当該時期の資料が出土しており、また南では大牟田市荒田比貝塚やみやま市高田町下楠田貝塚からの出土が以前から知られている。また北に約15km離れた久留米市周辺でも調査事例があり、野口遺跡等が挙げられるが、近年調査された正福寺遺跡でも資料が増加しつつある。

後期前葉の様相は、その文様の多様性もあり、土器の型式設定も定まらない印象を受ける。特に列点文や凹線文を多用する南福寺式や坂の下式は文様の変遷等ある程度の方向性がみえていると思われるが、御手洗A・C式や出水式に関しては十分な共通認識を得られていないと思われる。それには資料の少なさが多分に影響していると思われ、今回の調査である程度まとまった資料が得られたことは研究の深化に貢献できるのではないかと思われる。例えば、御手洗A・C式や出水式を検討する中で、刻目・突帯文土器や刻目浮線等で表現される属性の位置付けについて度々話題となるが、今回の調査により良好な資料が加わったといえよう。すなわち、第24図1にみられる突帯の特徴が、器形・文様が簡素化する方向が認められるとすれば、刻目浮線の祖形と位置付けられるのではないかと考えられる。刻目の特徴以外においても、口縁部を強く屈曲させ壺形に近い口頭部の形態や、口縁部と突帯部との間に描かれる沈線文はどの型式に由来するものであるか、福田K II式等の東方からの影響を考慮しつつ検討すべきであろう。口縁部の断面形状や突帯の形状・突出度等から、第24・25図に挙げた資料や第6図4・第8図2・第10図11・第23図10・第53図1~6等は、同系譜として変遷するかとみられる。これらには沈線文を伴うものもあり、土器の文様の

特徴や口縁部形態等の属性の検討を通じて御手洗式や出水式の前後・平行関係を論じることが期待される。また、こうした資料に多数ではないものの中津式もしくは福田K II式に位置付けられる良好な資料も共存して出土した点も特筆される。

学史的にも荒田比貝塚や下楠田貝塚、大道端遺跡等、当該地域の資料の検討が発端となってきたといえるが、その地で議論を深める資料が加わったことは大きな成果といえ、再び上記遺跡の出土品を再検討することも有効かと考えられる。
(岸本)

2) 条里関連の遺構について

当該地点は「本吉条里」として条里制の遺構が水田の畦に顕著に表れる地域として良く知られていた。しかし、圃場整備事業により一変し、現在の状況から当時を窺い知ることは不可能に近い。今回の山門ガラン遺跡・山門牛島遺跡・本吉遺跡の発掘調査では、溝状遺構等が検出され、条里制の状況を復元する上で貴重な資料が得られた。

ところで、九州縦貫自動車建設の時点でもこの条里遺構について調査対象とされ、トレンチ調査ではあるが本発掘調査が実施されている。この報告に関しては、諸般の事情により概報のみの刊行であったが、今回の調査成果にも多分に関連するために、今回報告の機会を得ようとするものである。

1. 調査の経過

本吉条里遺跡はみやま市瀬高町大草・本吉・山川町河原内に所在する。本遺跡は、九州縦貫自動車道建設に係り1972年1月31日～3月20日まで、福岡県教育委員会が主体となり調査を行った。調査は文化課（現文化財保護課）技術主査の西谷正（現九州歴史資料館館長）・発掘調査補助員の高田一弘が行い、30ヶ所に計40トレンチ（総面積1798m²）を設定した。

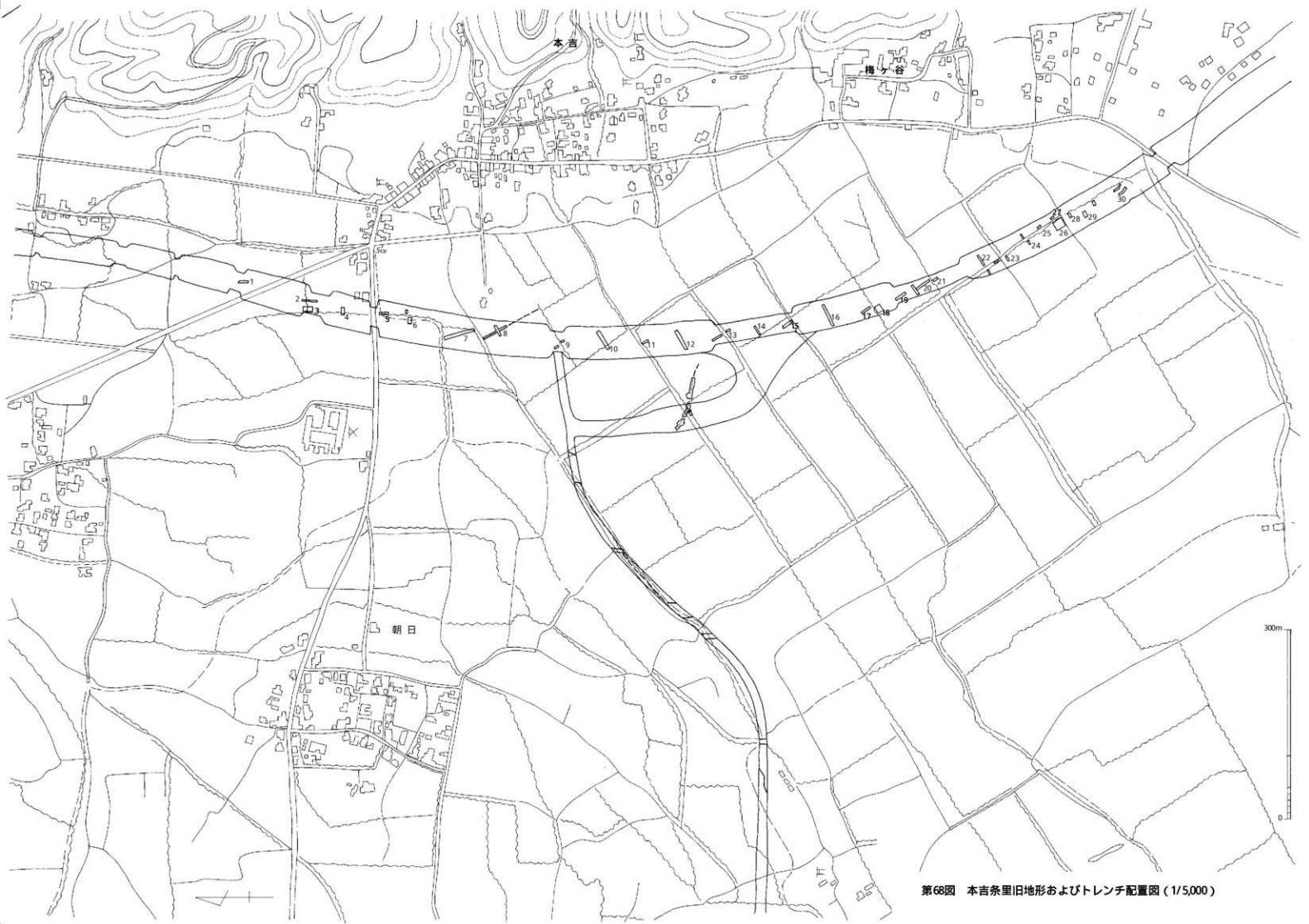
2. 調査の概要

概要報告は1972年の『昭和46年度九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』、1977年の『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報（総編）』（共に福岡県教育委員会編）で行われており、それを元に以下にまとめる。

本吉条里遺跡は現在では圃場整備がなされわからないが、第68図でわかるように、以前は条里の区画が良好に残存していた。本調査では、条里制遺構に関するものとして、圃場整備前の方格区画の畦畔から約1m下で、畦畔およびそれに接する溝が数ヶ所で検出された。また、圃場整備前に長方形をしていた田の範囲内で、条里の一辺に相当する旧畦畔と想定される溝を1ヶ所検出した。

条里制以前の遺構としては、弥生時代と推定される溝3条と、柱穴群を検出した。また、弥生時代遺物包含層の下位において、縄文時代後晩期の包含層が検出された。

先述の通り、条里制遺構の他に弥生時代の遺構が検出されているが、37年前の調査であり、不明な点も多いため、本報告書に關係する条里部分および遺物の報告のみ行う。



第68図 本吉条里旧地形およびトレーンチ配置図 (1/5,000)

3.トレンチ

トレンチは30ヶ所、40トレンチを設定しているが、土層図は条里が良好に残っていると考えられるトレンチを中心として掲載している。また、調査時点ではトレンチNoが調査順に振られているが、煩雑なので北から1・2・・・と振り直している。対照表（第6表）を参照されたい。

1トレンチは条里の最も北側で、当時残っていた区画の東西ラインの溝に直行する形で設定した。現存する区画溝の下部からも同じように溝の痕跡が確認された。10~12層が条里当時の地表面になると考えられる。下部の16層茶褐色粘土からは縄文土器が出土した。

2トレンチは区画の東西ラインに直行する形で設定した。ここも1トレンチと同様、現存する区画溝の下部から、溝の痕跡が確認された。

3トレンチは2トレンチの西側、東西ラインと南北ラインが交わるところに設定した。北壁では、現存する溝の影響で、溝があると推定される部分は大きく壊されているものの、その東西側の土層は溝に向かって傾斜しており、条里制当時も溝があったものと推測される。また、西壁では溝・畦畔の痕跡は確認できなかった。

4トレンチは条里の南北ラインに直行する形で設定した。溝より西側ではやや不明確であるが、東側では傾斜する土層が確認され、ここも当時から区画の一端であったことが窺える。

5トレンチは東西ラインに直行する形で設定した。図面が現存せず詳細は不明である。

6トレンチは同じく南北ラインに直行する形で設定した。現存する区画溝の下部からも同じように溝の痕跡が確認された。8・9層が条里当時の地表面になると考えられる。

7トレンチは方位に乗る区画とおよそ45°傾いた区画が接する部分に設定した。南側の西壁ではトレンチ端に向かって傾斜する土層が観察され、当時の区画がそのまま残っていると推測される。北側西壁では現存する区画溝の下部からも同じように溝の痕跡が確認された。4~6・8層が当時の地表面と推測される。

8トレンチは区画が現存していないが、周辺の地形等からもともと区画があったと想定される部分に南北方向に設定した。トレンチに沿って2層で示される溝が検出され、条里区画の一端が確認された。

9トレンチは区画の東西ラインに直行する形で設定した。現道に切られており明確ではないが、道路に向かって土層が傾斜しており、当時溝があったものと推測される。

10トレンチは南北ラインに直行する形で設定した。現在の水路に切られており明確ではないが、4~6層が畦畔になるのかもしれない。

11トレンチは東西ラインに直行する形で設定した。現在の

第6表 本吉条里トレンチ対照表

調査時No	報告No	調査面積(m ²)
28	1	405
25	2	45.58
30	3	44.25
24	4	48.91
23	5	不明
22	6	47
21	7	164.22
20	8	194.25
1	9	30
19	10	87.6
18	11	52
17	12	104.85
2	13	120.66
3	14	52.14
4	15	48.23
16	16	82.8
15	17	36.4
10	18	36
9	19	30.6
8	20	51
5	21	97.12
11	22	93.3
6	23	37.2
12	24	33.2
26	25	6
7	26	80.72
29	27	6
27	28	12
13	29	405
14	30	749

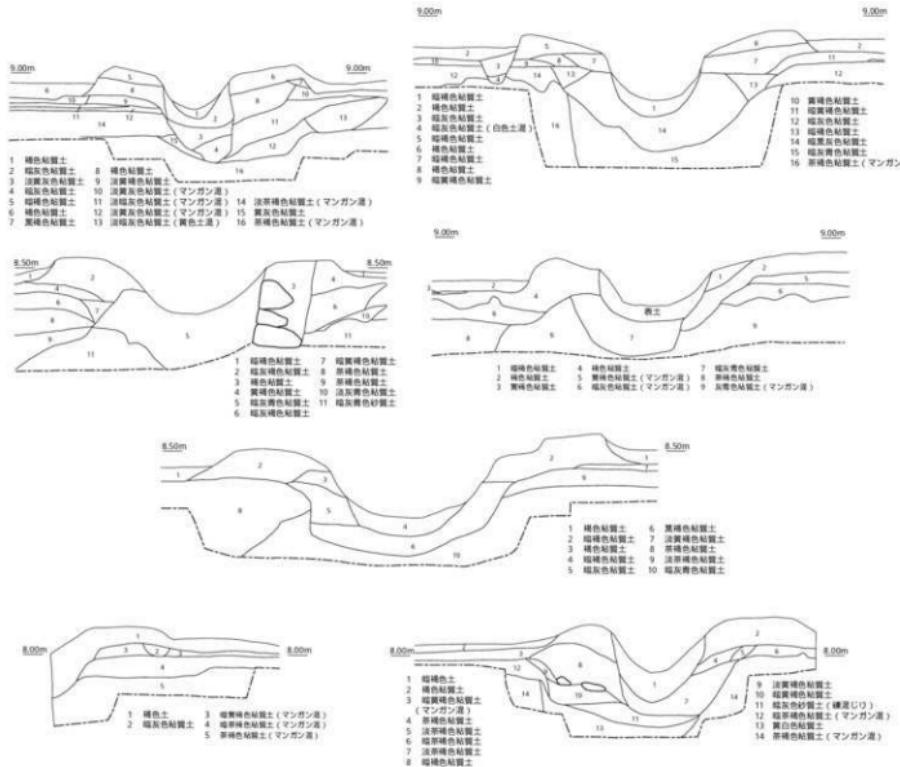
水路と畔に大きく削平されているが3層など溝の痕跡を見せており、当時も同じ場所に区画があったものと推測される。

12トレンチは区画の中央に東西方向に設定しており、条里制にかかる遺構は認められない。

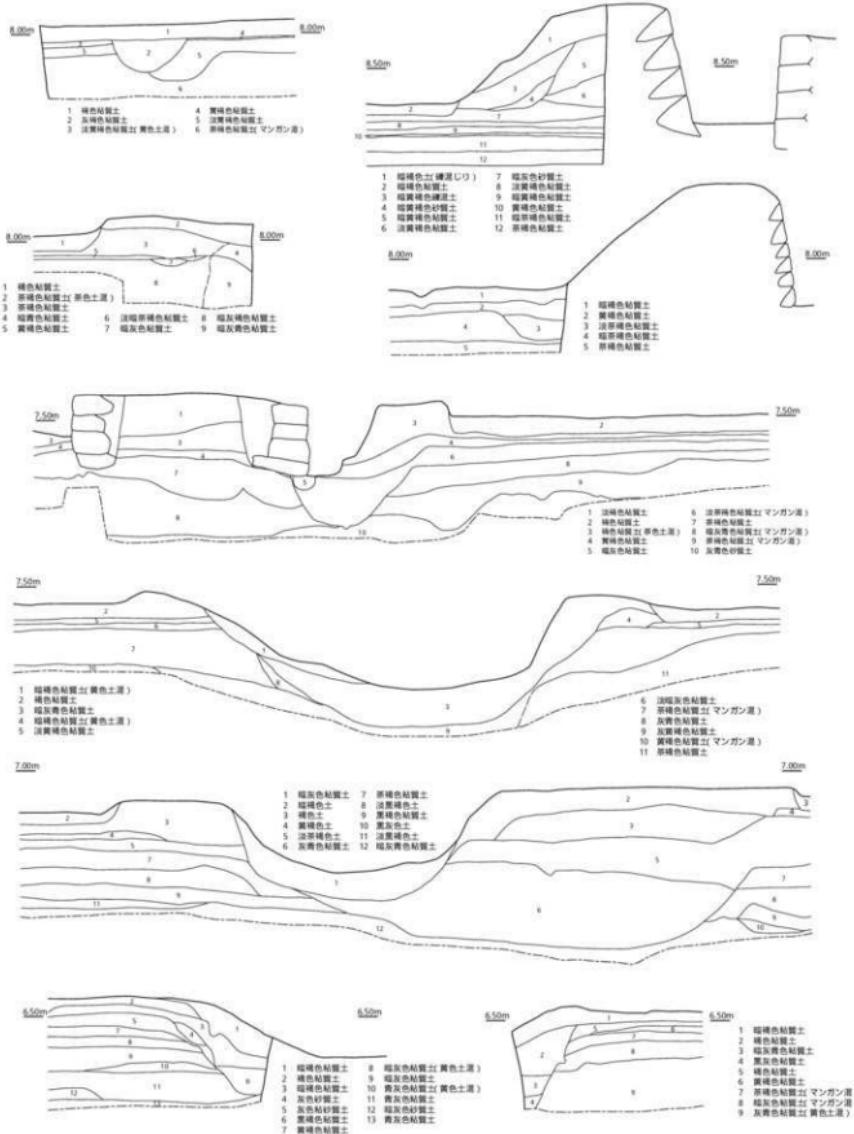
13トレンチは東西ラインに直行する形で設定した。現道と溝によって削平を受けているものの、現在の溝の下部から同様に、溝の痕跡が確認され当時の区画も同じ場所にあったと考えられる。7・8層が当時の地表面となるか。

14トレンチは南北ラインに直行する形で設定した。現存する区画溝の下部からも同じように溝の痕跡が確認された。5・6層が条里当時の地表面になるとを考えられる。

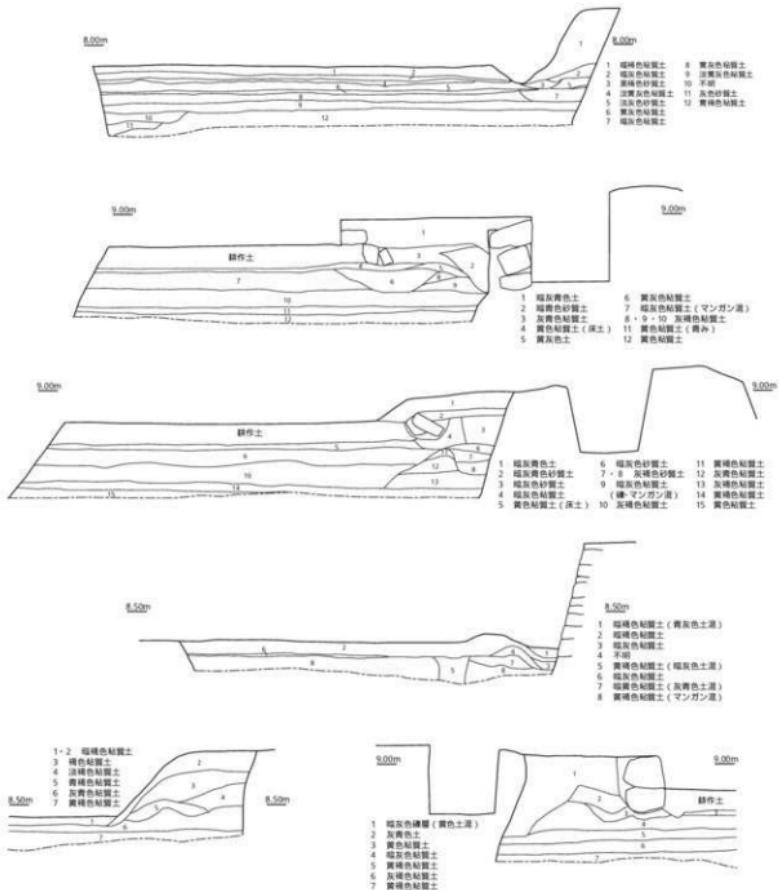
15トレンチは東西ラインに直行する形で設定した。現在の水路に切られており、条里に関連する土層等の確認はできなかった。また、区画の中央に東西方向で設定した16トレンチも条里制にかかる遺構は認められない。



第69図 1~7トレンチ土層実測図 (1/60)



第70図 8~21トレント土層実測図 (1/60)



第71図 24~28トレンチ土層実測図 (1/60)

17・18トレンチは東西ラインの北側(16)南側(17)に設定した。なお図面は水路までが16トレンチの西壁、水路より南が17トレンチ東壁である。現在の水路に切られており明確ではないが、水路に向かって傾斜する土層が観察され、当時溝があったものと推測される。

19・20トレンチは区画の中にそれぞれ南北・東西方向に設定しており、条里制にかかる遺構は認められない。

21トレンチは東西ラインに直行する形で設定した。現在の水路に切られているものの水路の北

側および南側両方で水路に向かって傾斜する土層が確認され、当時の区画も同じ場所にあったと考えられる。北側トレンチの7層、南側トレンチの6層が当時の地表面となると考えられる。

22トレンチは南北ラインに直行する形で、23トレンチは南北東西ラインに直行する形で2か所設定した。どちらも水路や現道に切られており、条里に関連する遺構は認められない。

24トレンチは南北ラインに直行する形で設定した。現在の畦畔、溝があり明確ではないが、下部に溝状の土層が確認され、当時の区画も同じ場所にあったものと推測される。9層からは石鎧が出土している。

25トレンチは南北ラインと平行に設定したが、条里に関連する遺構は認められなかった。

26トレンチは東西ラインと南北ラインが交差するところに設定した。このうち東南側トレンチの南壁、西壁では、それぞれ8・9層、11～13層で見られるように畦畔が残存しており、当時の区画も同じ場所にあったことがわかる。南壁の10層、西壁の14層が当時の地表面であろう。

27トレンチは26トレンチの東側、東西ラインに直行する形で設定した。現道に切られているものの、4層に畦畔の痕跡があり、そこから現道に向かって傾斜する土層が見られることから、当時の区画が残っているものと推測される。

28トレンチは南北ラインに直行する形で設定した。水路および現道に切られているが、東側トレンチの2もしくは4層など畦畔状の痕跡が残る土層が確認され、当時の区画も同じ場所にあったと推測される。

29トレンチは28トレンチの南側に南北ラインに直行する形で設定した。28トレンチとは異なり条里が想定されるような遺構は認められなかった。

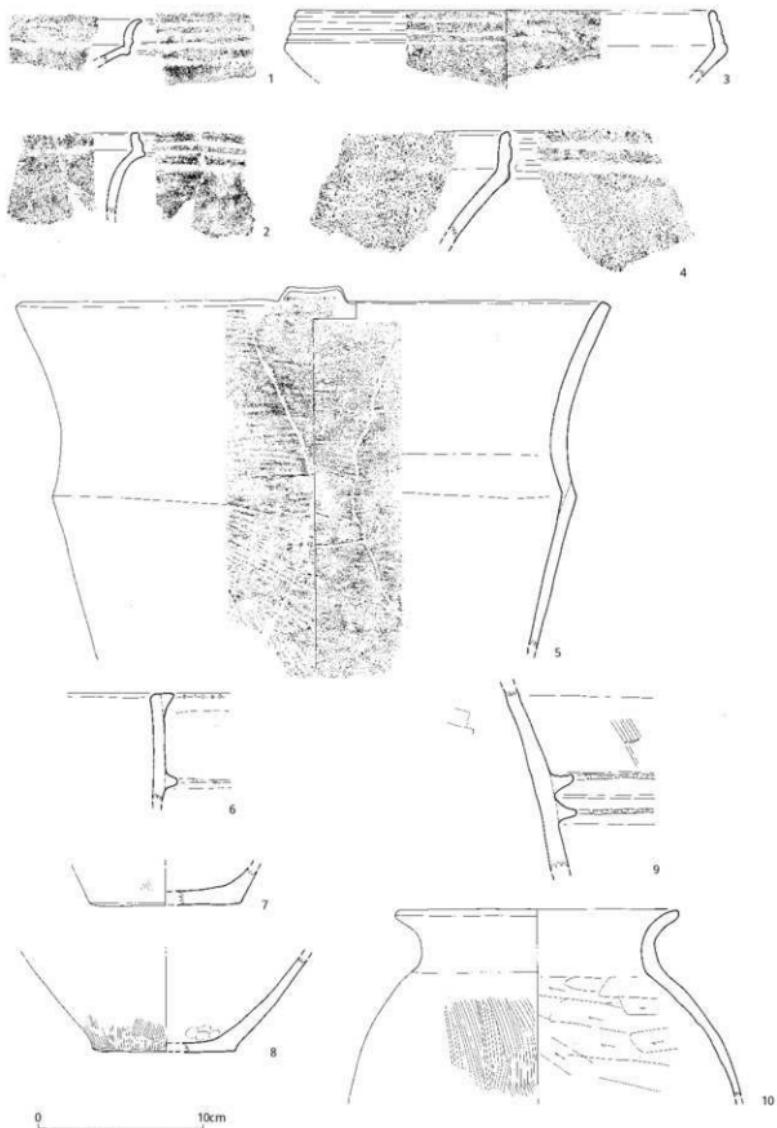
30トレンチは南北ラインが屈曲する部分に設定した。これも現道に壊されているためか、条里に関連する遺構は認められなかった。

4.出土遺物

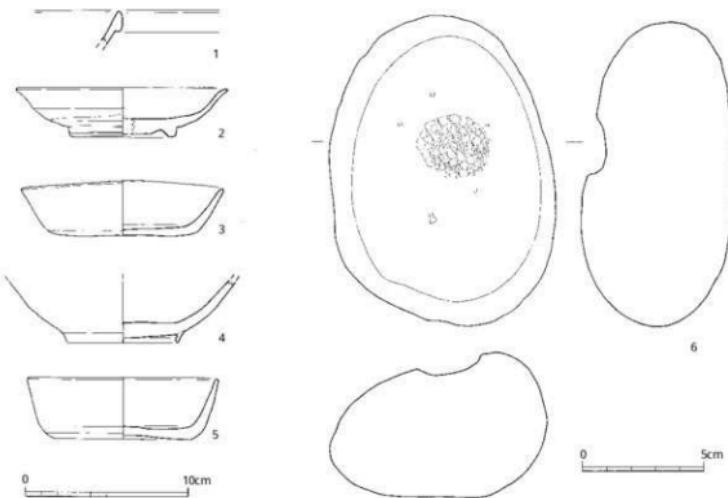
条里に関連すると考えられる遺物および周辺の本吉遺跡群でも出土している縄文土器を中心とした土器・石器について報告する。

土器（第72図）

1～5は縄文土器である。1・2は御領式の鉢である。ともに10トレンチ床土および黄褐色粘質土出土。1は外面にぶい褐色、内面灰黄褐色で、磨きを施し、口縁部に2条の平行凹線を施す。屈曲が強く、1段残存する。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。2は外面黒褐色、内面褐色で、磨きを施し、口縁部に2条の沈線を施す。屈曲は弱く、1段残存する。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。3・4は三万田式の鉢である。3は浅鉢で、4は深鉢である。ともに13北側トレンチ出土。3は外面灰褐色、内面にぶい黄橙色で、磨きを施し、口縁部に3条の沈線を施す。復元径で口径25.4cmを測る。4は外面にぶい黄橙色、内面黄灰色で、磨きを施し、口縁部に2条の凹線を施す。5は黒川式の深鉢である。外面にぶい黄橙色、内面褐色～黒褐色で、内外面ともに祭痕を施す。外面は一部黒斑が残り、屈曲部から下は黒褐色を呈す。口唇部には約1cmの突出部があり、1つが残存する。屈曲部直上には内傾接合の痕跡が内外面に残る。復元径で口径36.4cmを測る。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を少量含む。3トレンチ出土。6は板付II式土器櫛の口縁部である。内外面灰白色で、調整



第72図 本吉条里出土土器実測図 (1/3)



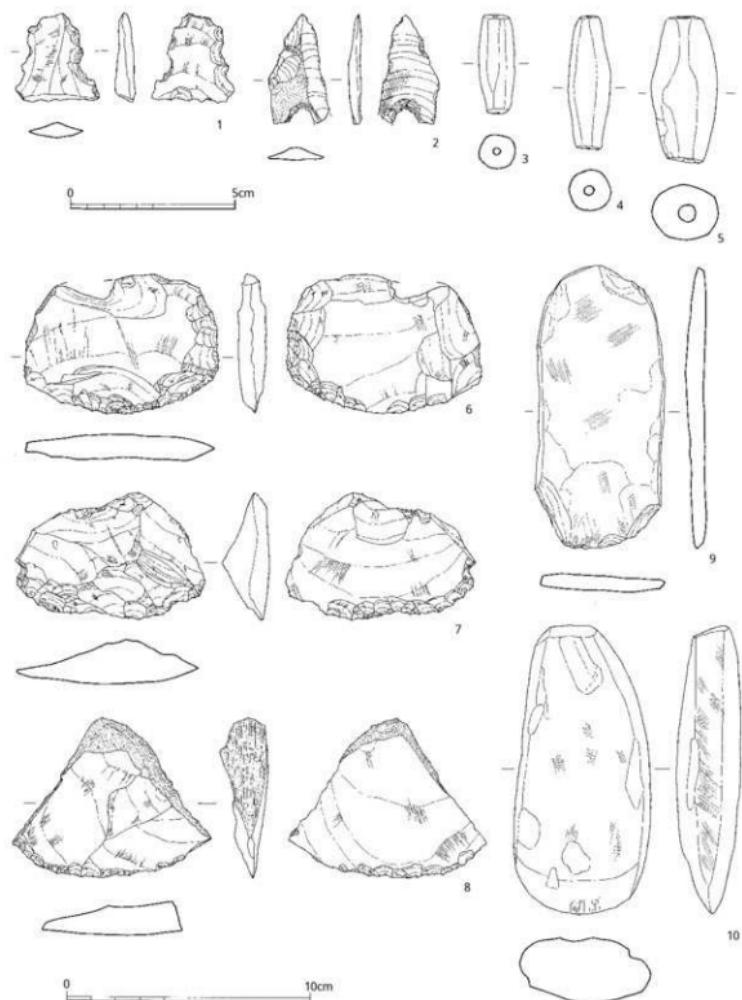
第73図 本吉条里出土土器・石器実測図(1~5:1/3, 6:1/2)

は摩滅のために不明瞭である。口唇部および突帶部に刻み目を施す。13北側トレンチ出土。7・8は甕または鉢の底部である。7は外面橙色、内面灰黄褐色で、外面ハケ目を施す。内面は摩滅のため不明である。復元径で底径9.3cmを測る。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。10北側トレンチ床土および黄褐色粘質土出土。8は外面にぶい黄橙色、内面灰白色で弥生土器であろう。外面はハケ目を施す。内面底部付近にはコビ押さえを施し、上にはナデを施す。底径8.7cmを測る。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。13北側トレンチ出土。9は弥生土器の壺と考えられる。外面橙色、内面灰白色で、外面ハケ目を施す。中央には突帶が2条付き、刻み目を施す。上部には頸部突帯が外れた痕跡もある。内面は摩滅のため不明瞭だが、ケズリか。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。13北側トレンチ出土。10は土師器の甕である。外面淡褐色、内面灰白色で、外面の一部に黒斑が残る。外面はハケ目を施すが、不明瞭でハケ目調整後ナデを施している可能性もある。内面はケズリを施す。内面頸部の稜が明確で古墳後期に属する。口径17cmを測る。径1~2mmの白色粗砂を含む。13北側トレンチ出土。

土器・石器(第73図)

1は白磁の碗である。内外面灰白色で、玉縁形の口縁をもつ。一部に釉垂れが見られる。胎土は精良で、12世紀に属すると考えられる。15南側トレンチ出土。2は白磁の皿である。内外面灰白色で、明オリーブ灰色の釉をかける。外面下部は回転ヘラケズリで、上部から内面にかけて回転ナデを施す。内面には蛇の目釉剥ぎが見られ、底部は削り出しにより作られる。復元径で口径13cm、

底径6.6cmを測る。17世紀前半の肥前産か。20トレンチ床土出土。3は土師器の坏である。外面にぶい橙色・灰黄褐色、内面にぶい橙色で、全面が摩滅しており調整は不明瞭である。やや焼け歪むが復元径で口径12.4cm、底径9.2cmを測る。径1mm以下の白色粗砂、赤色粒子を多少含む。14西側ト



第74図 本吉条里出土石器実測図 (1~5: 2/3, 6~10: 1/2)

第7表 出土石器・土製品一覧表

拂図番号	番号	図版	種類	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	遺物番号
73	6	40	凹み石		3南側トレンチ 灰黄色粘質土	12.7	9.35	6.20	809.0	凝灰岩		
74	1	40	2次調整剥片		13北側トレンチ	2.7	2.55	0.6	3.8	安山岩		
74	2	40	剥片鏃		22トレンチ 暗灰色砂質土	3.35	1.90	0.4	(1.9)	黒曜石		
74	3	40	土鍤		12トレンチ 床土の下の層	3.0	1.1		4.4		灰白(5Y 7/1), 孔径0.25cm	
74	4	40	土鍤		25トレンチ 拡張区表土直下	4.1	1.3		6.4		淡黄(2.5Y 8/3), 孔径0.3cm	
74	5	40	土鍤		25トレンチ 拡張区表土直下	4.5	2.05		14.3		淡黄(2.5Y 8/3), 孔径0.5cm	
74	6	40	スクレイバー		26トレンチ10層	5.65	8.0	1.15	(59.7)	安山岩		
74	7	40	スクレイバー		26トレンチ10層	5.1	7.75	1.9	59.4	安山岩		
74	8	40	スクレイバー		26トレンチ10層	6.5	8.1	1.95	68.3	安山岩		
74	9	40	磨製石錐		13南側トレンチ 暗灰色粘質土	11.6	5.25	0.85	87.3	片岩		
74	10	40	磨製石斧		26南東側トレンチ 黄色粘土	11.7	5.65	2.65	272.0	白色凝灰岩		

()内は現存値

レンチ暗灰青色粘質土直下出土。4は瓦器挽の底部である。外面浅黄橙色、内面灰白色で、調整は摩滅のため不明である。高台は内傾し、端部にはやや逆刺が付く。復元径で底径6.7cmを測る。26トレンチ床土のすぐ下の土出土。5は須恵器坏身である。内外面灰色で、外面下部回転ヘラケズリ、上部から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ切りを施す。復元径は口径11.6cm、底径8.4cmを測る。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。23北側トレンチ暗灰色粘質土出土。6は凹み石である。中央部が叩きにより約8mm凹んでいる。凝灰岩製。13南側トレンチ灰黄色粘質土出土。

石器（第74図）

1は2次加工剥片である。縦長剥片を使用し、両縁に剥離調整を施す。安山岩製。13北側トレンチ出土。2は凹基式の剥片鏃である。縦長剥片を使用し、抉り部にのみ細かい調整を加える。表面には原石面が残り、片脚がわずかに欠損している。黒曜石製。22トレンチ暗灰色砂質土出土。3~5は土鍤である。どれも表土直下で出土しており、古代~中世に属すると考えられる。3は小型で灰白色を呈し、胎土は精良である。表面の一部が赤く、朱塗りがしてあるか。12トレンチ床土の下の層出土。4は中型で淡黄色を呈し、胎土は精良である。表面に黒斑が残る。25トレンチ拡張区表土直下出土。5は大型で淡黄色を呈し、胎土は精良である。表面の一部が赤く、朱塗りがしてあるか。25トレンチ拡張区床土直下出土。6~8はスクレイバーである。全て26トレンチ10層出土。6は横長剥片を使用し、右縁から下縁にかけて両側から細かい調整を施し、刃部を形成する。左縁には一部原石面が残る。上部が一部欠損するが、剥離痕は新しく元々は完存していたものと考えられる。安山岩製。7は横長剥片を使用し、下縁にのみ両側から調整を施し、刃部を形成する。上縁に一部刃潰しと考えられる剥離を施す。安山岩製。8は平面三角形で、下縁にのみ両面から調整を施し、刃部を形成する。斜辺はともに原石面を残す。安山岩製。9は磨製石錐である。ほぼ全面に研磨を施し、側面は粗い研磨で整形を行う。作用部は一部剥離と摩滅が見られる。片岩製。13南側トレンチ暗灰色粘質土出土。10は磨製石斧である。平面は基部側がややすばまり、断面形は橢円形を呈する。ほぼ全面に粗い研磨を施している。刃部の使用痕はさほど見られない。白色凝灰岩製。26南東側トレンチ黄色粘土出土。

5.まとめ

以上のように、1972年に実施された発掘調査の成果から、圃場整備前における区画は、条里制当時の区画をほぼそのまま残していると考えられる。また、8トレンチで見られたように、現況で残っていない部分でも溝の痕跡が発見され、広くきれいに条里が作られていたことがわかる。時期は明確な遺物が伴っていないので判断しかねるが、北側の方位に乗る区画も45°傾く区画も官道の推定ラインと方向が合うことから古代～中世に属するものと考えられる。実際に日野尚志氏が復元した条里ともほぼ合致しており（註1）、官道が本道跡周辺で角度を変えることを考慮するならば、同時代に二つの異なる角度で作られた条里が併存していた可能性もあると考える。ただ、北側の区画を南側が切るよう見えることから、南側が新しい可能性もある。（城門）

また、IV区の調査では、インターチェンジ進入路という限定された狭い範囲での調査となつたが、大溝1条、小溝1条を検出した。大溝S X01は上面幅1.6～18m、深さ0.8～0.9mで、断面逆台形を呈する。総延長約117mを確認し、7.2～7.4m間隔で大溝と直交する排水口を設けていた。この溝は北西～南東方向に走り、中程で一旦方向を変えるものの、磁北から西に53°30'振っている。

ここで注目されるのが、大溝と直交する形で7.2～7.4m間隔で排水口を設けている点である。図



第75図 山門郡の条里 (1/37,500: 日野1978より一部抜粋)

場整備により遺構面がかなり削平されているが、排水口は本来大溝と直交し、区画を兼ねた排水溝で、削平により大溝との接続部のみ残存している状況である。これらのことから、大溝SX01は条里の坪境の溝と考えられ、排水口と排水口との間を田畠とみなすことが可能であろう。

なお、条里制の一段一段ずつ10等分する方法として、長地形と半折形がある。長地形は一坪を縦に10等分するもので、半折形は縦に5等分し、半分に割るものである。今回の検出遺構から一坪を復原すると、坪の一辺の長さは一町で、一町の長さは106~110mとばらつきがあるが、7.2mを単位として106~110を割った際に正数となるようにすると、 $108 \div 7.2 = 15$ となり、10等分とはならないので、半折形の5等分になるようにすると $15 \div 5 = 3$ となる。逆に、 $7.2 \times 3 = 21.6$ 、それを5倍すると108なので、一町の長さが108mで、一段の長さは54m、幅21.6mの半折形に復原される。また、全てではないが、一段幅21.6mの中に7.2m間隔で排水溝が2箇所みられるので、一段を幅約7mの畝でもって三等分している箇所が存在することが知られる。

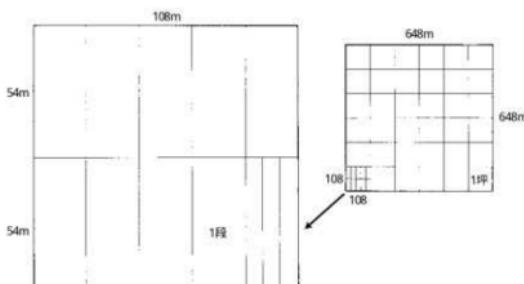
ここで問題となるのが、山門郡の条里との関係である。当地の条里を研究されている日野尚志氏によると、山門郡の条里を矢部川の両岸を山門条里区、大根川流域を松田条里区に区分されている。本跡は松田条里区に含まれるが、松田条里区の土地割りはN29°Wで、南北方位を示す山門条里区と方位が異なるのは遅れて施行されたためとされ、『和名抄』記載の大江郷域と推測されている（註1）。今回検出の大溝SD01は磁北から53°30'西に振っているので、松田条里との方位に18°40'（註2）のズレが生じている。このことは、両者の施行に時期差があることを示すものであるが、出土遺物に乏しく、大溝SD01の時期を明確に特定できないものの、松田条里区が圃場整備以前までは田畠の区画として踏襲されているので、これに先行する時期の所産-恐らく古代における施行と考えたい。

今回、思いもよらず、条里の坪境の溝とみられる遺構を発見し、しかも一坪の単位を復原することができた。しかし、条里の全体復原、西海道との関連といった課題については、ふれられなかった。このことに関しては、後日を期したい。（小田）

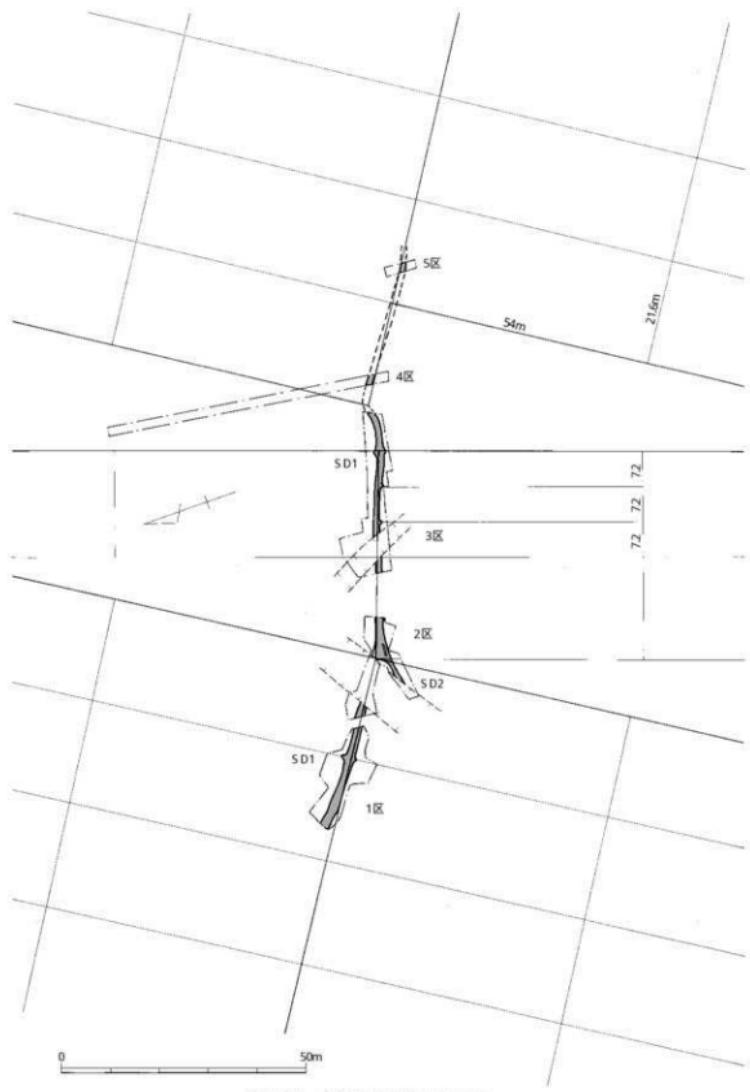
註1 日野尚志 1978「筑後国上妻・下妻・三毛四郡における条里について」『研究論文集a 第26集 佐賀大学教育学部

註2 なお、日野先生には、現地にて有益なる御教示を賜った。

註2 松田条里区の土地割り方位N29°Wは、国土地理院発行の1/25,000柳川・野町の地形図から計測したもので、地形図に磁針方位は西偏5°50'であるので、(29° + 5°50') - 53°30' = 18°40'とした。



第76図 本吉条里 1坪模式図



第77図 条里復原図 (1/1,000)

図 版



1. 米軍撮影 みやま市瀬高町東部空中写真（1948年頃）
写真右上が北。写真下に本吉条里が見える



1. I 区第1次調査区
遠景（西から）



2. I 区第1次調査区
遠景（南から）



1. I 区第1次調査区
全景（上空から）



2. I 区第1次調査区
南遺構群（上空から）



1. I 区第1次調査区
北遺構群（上空から）



2. I 区第1次調査
1号土坑（南東から）



3. I 区第1次調査
3号土坑（南西から）



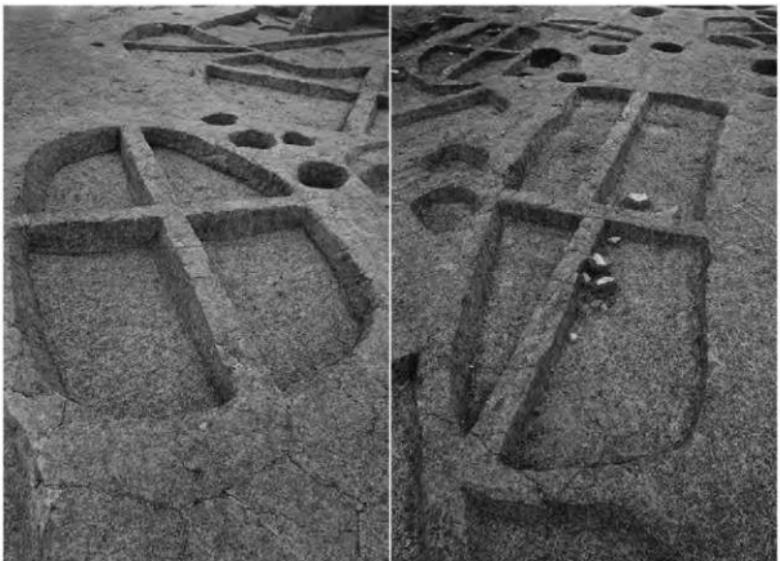
1. I 区第1次調査
4・6号土坑
(南から)



2. I 区第1次調査
5号土坑
(南東から)



3. I 区第1次調査
7号土坑
(南東から)



1. I区第1次調査2号土坑 (南東から)

2. I区第1次調査8号土坑 (東から)



3. I区第1次調査9号土坑 (西から)

4. I区第1次調査12号土坑 (東から)



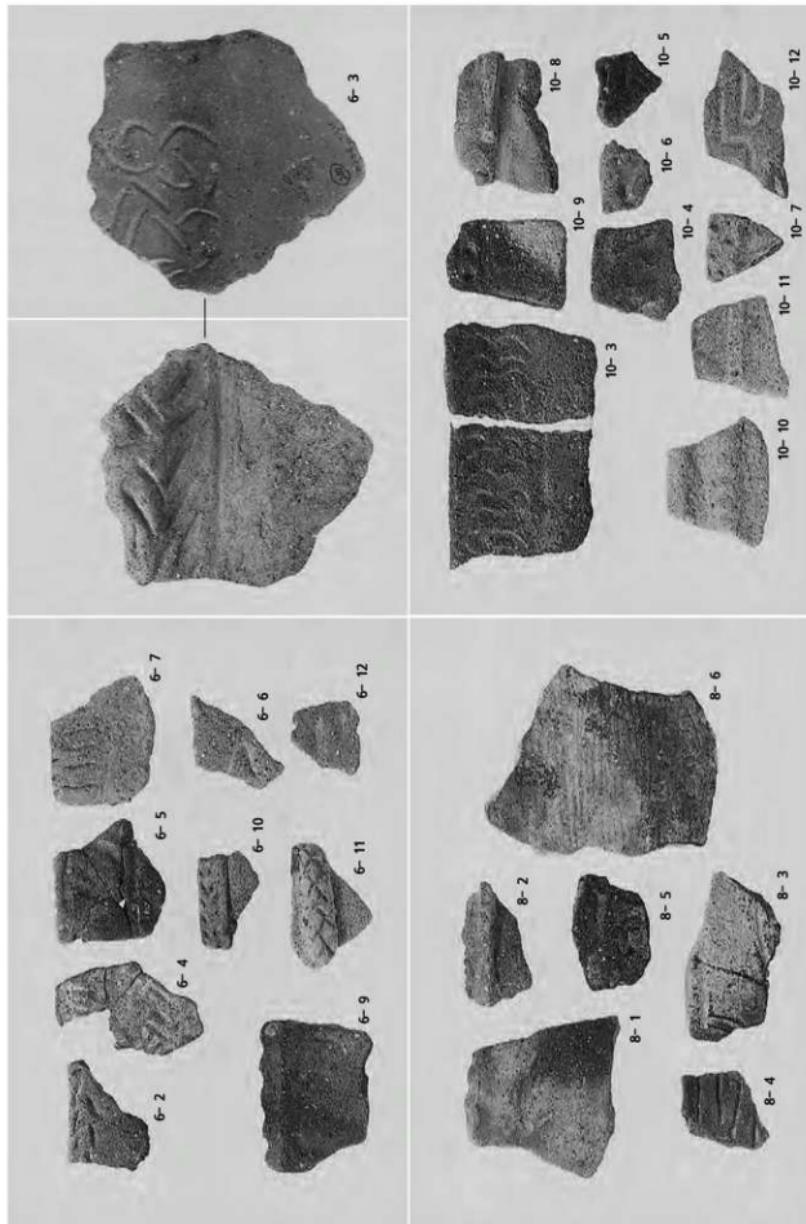
1. I 区第1次調査
10号土坑
(北西から)



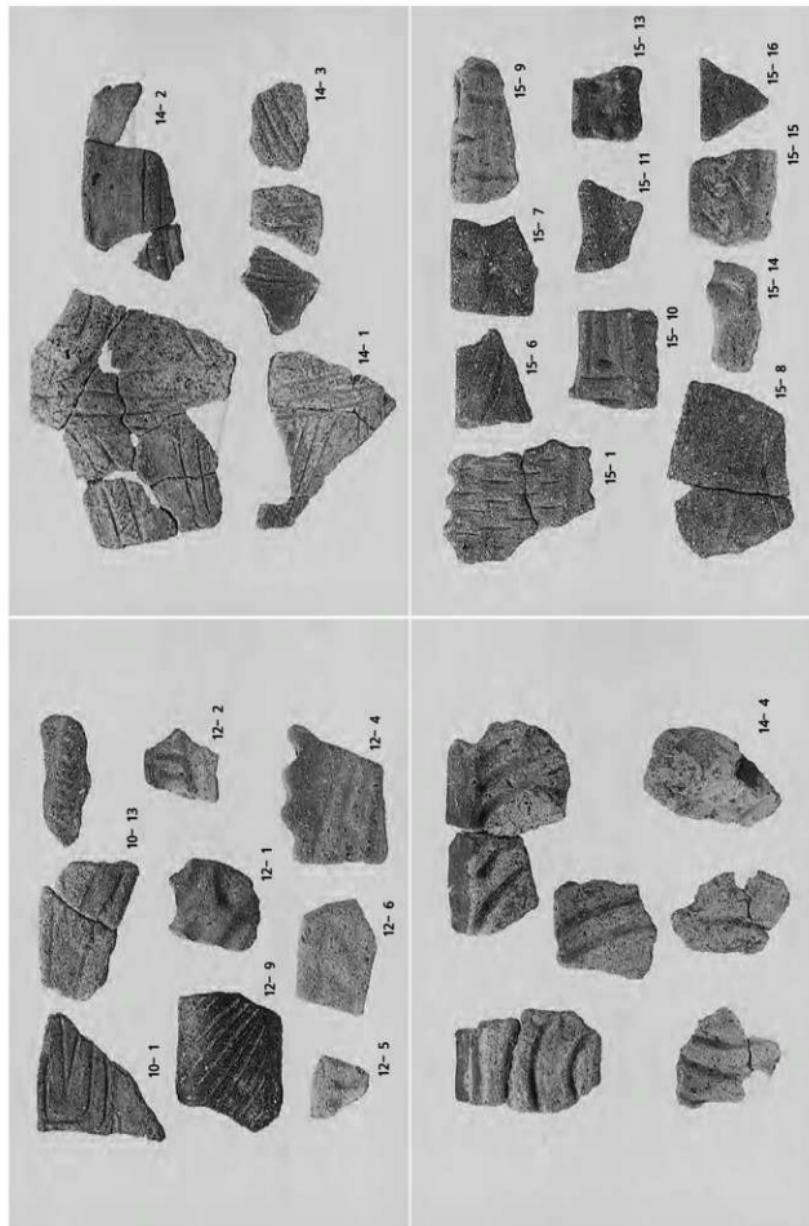
2. I 区第1次調査
13号土坑
(南西から)



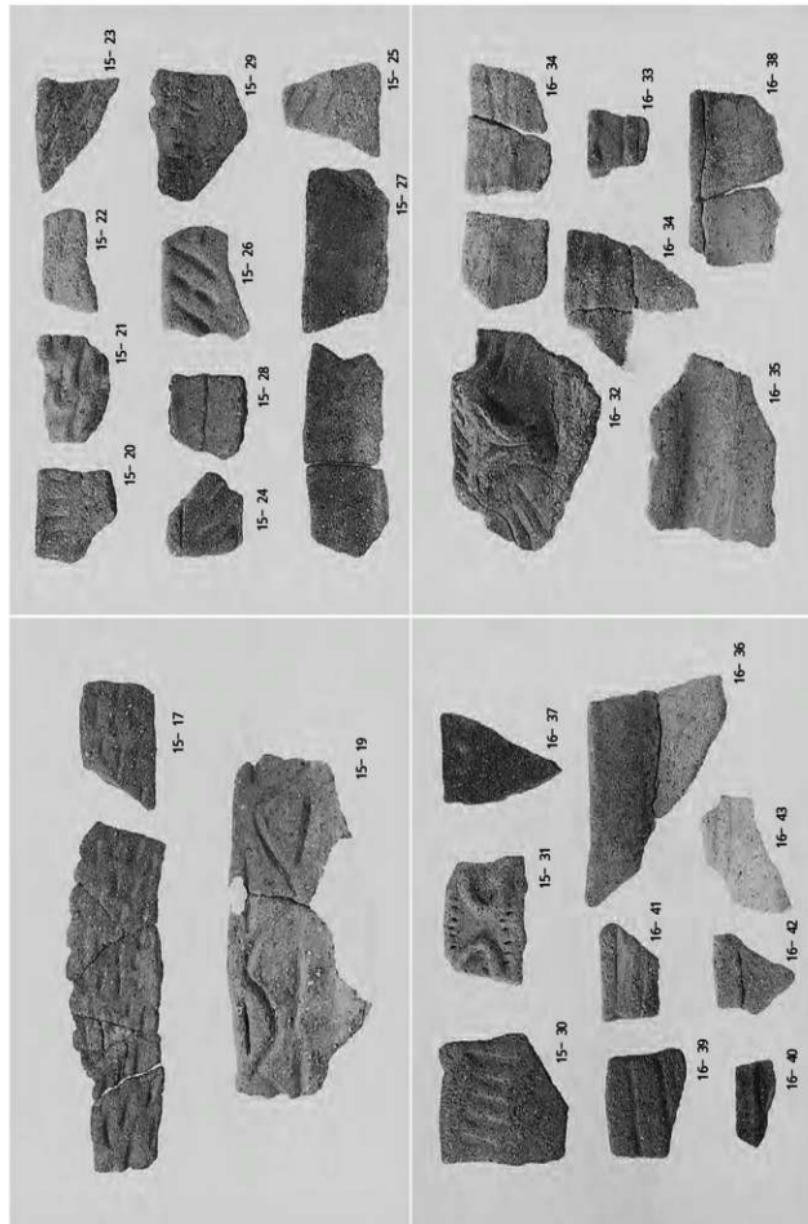
3. I 区第1次調査
15号土坑
(北西から)



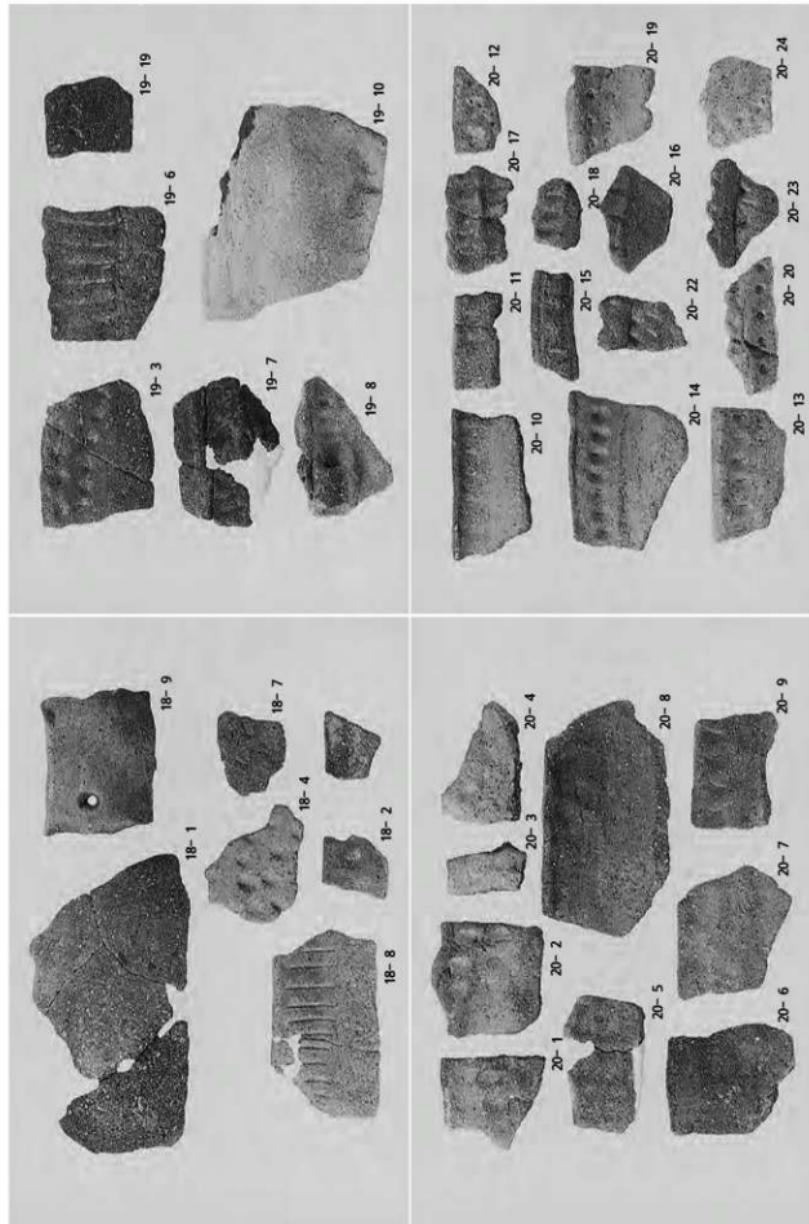
I 区第1次調査出土土器①



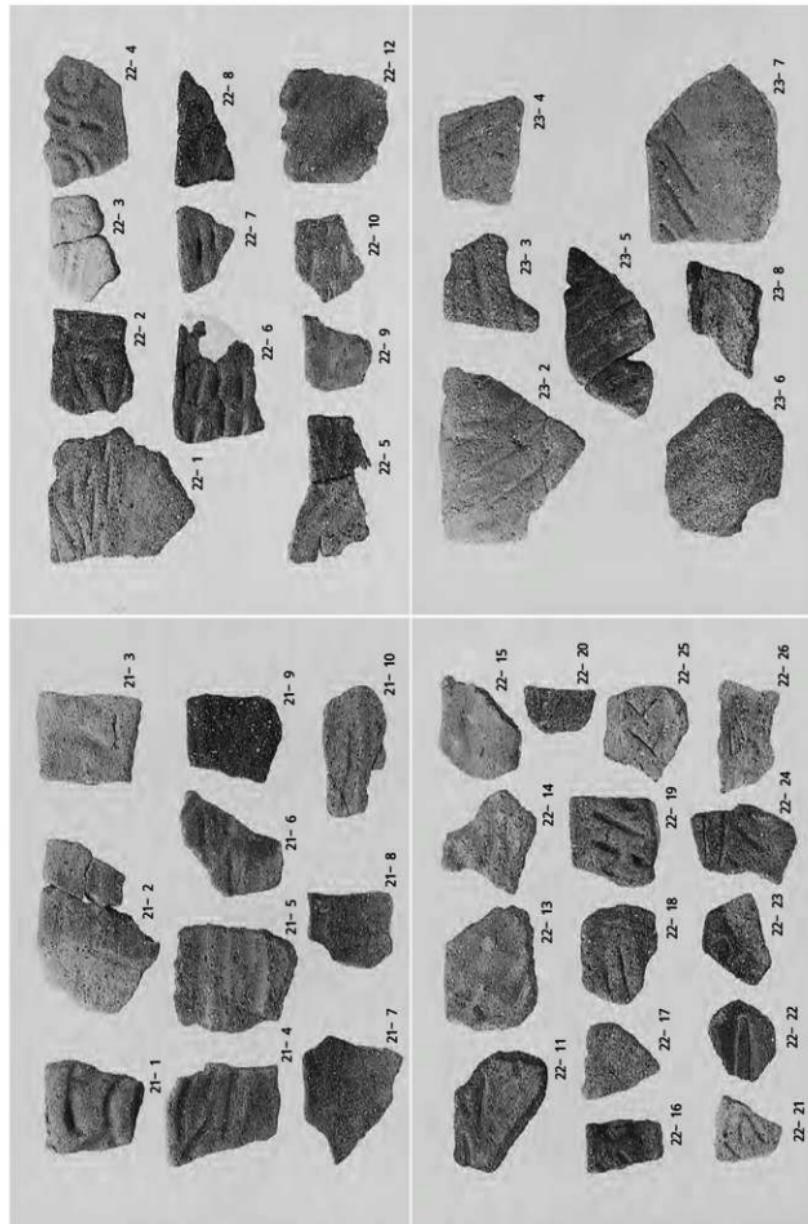
I 区第1次調査出土土器②



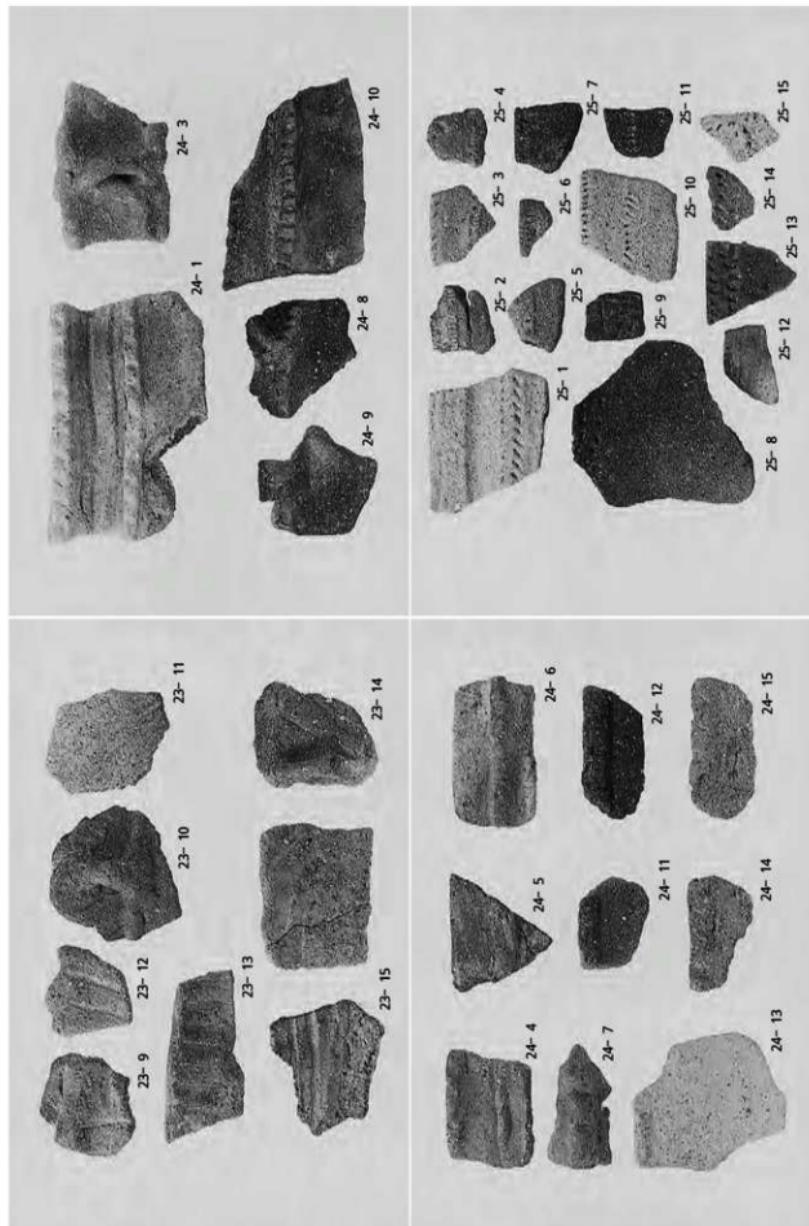
I区第1次調査出土土器①



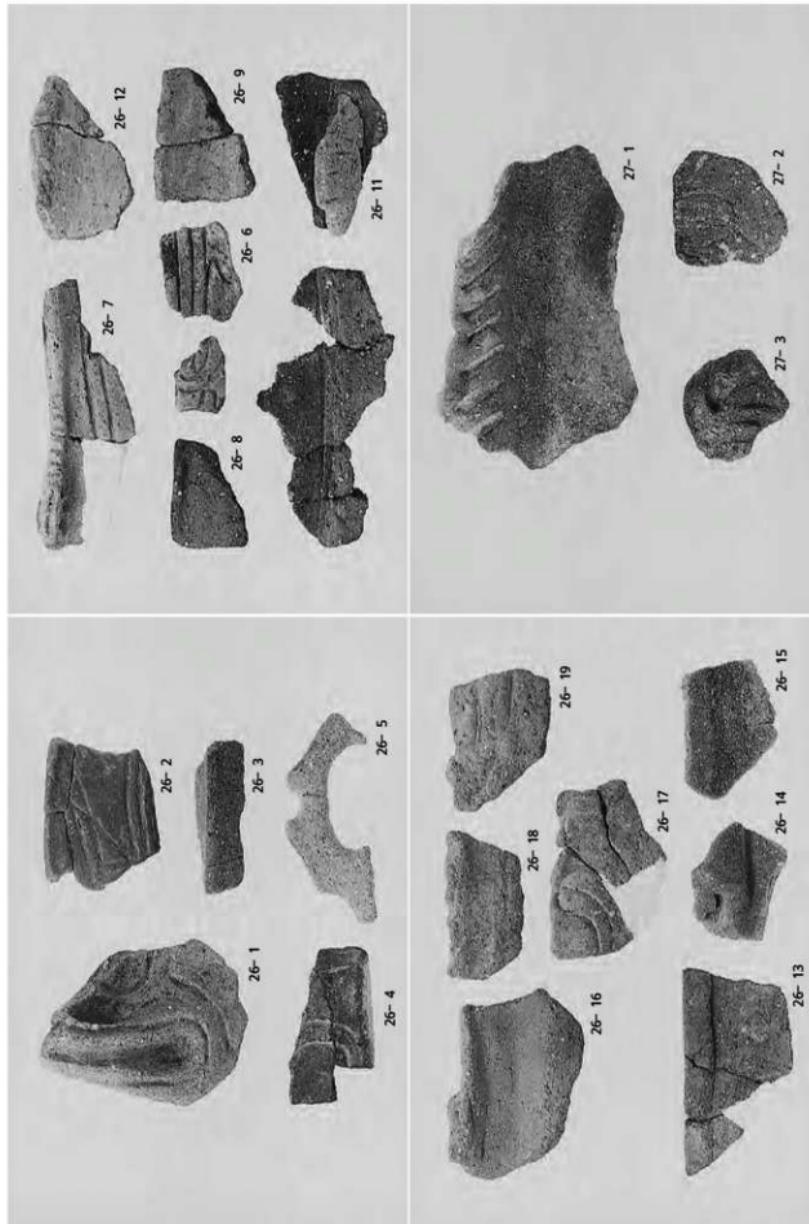
I区第1次調査出土土器④



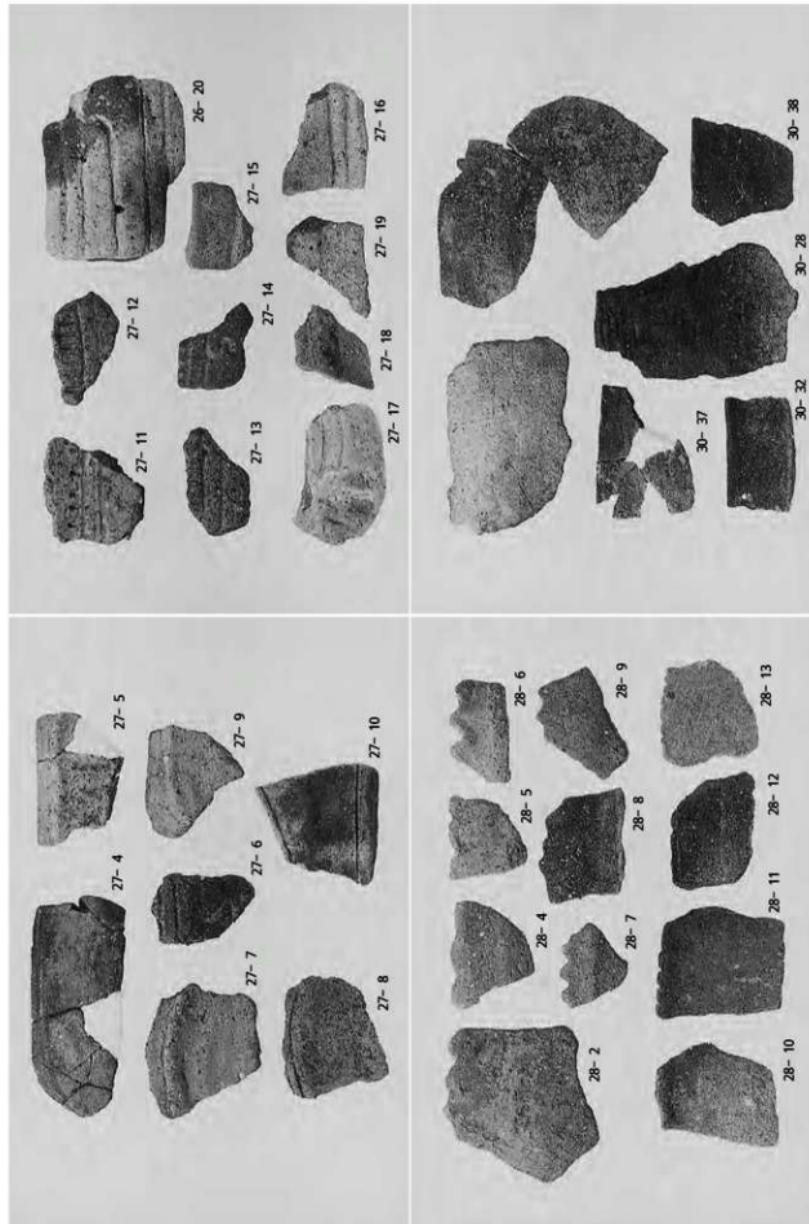
I区第1次調査出土土器⑤



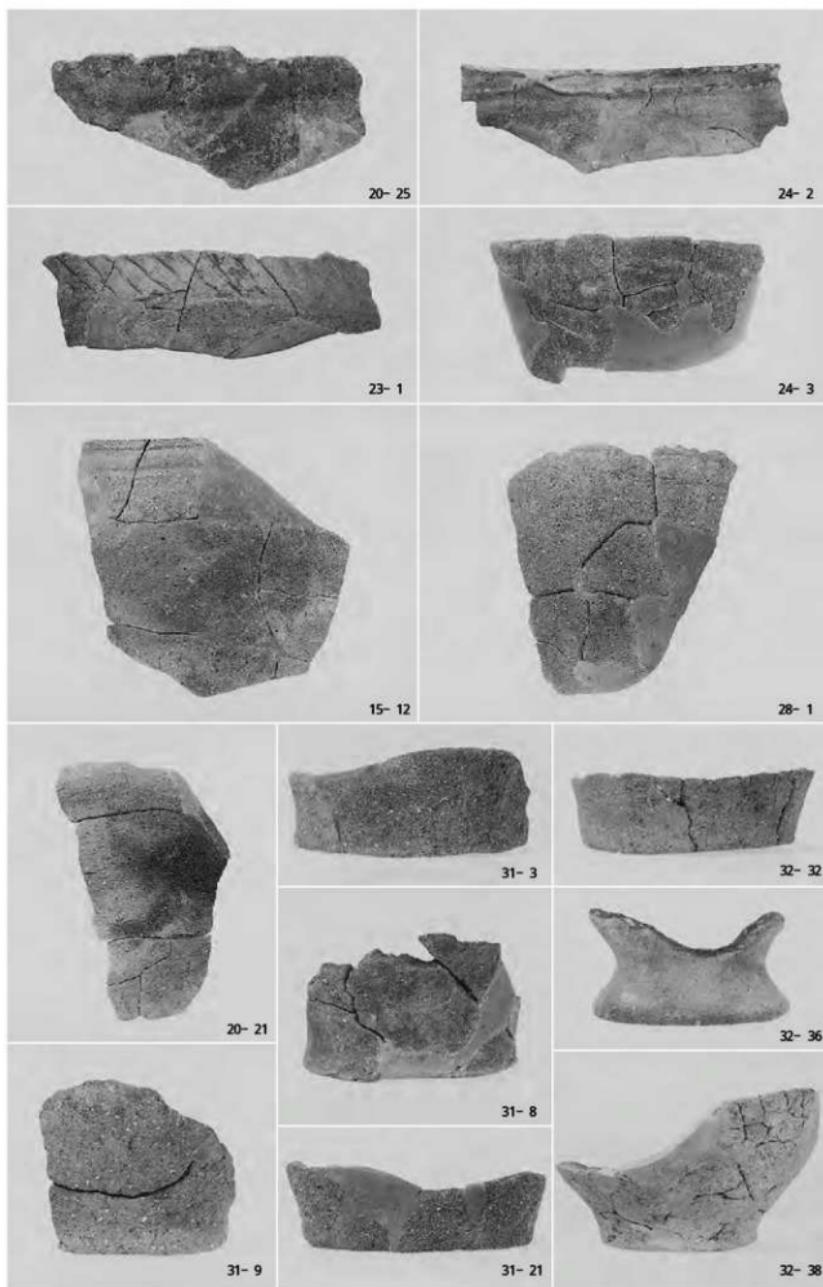
I区第1次調查出土土器



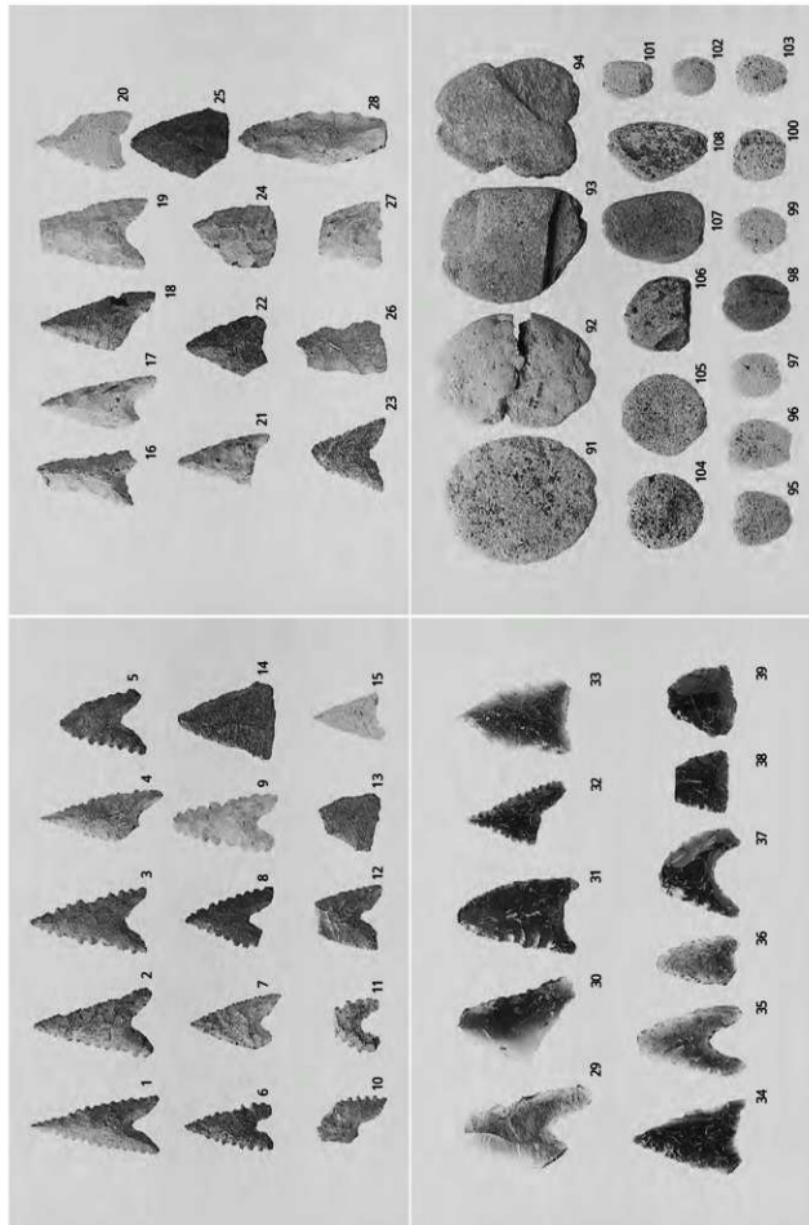
I区第1次調査出土土器⑦



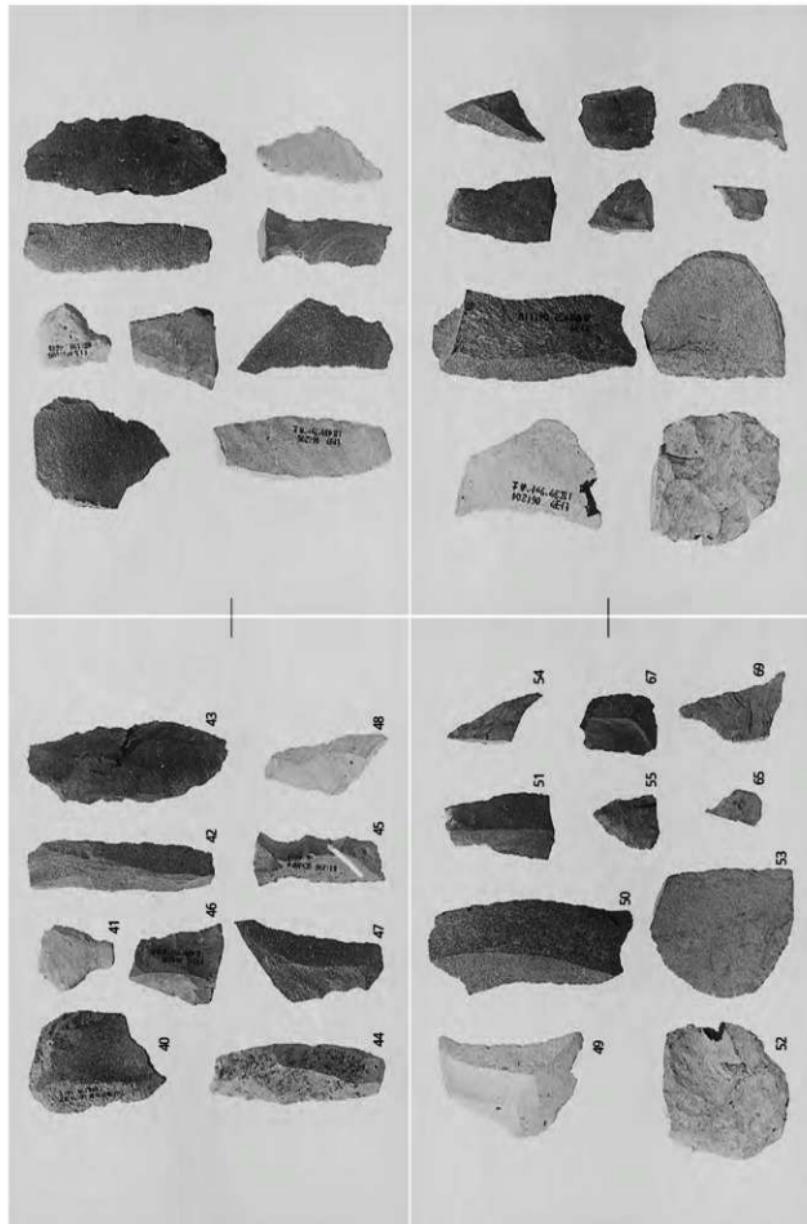
I区第1次調査出土土器⑧



I 区第1次調査出土土器⑨

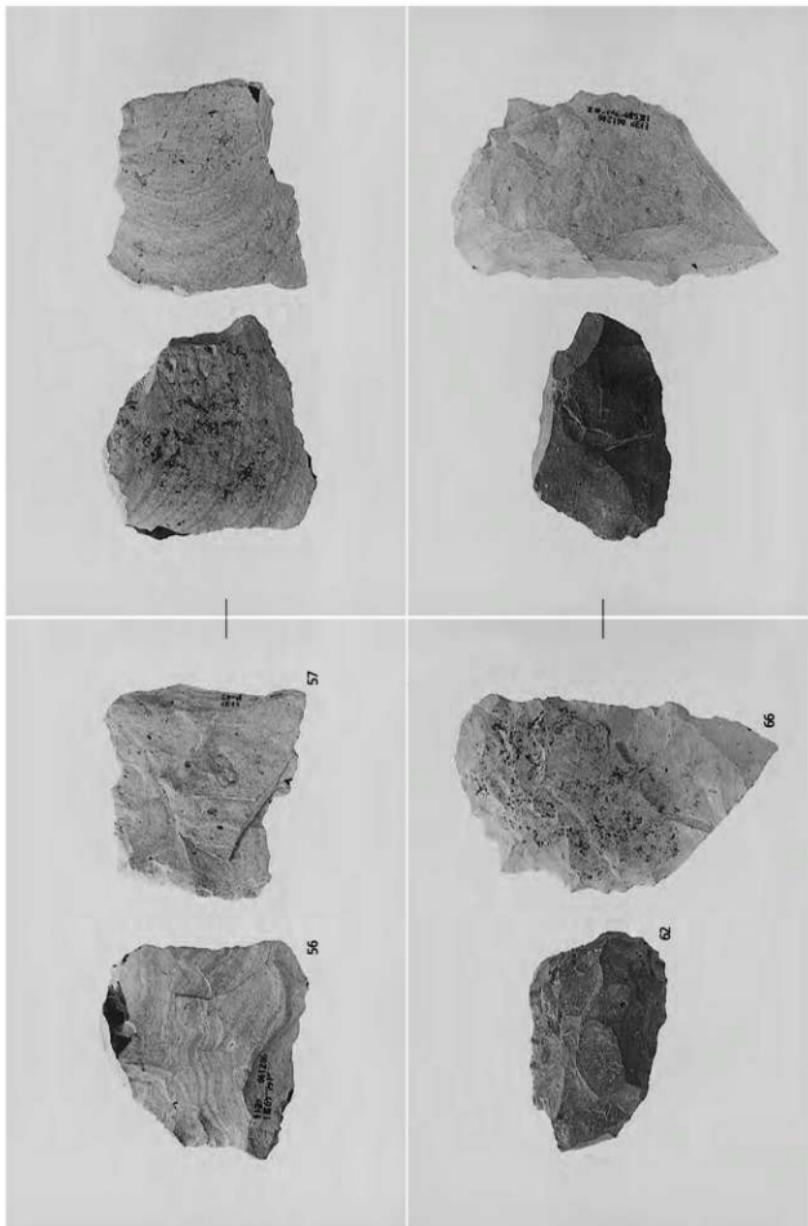


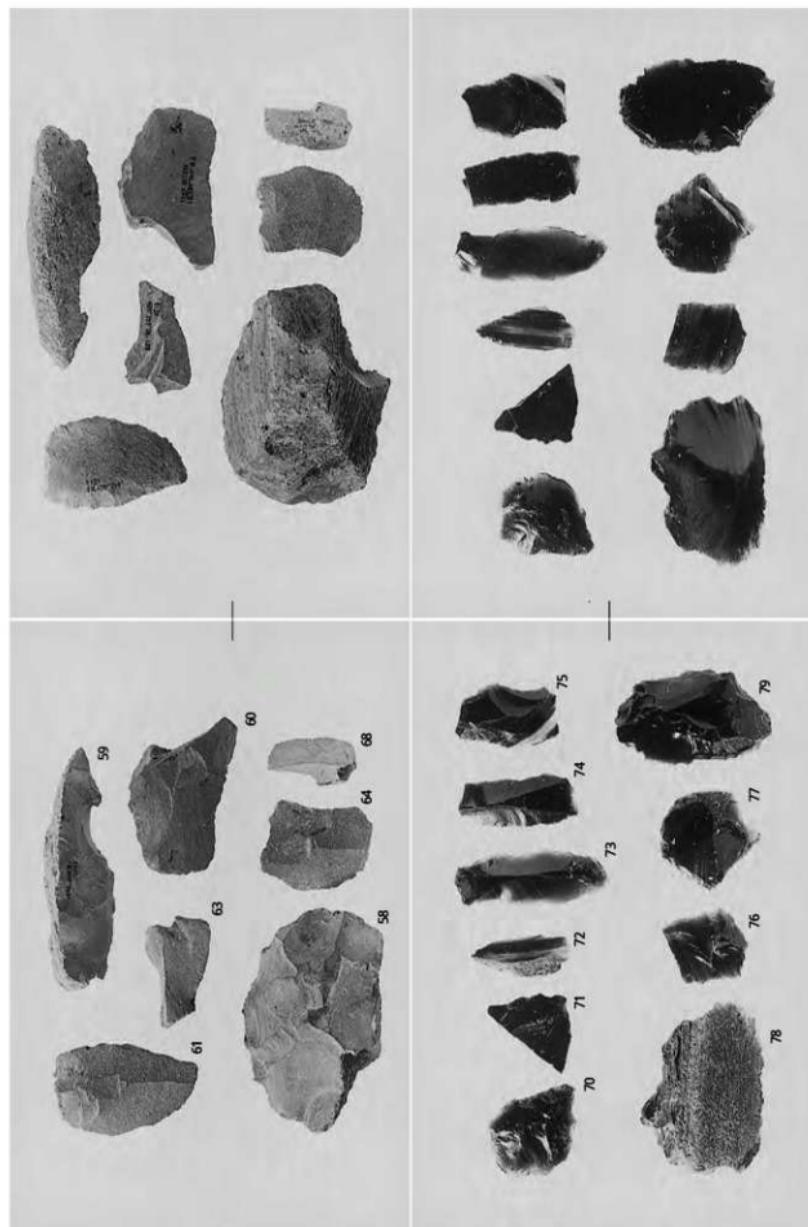
I区第1次調査出土石器①



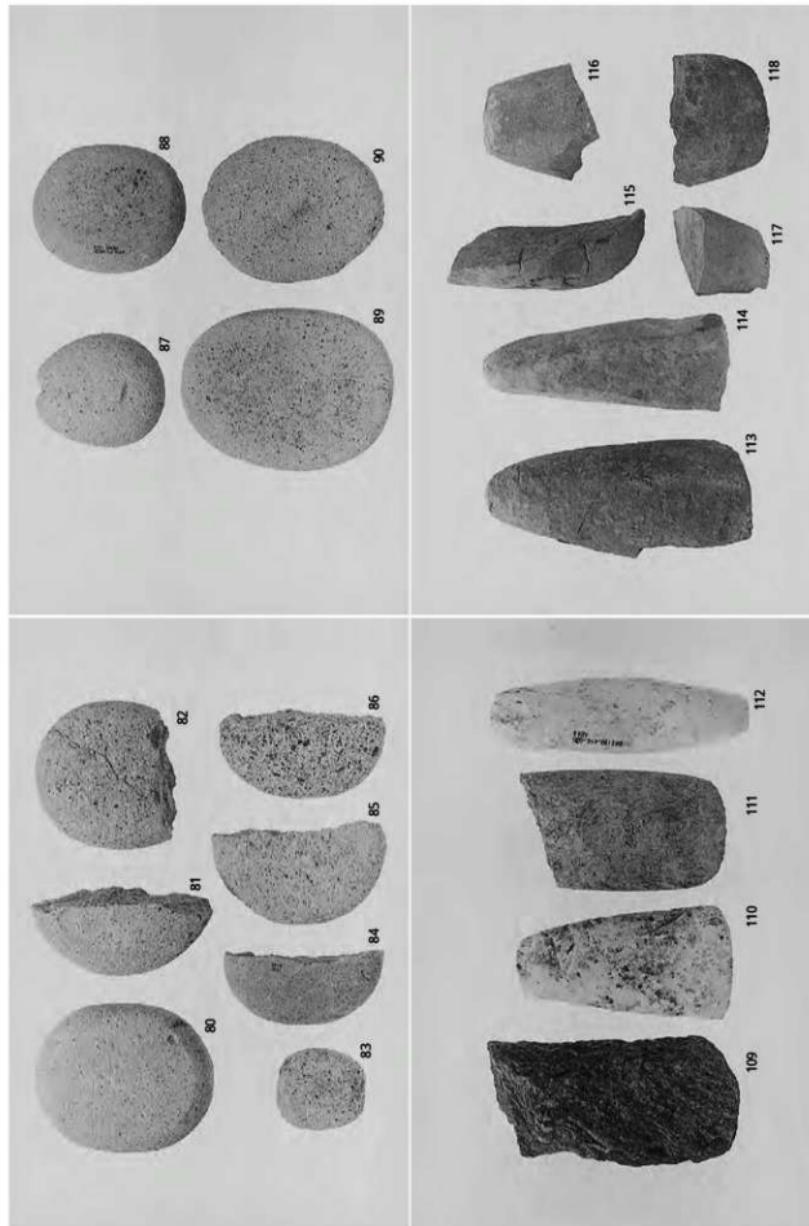
I区第1次調査出土石器②

I区第1次調査出土石器③





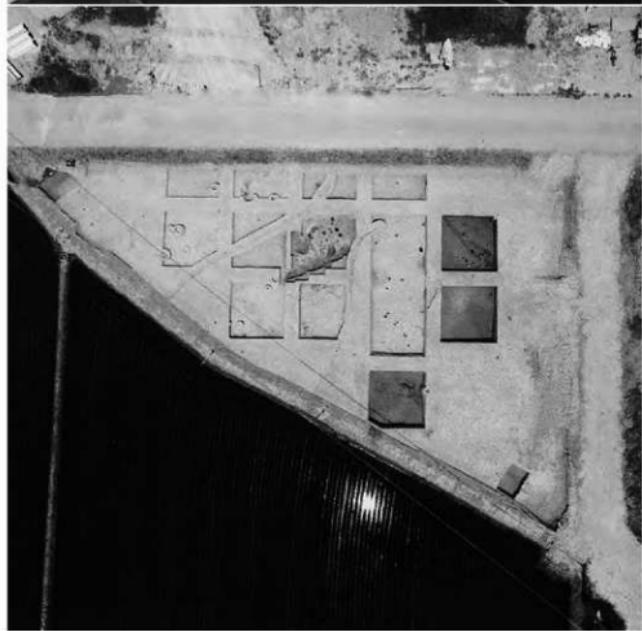
I区第1次調査出土石器④



I区第1次調査出土石器⑤



1. I 区第2次調査区
遠景（南西から）



2. I 区第2次調査区全景
(上空から)



1. I 区第2次調査
1号土坑（西から）



2. I 区第2次調査
2号土坑（東から）



3. I 区第2次調査
3号土坑（北から）



1. I 区第2次調査
4号土坑（北西から）



2. I 区第2次調査
4号土坑西側土層
(東から)



3. I 区第2次調査
4号土坑東側土層
(西から)



1. I 区第2次調査
5号土坑（北から）



2. I 区第2次調査
5号土坑土層
(西から)



3. I 区第2次調査
6号土坑（西から）



1. I 区第2次調査
6号土坑土層
(北から)



2. I 区第2次調査
7号土坑 (南東から)



3. I 区第2次調査
7号土坑土層
(北から)



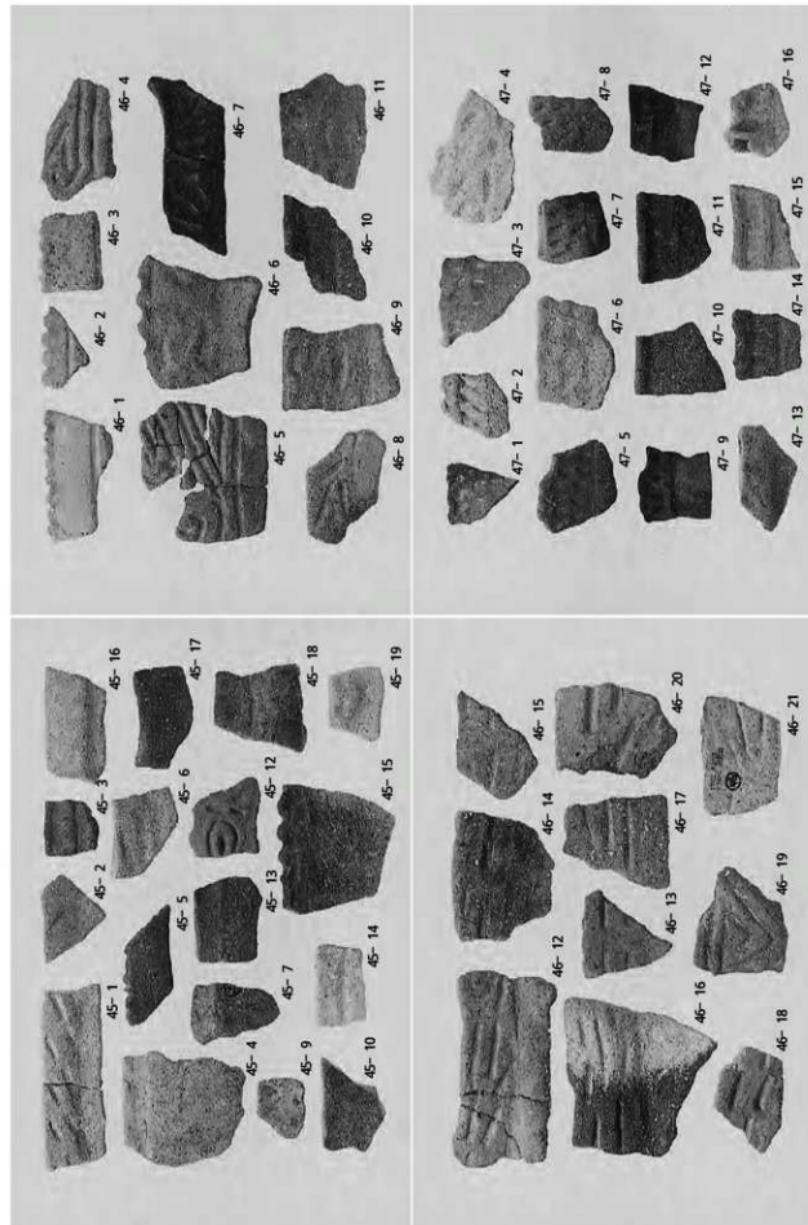
1. I 区第2次調査
グリッドD内
土器出土状況
(西から)



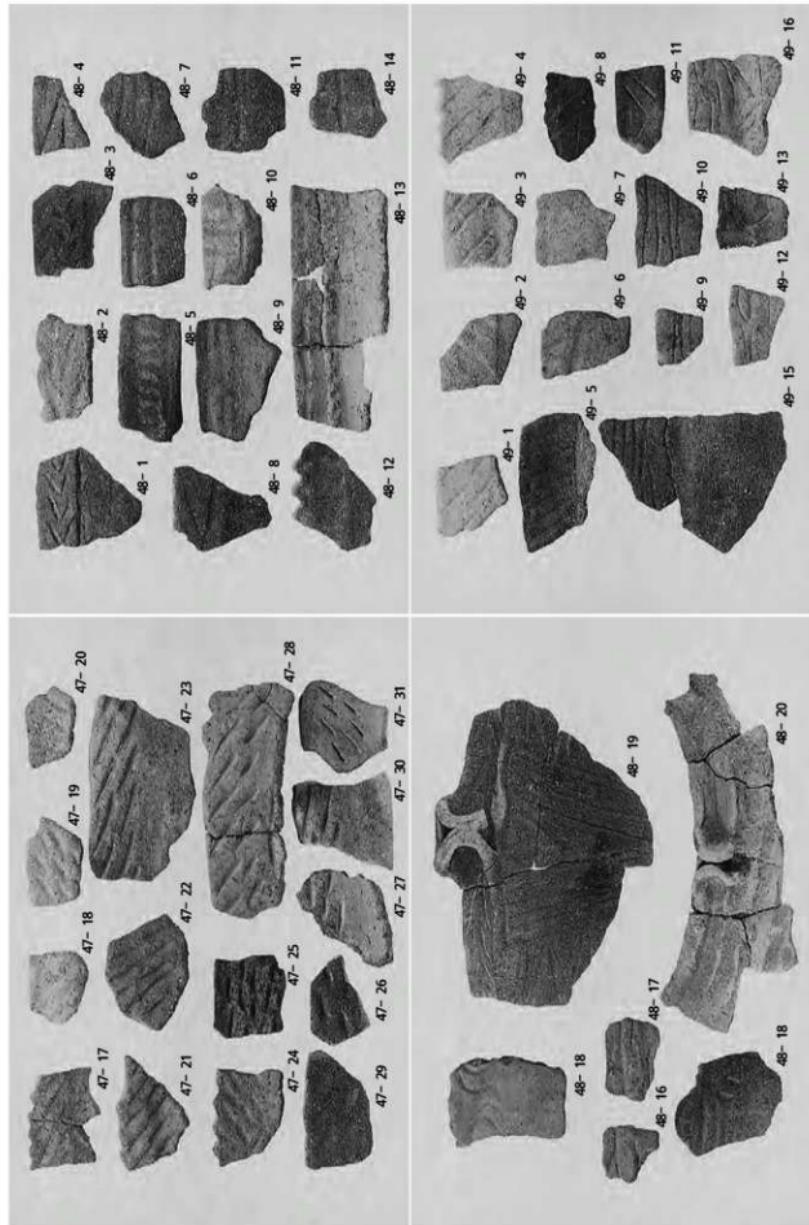
2. I 区第2次調査
グリッドF・J間
ベルト内
土器出土状況
(東から)



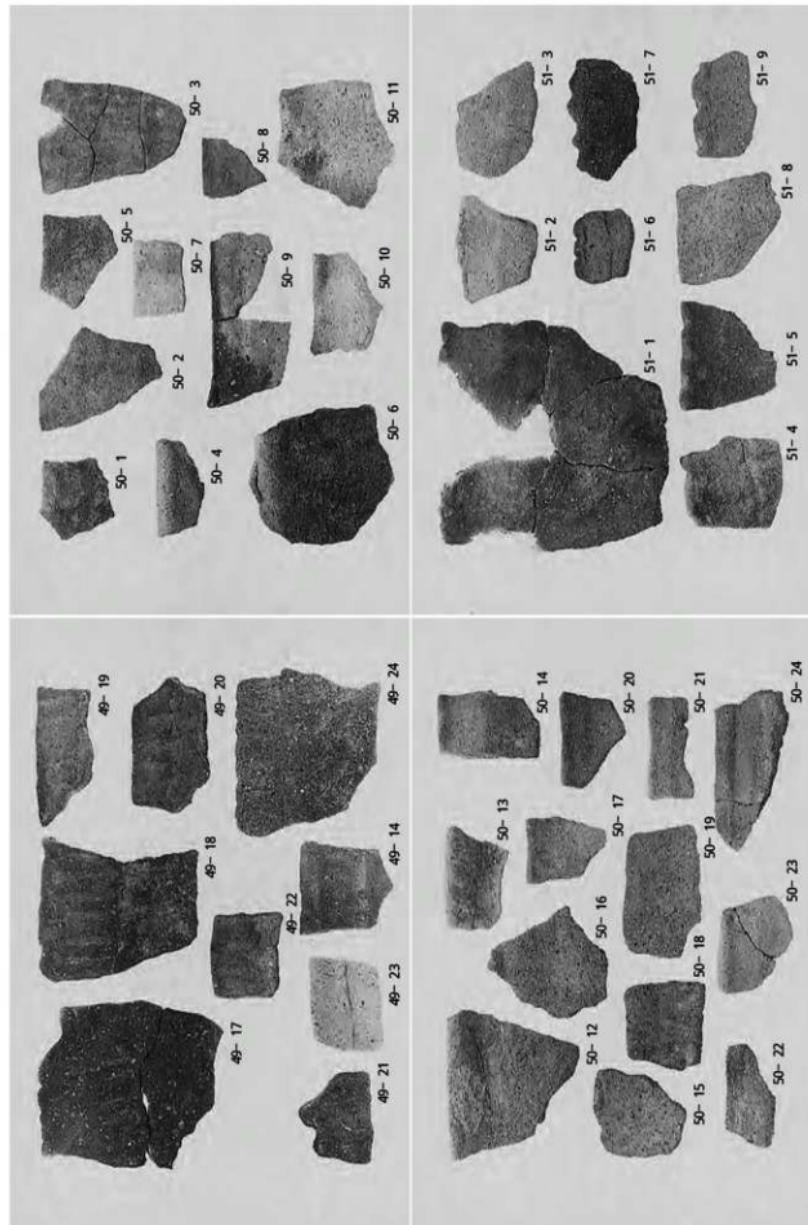
3. I 区第2次調査
グリッドKL内
小礫集中部
(東から)



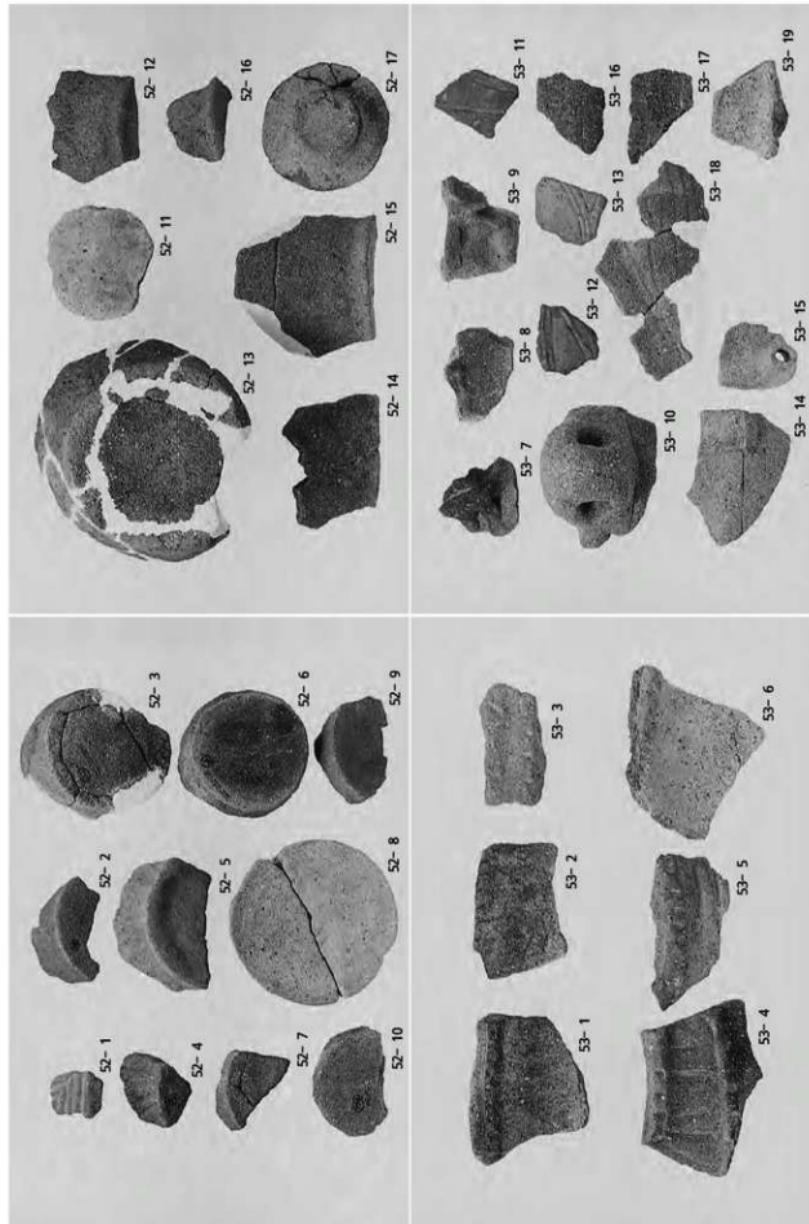
I区第2次調査出土土器①



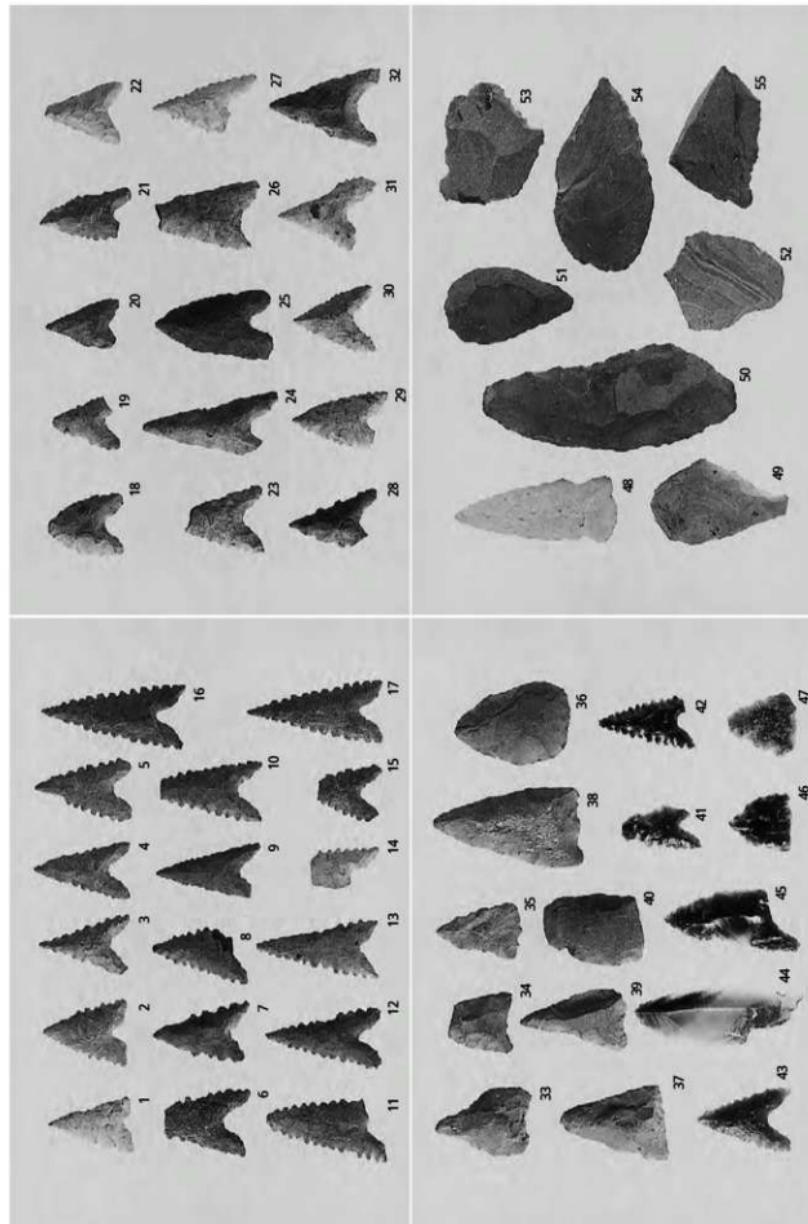
I区第2次調査出土土器②



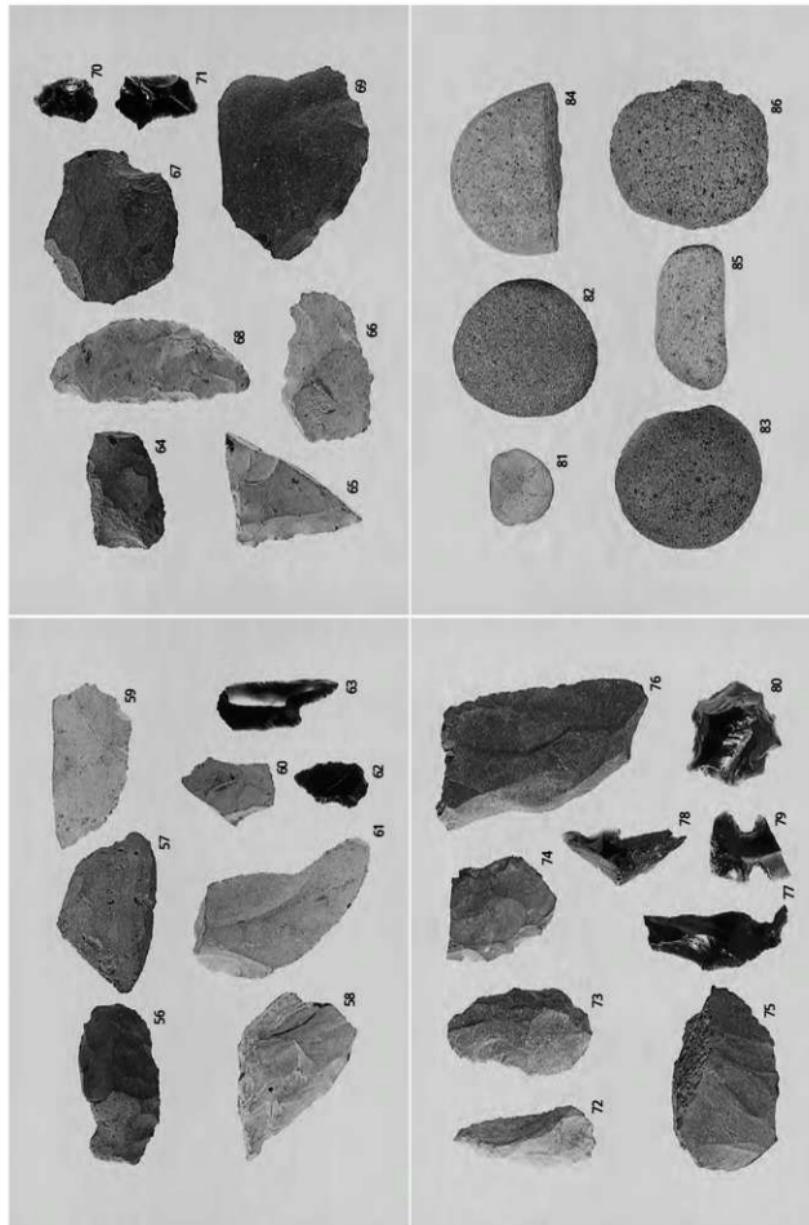
I区第2次調査出土土器③



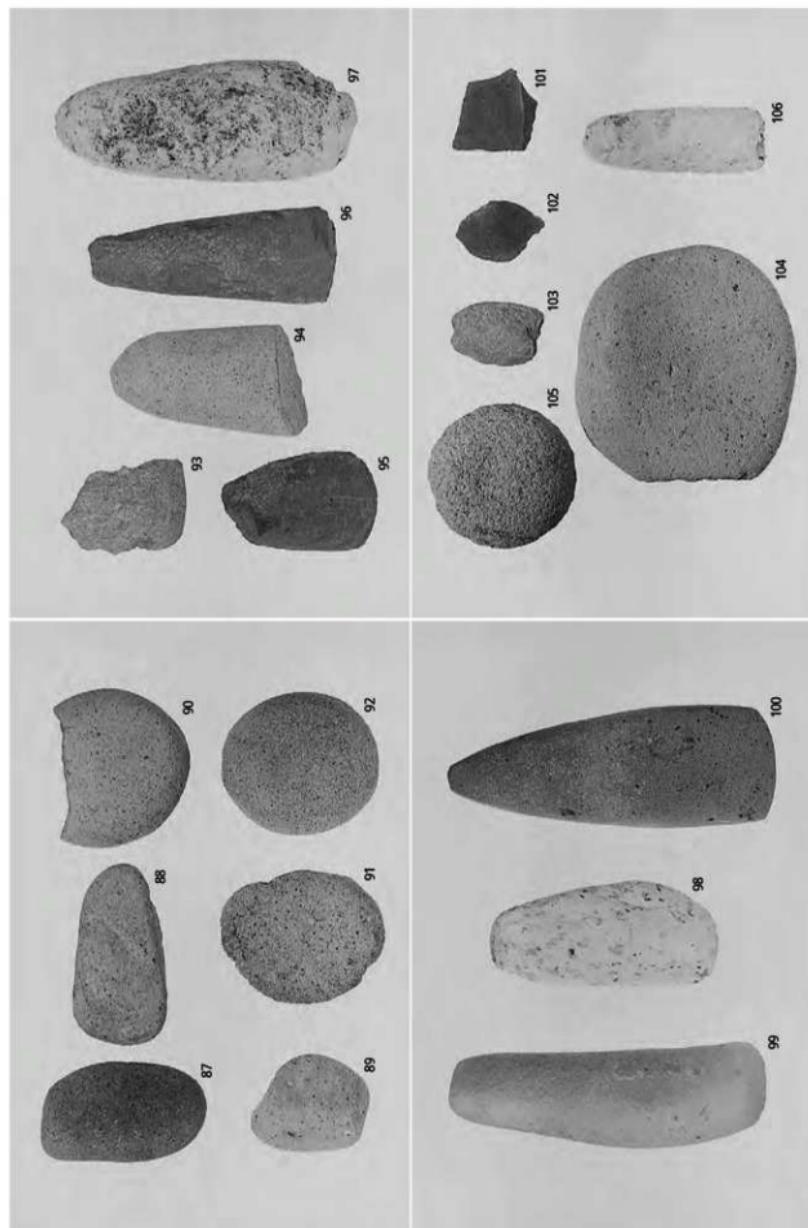
I区第2次調査出土土器(2)



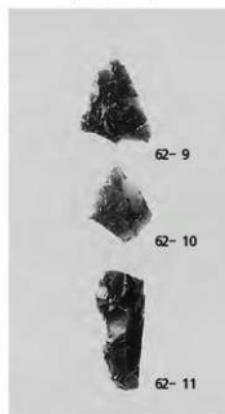
I区第2次調査出土石器①



I区第2次調査出土石器②



I区第2次調査出土石器①



4. 本吉遺跡III区出土石器



1. IV-1区全景
(北西から)



2. SD01土層(南から)





1. 本吉条里
8トレンチ完掘状況



2. 昭和46年
調査風景



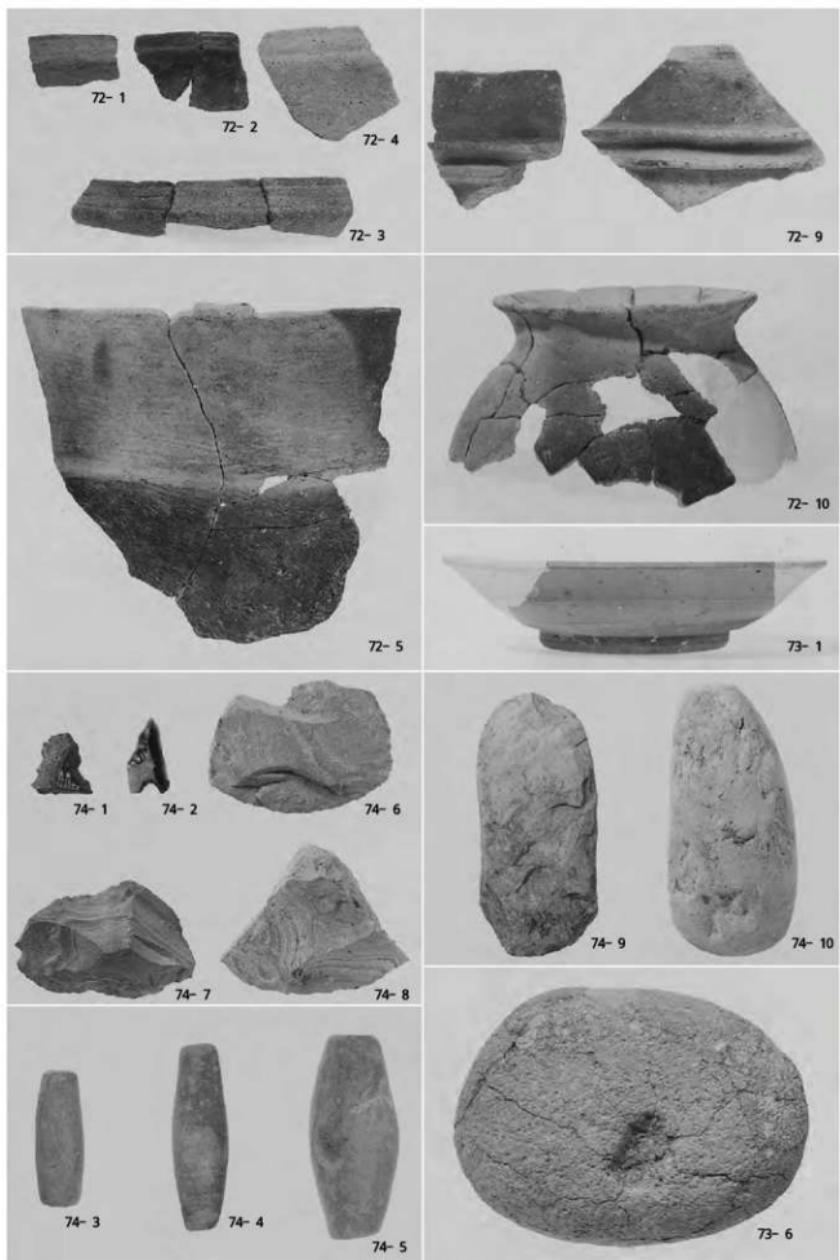
1. 本吉条里
21トレンチ北側東壁



2. 本吉条里
21トレンチ南側東壁



3. 本吉条里
25トレンチ東壁



本吉条里出土遺物

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 21	登録番号 2

本吉遺跡

(県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告)

福岡県文化財調査報告書第226集 下巻

平成22年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21番10号
TEL(092)411-0544